# 山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

春日市・柏田遺跡の調査

第 4 集

下 巻

1 9 7 7 福岡県教育委員会

## 山 陽 新 幹 線 関 係 埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告

春日市・柏田遺跡の調査

第 4 集

下 巻

#### 例 言

- 1. 本書は、昭和48年11月1日から昭和50年5月26日までに福岡県教育委員会が、日本国有鉄道下関工事局から委嘱されて、山陽新幹線建設のため破壊される柏田遺跡を発掘調査した報告書である。これは山陽新幹線関係調査報告書の第4集にあたる。
- 2. 本書の執筆分担は次のとおりである。

I	松岡	史・井上	裕弘
II		·····小池	史哲
<b>II</b>	馬田	弘稔・藤瀬	禎博
Ŋ		······富永	直樹
V — 1	松岡	史•小池	史哲
	高田	弘信•藤瀬	禎博
V-2 ····································	哲•石橋	新次•藤瀬	禎博
若月 省吾•橘 昌	信•大石	昇•西田	正規
Ⅴ-3小池 史	哲•安田	喜憲・藤原	宏志
V — 4 ······	小池	史哲•橘	昌信
VI	松岡	史•井上	裕弘
	馬田	弘稔・藤瀬	禎博
VII	井上	裕弘•藤瀬	禎博

- 4. 掲載の写真の撮影,実測図の作成および製図は,図版目次と挿図目次に示すとおりである。なお,一部実測・製図・執筆には,東中川忠美・石橋新次・大石昇氏並びに賀川光夫教授を中心とする別府大学考古学研究室の協力をえた。
- 5. 本書の編集は小池史哲が行なった。

### 本 文 目 次

木	白 E	丑)	貴	跡	の	調	査		
I	調		査		の	稻	E	過	
	1	<b>.</b>	₹1≀	次調	査の	経過	<u></u>	• • • • • •	
	2.	<b>.</b>	₹2 }	次調	査の	経過	Į	•••••	2
I	遺	跡	の	位	置.	٤	環	境	5
1.	層							序	{
	1.	E	3 歹	ij O	)	序		• • • • • •	{
*	2.		<b>,</b>	ij o	) 厘	身序	:	•••••	§
N	先	土	器	時	代	の	遺	物	10
V	繩	文	诗亻	七の	遺	構	と遺	物	15
,	1.	. 道	Ì			椲	<b></b>	• • • • • •	13
		(1)	住		居	踋	·····		15
		(2)	土			塘	į	· · · · · ·	20
		(3)	溝	状	遺				21
		(4)	炉						21
		(5)	V		字				23
	2.	退	_						24
		(1)	•						24
		(2)							······26
		(3)							8(
		( <del>4</del> )		跟!	次 イ				91
		(5)	石	J- 7	TI'V.				······93
		(6)		まめ	メル				
		(7) (8)	刃	:ms •	T 4-1				
		(9)	口石		ハ 1				
		(10)	北影	124	12				
		1777	100			нн			104

		(11)	石		錐	<b>16</b> 6
		(12)	サイド	·ブレイ	۴	170
		(13)	削		器	172
		(14)	搔		器	177
		(15)	石		<b>錘······</b>	189
		(16)	石		斧	193
		(17)	磨		石······	198
		(18)	石		<b></b>	198
		(19)	砥		石······	198
		(20)	石	庖	丁	<b>20</b> 0
		(21)	装	身	具	200
		(22)	木 炭	*•種	子	201
	3.	自	然科学	茶の語	查·····	202
		(1)	泥土の	·花粉分	析	202
		(2)	プラン	<b>′ト・</b> オ	パール分析	211
	4.	お	お	b	۲	217
		(1)	立地条	:件をめ	でる問題	217
		(2)	出土後	期土器	ないて	221
		(3)	生産用	具をめ	ぐる問題	224
		( <del>4</del> )	西北九	州にお	ける黒曜石製の縦長剝片についての一考察	227
		(5)	折断技	法の考	察	235
		(6)	サイド	゚ブレイ	ドについて・・・・・・	239
VI	古	墳日	時代 🤈	り遺様	<b>毒と遺物</b>	261
	1.	遣	ţ		構	261
		(1)	住	居	跡	261
		(2)	円形竪	· 穴状遺	t構······	262
		(3)	方形	竪穴遺	構	262
		(4)	長 方	形 土	壙	262
		(5)	掘立机	主建物	跡	264
		(6)	旧河厂	状 遺	構	265
	2.	遣	ţ		物	267
		(1)	土	師	器	267
		(2)	須	惠	器	299

301				製 品…	木	(3)	•	
301				錘•石 錘	土	( <u>4</u> )		
302				石	彽	(5)		
302				玉	勾	(6)		
303			••••••	製 円 板…	<u> </u>	(7)		
304				) b 12	おお	3.		
312	•••••		遺物	の遺構とう	時代	歴 史	VII	
312				構…	遺	1.		
312				柱建物跡…	掘立	(1)		
317				状 遺 構…	溝	(2)		
318				物…	遺	2.		
318			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	Ы		(1)		
321		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	師 器…	<u>-1-</u> .	(2)		
324				惠 器…	須	(3)		
<b>32</b> 8			•••••	質土器…	土的	(4-)		
<b>32</b> 8			•••••	質 土 器…	瓦	(5)		
330			•••••	器…	磁	(6)		
335			•••••	り に…	おれ	3.		
		F-1 \\.\.	n <del>-</del>	िक्र विकास				
		目 次	版	図				
<b>対照頁</b>	本文文							
13		已撮影)	<b> 手真(松岡</b>	遺跡遠景航空	(1)	版 1	図	
	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •							
	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •					2		
13	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	户哲撮影) ···········	写真(小池)	遺跡全景航空	(2)			
…13		上写真(松岡撮影)	7区全景地	$A \cdot B - 5 \sim$	(1)	3		
…13		(井上撮影)	景航空写真	B 4~5区全	(2)			
13		<b>に撮影)</b>	景(宮崎貴	B 1~3区全	(1)	4		
…13		纟)	景(松岡撮	B 1~3区全	(2)			
13		纟)	景(小池撮	B 4~5区全	(1)	5		

		(2)	B5~7区全景(小池撮影) ······13
	6	(1)	B7~8区全景(小池撮影) ······13
,		(2)	B10~14区全景(小池撮影) ·····13
	7	(1)	A · B - 8 ~ 9 区全景 (小池撮影) ······13
		(2)	A·B-8~9区全景(小池撮影) ······13
•	8	(1)	1号住居跡全景(松岡撮影) 14
		(2)	1号住居跡全景(松岡撮影)14
	9	(1)	1号住居跡遺物出土状況(松岡撮影)14
		(2)	1号住居跡遺物出土状況(松岡撮影)14
	<b>1</b> 0	(1)	住居跡群全景(小池撮影)13
		(2)	2 号住居跡全景(小池撮影)14
	11	(1)	3 ・ 5 号住居跡全景 (小池撮影)18
		(2)	6 号住居跡全景(小池撮影)18
	12	(1)	4 号住居跡全景(小池撮影) 18
		(2)	4号住居跡遺物出土状況(小池撮影)18
	13	(1)	1号土壙全景(松岡撮影)20
		<b>(2)</b>	2 号土壙全景(松岡撮影)20
	14	(1)	1号土壙遺物出土状況(松岡撮影) 20
		(2)	1号土壙遺物出土状況(松岡撮影)20
	15	(1)	1号土壙遺物出土状況(松岡撮影) 20
		(2)	1 / 方土壙遺物出土状況(松岡撮影)20
	16	(1)	溝状遺構全景(松岡撮影)······21
		(2)	溝状遺構全景(宮崎撮影) 21
	17	(1)	溝状遺構遺物出土状況(小池撮影)21
		(2)	溝状遺構遺物出土状況(小池撮影)21
	18	(1)	溝状遺構遺物出土状況(宮崎撮影)21
		(2)	溝状遺構遺物出土状況(宮崎撮影)21
	19	(1)	溝状遺構遺物堆積状況(小池撮影)21
		(2)	溝状遺構土層堆積状況(小池撮影)21
	20	(1)	炉跡全景(小池撮影)21
		(2)	炉跡全景(小池撮影)21
	21	(1)	V字溝全景(小池撮影) ·······23
		(2)	V字溝全景(小池撮影)23

	22	(1) V字溝土層堆積状況 (小池撮影) ·······················23
		(2) V字溝土層堆積状況 (小池撮影) ········23
	23	繩文時代中期土器(小池撮影) 24
	24	繩文時代後期土器(小池撮影)26
	25	繩文時代後期土器(小池撮影)26
	26	繩文時代後期土器(小池撮影)26
	27	繩文時代後期土器(小池撮影)26
	28	繩文時代後期土器(小池撮影)26
	29	繩文時代晚期土器(小池撮影)80
	30	(1) 先土器時代の遺物 (小池撮影)10
		(2) 尖頭状石器 (小池撮影)91
	31	石鏃(小池撮影)93
	32	石鏃(小池撮影)93
	33	石鏃(小池撮影)93
	34	つまみ形石器(小池撮影) 113
	35	つまみ形石器(小池撮影) 113
	36	つまみ形石器(小池撮影) 113
	37	つまみ形石器(小池撮影) 113
	38	つまみ形石器(小池撮影) 113
	39	刃器(小池撮影)
	40	刃器(小池撮影) 143
	41	(1) 台形状石器 (小池撮影)
		(2) 石核 (小池撮影) 158
,	42	(1) 影器 (小池撮影) 162
		(2) 石錐 (小池撮影)
	43	サイドブレイド・削器・搔器 (小池撮影)
•	44	石錘(小池撮影) 189
	45	石斧 (小池撮影)
	46	石斧 (小池撮影)
	47	石斧 (小池撮影)
	48	磨石・石皿・砥石・石庖丁 (小池撮影)
	49	(1) 木炭・種子 (西田正規撮影)
		(2) 基身具 (小油掃影)

50	板付遺跡 J -23地区の花粉ダイアグラム(安田喜憲作成) 210
51	長崎県里田原遺跡 I - 6 トレンチの花粉分布図(安田作成) 210
52	プラント・オパール顕微鏡写真 (藤原宏志撮影) 211
53	プラント・オパール顕微鏡写真(藤原撮影) 211
54	プラント・オパール顕微鏡写真(藤原撮影) 211
55	プラント・オパール顕微鏡写真 (藤原撮影) 211
56	プラント・オパール顕微鏡写真(藤原撮影) 211
57	プラント・オパール顕微鏡写真(藤原撮影) 211
58	(1) 7号住居跡全景(松岡撮影)
	(2) 8 号住居跡全景(小池撮影) 261
59	(1) 円形竪穴状遺構 (小池撮影)
	(2) 円形竪穴状遺構内土器出土状態(小池撮影) … 262
60	(1) 1号方形竪穴遺構 (松岡撮影)
	(2) 2 号方形竪穴遺構 (小池撮影) 262
61	(1) 1 号長方形土壙 (小池撮影)
	(2) 完掘後の1号長方形土壙(小池撮影) 262
62	(1) 1号長方形土壙内土器出土状態(小池撮影) … 262
	(2) 1号長方形土壙内土器出土状態 (三村修次撮影) … 262
63	(1) 1号長方形土壙 (小池撮影)
	(2) 2 号長方形土壙 (小池撮影)
64	(1) A 9 · B 9 区全景 (小池撮影) ······ 264
	(2) 1 • 2 号掘立柱建物跡全景 (小池撮影) 264
65	(1) 1号掘立柱建物跡全景(小池撮影)
	(2) 2 号掘立柱建物跡全景 (小池撮影)
66	(1) 旧河川状遺構(松岡撮影) 265
	(2) 旧河川状遺構と堆積土層(松岡撮影) 265
67	7号住居跡出土土師器 (1) (井上撮影) 268
68	7号住居跡出土土師器 (2) (井上撮影) 269
69	7 号住居跡出土土師器 (3) (井上撮影) 270
70	8 号住居跡出土土師器(井上撮影) 274
71	円形竪穴状遺構・2号方形竪穴遺構出土土師器(井上撮影) ······ 276
72	(1) 2 号方形竪穴遺構出土土師器 (井上撮影) … 278
	(2) 1 号長方形土壙出土土師器 (1) (井上撮影) 279
73	1号長方形土壙出土土師器(2)(井上撮影)

			(2) 旧河川状遺構出土土師器 (1) (井上撮影) 2	83
		75	5 旧河川状遺構出土土師器 (2) (井上撮影) 24	84
		76	6 旧河川状遺構出土土師器(3)(井上撮影) 24	85
		77	7 旧河川状遺構出土土師器 ⑷ (井上撮影) 24	86
		78	8 旧河川状遺構出土土師器 (5) (井上撮影) 20	88
		79	9 包含層出土土師器 (1) (井上撮影)	90
		80	D 包含層出土土師器 (2) (井上撮影) ······ 29	91
		81	1 包含層出土土師器(3)・土製品・石製品(井上撮影)2	99
		82	2 (1) 7号掘立柱建物跡全景 (小池撮影)	13
			(2) 8号掘立柱建物跡全景(小池撮影)	14
		83	3 軒丸瓦・丸瓦・平瓦 (井上撮影)	18
		84	4 丸瓦·平瓦 (井上撮影) ······ 32	20
		85	5 丸瓦·平瓦 (井上撮影) ······ 32	20
		86	6 丸瓦·平瓦 (井上撮影) ······ 32	20
		87	7 土師器(井上撮影) 32	21
		88	8 白磁 (井上撮影)	30
		89	9 (1) 白磁 (井上撮影)	31
			(2) 青磁 (井上撮影) 33	32
,		90	O 青磁(井上撮影) ······· 33	34
			揮 図 目 次	
第	1	図	山陽新幹線の路線と博多車輛基地の位置(佐々木隆彦作成)	4
第	2	図	山陽新幹線博多総合車輛基地付近地形図及び遺跡分布図	
			(日本国有鉄道原図1:5,000 木下修作成)折込.	み
第	3	図	柏田遺跡地形全体図(日本国有鉄道原図1:1,000 小池史哲製図)折込。	
			春日 • 那珂川地区繩文時代遺跡分布図	
,			(国土地理院地形図福岡南部・不入道1:25,000 小池作成) 折込。	み
第	5	図	先土器時代の遺物実測図(小池・富永直樹実測,小池製図)	
			1 号住居跡実測図(松岡史・馬田弘稔・市川富久・織笠昭・	
			川道寛・稲富裕和実測,松岡製図)	15

74 (1) 2号長方形土壙出土土師器 (井上撮影) …… 280

第	7	図	$2 \cdot 4$ 号住居跡実測図(小池・藤瀬禎博・高田弘信実測,高田製図) $\cdots 16$
第	8	図	3 ・ 5 ・ 6 号住居跡実測図 (小池・藤瀬・高田実測,高田製図)17
第	9	図	1号土壙実測図(馬田·市川実測,高田製図) ······19
第	10	図	2·3号土壙実測図(馬田·市川実測,高田製図) ······20
第	11	図	炉跡実測図(小池実測,高田製図)21
第	12	図	V字溝実測図(小池・藤瀬・高田実測,高田製図) ······22
第	13	図	V字溝土層図 (小池・藤瀬・高田実測, 高田製図)23
第	14	図	中期土器拓影(小池実測,手拓)25
第	15	図	1号住居跡出土土器(1) 実測図(若月省吾実測,小池製図)28
第	16	図	1号住居跡出土土器(2) 実測図(若月実測,小池製図)29
第	17	図	1号住居跡出土土器(3) 実測図(若月実測,小池製図)30
第	18	図	1号住居跡出土土器 (4) 実測図 (若月実測,小池製図)31
第	19	図	1号住居跡出土土器 (5) 実測図 (若月実測, 小池製図)32
第	<b>2</b> 0	図	1~3号住居跡出土土器拓影(若月手拓)34
第	21	図	3 · 4 号住居跡出土土器拓影(小池手拓) · · · · · · · · · · · · · · · · · · 35
第	22	図	4号住居跡出土土器実測図(若月実測,製図)36
第	23	図	4~6号住居跡出土土器拓影(小池手拓)37
第	24	図	1号土壙出土土器実測図(若月実測,小池製図)38
第	25	図	住居跡周辺出土土器 (1) 拓影 (若月•石橋新次手拓)43
第	26	図	住居跡周辺出土土器 (2) 拓影 (若月・石橋手拓)45
第	27	図	住居跡周辺出土土器 (3) 拓影 (若月・石橋手拓)47
第	28	図	住居跡周辺出土土器 (4) 拓影 (若月·石橋手拓) ······49
第	29	図	住居跡周辺出土土器 (5) 実測図 (若月·石橋実測,石橋製図) ······53
第	30	図	住居跡周辺出土土器 (6) 実測図 (若月・石橋実測,石橋製図)57
第	31	図	底部接合手法模式図(石橋作成)59
第	32	図	底部径計測値分布(石橋作成)59
第	33	図	溝状遺構出土土器(1) 実測図(小池実測,製図)61
第	34	図	溝状遺構出土土器 (2) 実測図 (小池実測, 製図)62
第	35	図	溝状遺構出土土器 (1・2) 拓影 (小池手拓)63
第	36	図	溝状遺構出土土器 (3) 拓影 (小池手拓)64
第	37	図	溝状遺構出土土器 (4) 拓影 (小池手拓)65
第	38	図	溝状遺構出土土器(5)拓影(小池手拓) · · · · · · · · · 67
第	39	図	溝状遺構出土土器(6)拓影(小池手拓)68
第	40	図	溝状遺構出土土器 (7) 拓影 (小池手拓)69

第 41 図	溝状遺構出土土器 (8) 拓影 (小池手拓)70
第 42 図	溝状遺構出土土器(9)拓影(小池手拓)71
第 43 図	溝状遺構出土土器 (10) 拓影 (小池手拓)73
第 44 図	溝状遺構出土土器 (11) 拓影 (小池手拓)74
第 45 図	溝状遺構出土土器 (2) 実測図 (小池実測,製図)75
第 46 図	溝状遺構出土土器 (3) 拓影 (小池手拓)76
第 47 図	溝状遺構出土土器 (4) 拓影 (小池手拓) ·······77
第 48 図	溝状遺構出土土器 (5) 拓影 (小池手拓) ·······78
第 49 図	溝状遺構出土土器 (Li) 拓影 (小池手拓) ······79
第 50 図	晩期土器 (1) 実測図 (藤瀬・小池実測,藤瀬製図)82
第 51 図	晩期土器 (2) 拓影 (若月・藤瀬手拓) ······86
第 52 図	晩期土器 (3) 拓影 (若月・藤瀬手拓) ······89
第 53 図	尖頭状石器実測図(富永・小池実測,小池製図)92
第 54 図	石鏃の地区別分布(小池作成)93
第 55 図	石鏃実測図 (1) (小池・富永実測, 小池製図)94
第 56 図	石鏃実測図 (2) (小池・富永実測, 小池製図)96
第 57 図	石鏃実測図 (3) (小池·富永実測,小池製図) ······98
第 58 図	石鏃実測図 (4) (小池・富永実測, 小池製図)
第 59 図	石鏃実測図 (5) (小池実測,製図)
第 60 図	石鏃実測図 (6) (小池・富永実測, 小池製図)
第 61 図	石鏃実測図 (7) (小池・富永実測, 小池製図)
第 62 図	石鏃実測図 (8) (小池・富永実測, 小池製図)
第 63 図	石鏃実測図 (9) (小池実測, 製図) 110
第 64 図	石鏃実測図 (10) (小池実測,製図)
第 65 図	つまみ形石器実測図 (1) (小池・富永実測,小池製図) 114
第 66 図	つまみ形石器実測図 (2) (小池実測,製図)
第 67 図	つまみ形石器実測図 (3)(小池実測,製図)
第 68 図	つまみ形石器実測図 ⑷(小池実測,製図) 120
第 69 図	つまみ形石器実測図 (5)(小池実測,製図) 122
第 70 図	つまみ形石器実測図 (6) (小池・富永実測,小池製図) 124
第71図	つまみ形石器実測図 (7)(富永実測,小池製図)
第72図	つまみ形石器実測図 (8)(富永実測,小池製図)
第 73 図	つまみ形石器実測図 (9) (小池実測,製図)
第 74 図	つまみ形石器の地区別分布(小池作成) 131

第75図	つまみ形石器実測図 (40) (小池・富永実測, 小池製図)	132
第 76 図	つまみ形石器実測図 (山) (小池・富永実測, 小池製図)	134
第77図	つまみ形石器実測図 (2) (小池実測, 製図)	136
第 78 図	つまみ形石器実測図 ધ3 (小池・富永実測,小池製図)	<b>13</b> 8
第 79 図	つまみ形石器実測図 (4)(小池・富永実測,小池製図)	140
第 80 図	つまみ形石器実測図 ધり (小池実測, 製図)	142
第81図	刃器実測図(1)(小池・富永実測,小池製図)	145
第82図	刃器実測図 (2) (小池・富永実測, 小池製図)	146
第83図	刃器実測図(3)(小池・富永実測,小池製図)	148
第84図	刃器実測図(4)(小池・富永実測,小池製図)	<b>15</b> 0
第 85 図	刃器実測図 (5) (小池・富永実測,小池製図)	151
第 86 図	刃器実測図 (6) (小池・富永実測, 小池製図)	<b>15</b> 3
第 87 図	刃器実測図(7)(小池・富永実測,小池製図)	<b>15</b> 5
第 88 図	台形状石器実測図(小池・富永実測,小池製図)	157
第89図	石核実測図 (1) (小池実測,製図)	159
第 90 図	石核実測図 (2) (小池実測,製図)	<b>16</b> 0
第 91 図	彫器実測図(1)(小池・富永実測,小池製図)	<b>16</b> 3
第 92 図	彫器実測図 (2) (小池・富永実測,小池製図) ·····	164
第 93 図	石錐実測図 (1) (小池実測,製図)	167
第 94 図	石錐実測図(2)(小池·富永実測,小池製図) ······	168
第 95 図	サイドブレイド・不明石器実測図(小池・富永実測,小池製図)	171
第 96 図	削器・搔器実測図 (1) (小池・富永実測, 小池製図)	173
第 97 図	削器・搔器実測図 (2) (小池・富永実測, 小池製図)	174
第 98 図	削器・搔器実測図 (3) (小池・富永実測, 小池製図)	176
第 99 図	削器・搔器実測図 (4) (小池・富永実測, 小池製図)	177
第100図	削器・搔器実測図 (5) (藤瀬・富永実測, 小池製図)	181
第101図	削器・搔器実測図 (6) (藤瀬・富永実測, 小池製図)	183
第102図	削器・搔器実測図 (7) (藤瀬・富永実測, 小池製図)	185
第103 図	削器・搔器計測値分布(藤瀬作成)	187
第104図	石錘実測図(小池·富永実測,小池製図) ·······	190
第105 図	石錘の地区別分布(小池作成)	191
第106図	and the second s	
第107図	石錘の重量分布(小池作成)	193
	石斧実測図(1)(井上裕弘・富永・小池実測,小池製図)	

第 109 図	石斧実測図 (2) (井上・富永・小池実測, 小池製図)
	石斧実測図 (3) (井上・富永・小池実測, 小池製図) 196
	磨石・石皿・砥石・石庖丁実測図
No III 🖂	(大石昇・富永・小池・井上実測,大石製図) 199
第112図	装身具実測図(大石実測,製図)
	地形分類図(安田喜憲作成)····································
	花粉分析試料採取A·B地点(小池作成,高田製図) 203
	花粉分析試料採取C地点(小池作成,高田製図)
	花粉分析試料採取地点の層序(安田作成) 204
第117 図	イネ科植物珪酸体標本の作製(藤原宏志作成) 213
第118 図	土壌試料の定性分析(藤原作成) 213
第119 図	土器片の定性分析(藤原作成) · · · · · · · · 213
第120 図	<ul><li>縄文時代遺跡時期別分布(小池作成)</li></ul>
第121 図	石鏃の長さと幅による分布 (小池作成) · · · · · · · 225
第122 図	7号住居跡実測図(松岡・馬田・市川・織笠・川道実測,松岡製図)折込み
第123 図	円形竪穴遺構実測図 (藤瀬・高田実測,高田製図)
第124 図	1号方形竪穴遺構実測図(市川実測,高田製図) ························· 264
第:125 図	2号方形竪穴遺構実測図(藤瀬実測、高田製図)
第126 図	長方形土壙実測図 (富永・三村実測,高田製図)折込み
第127図	1 · 2 号建物跡実測図 (藤瀬 · 高田実測, 高田製図) ············· 266
第128 図	7号住居跡出土土師器実測図 (1) (井上·東中川忠美実測,井上製図) ··· 268
第129図	7 号住居跡出土土師器実測図(2)(井上・東中川実測,井上製図) 269
第130 図	7号住居跡出土土師器実測図(3)(井上·東中川実測,井上製図) ······· 272
第131 図	7号住居跡出土土師器実測図 (4) (井上·東中川実測,井上製図) ······· 273
第132 図	8号住居跡出土土師器実測図(井上実測,製図)
第133 図	円形竪穴状遺構, 1·2号方形竪穴遺構出土土師器実測図
	(井上実測,製図)
第134 図	2号方形竪穴遺構出土土師器実測図(井上・東中川実測,井上製図) 278
第135 図	1号長方形土壙出土土師器実測図(井上実測,製図)281
第136 図	1 • 2 号長方形土壙出土土師器実測図(井上実測,製図) 282
第137 図	旧河川状遺構出土土師器実測図 (1) (井上・東中川実測,井上製図) ····· 284
第138図	旧河川状遺構出土土師器実測図(2)(井上·東中川実測,井上製図) ····· 286
第139 図	旧河川状遺構出土土師器実測図(3)(井上·東中川実測,井上製図) ····· 287
第140 図	旧河川状遺構出土土師器実測図(4)(井上・東中川実測,井上製図) …折込み

第141 図 名	包含層出土土師器実測図(1)(井上・東中川実測,井上製図) 291
第142 図 名	包含層出土土師器実測図 (2)(井上・東中川実測,井上製図) 293
第143 図 名	包含層出土土師器実測図 (3)(井上・東中川実測,井上製図) 294
第144 図 包	包含層出土土師器実測図 ⑷ (井上・東中川実測,井上製図) 297
第145 図 包	包含層出土土師器実測図 (5) (井上・東中川実測, 井上製図) <b>298</b>
第146 図 多	頁恵器実測図(藤瀬実測,製図) 299
第147図 >	木器実測図(馬田実測,製図)······300
第148図 -	土製品・石製品実測図(井上・小池・大石・富永実測, 小池製図) 302
第149 図 石	低石実測図(大石実測,製図)······ 303
第150図	3 ・ 4 号建物跡実測図(井上・小池実測,高田製図) 313
第151 図	5 ・ 6 号建物跡実測図(藤瀬・高田実測,高田製図) 315
第 152 図	7 ・ 8 号建物跡実測図(小池・高田実測,高田製図) 316
第153 図	9号建物跡実測図(藤瀬・高田実測,高田製図) 317
第154 図 韓	軒丸瓦・丸瓦・平瓦実測図(井上実測,製図) 319
第155 図 1	5.拓影図(井上手拓)折込み
第156 図 二	上師器実測図(1)(大石実測,井上製図) 322
第157 図 二	土師器実測図 (2)(大石実測,井上製図) ······ 323
第158 図 箱	御笠川南条坊遺跡との対比(井上作成) <b>324</b>
第159図 多	頁惠器実測図(藤瀬実測,製図) 326
第160図 多	頁恵器,土師質土器実測図(藤瀬・大石実測,井上製図) 329
第161 図 -	土師質・瓦質土器実測図(大石実測, 井上製図) 3 <b>3</b> 0
第162 図 日	自磁 <b>実</b> 測図(井上実測,製図) 331
第163 図 青	育磁実測図(井上実測,製図)·······333
	表 目 次
表 1 山	山陽新幹線関係遺跡一覧表(靏久嗣郎作成)折込み
表 2 着	<b>拳日・那珂川地区縄文時代遺跡地名表(小池史哲作成)7</b>
表 3 5	· 七土器時代遺物計測表(小池作成)·······11
表 4 9	尖頭状石器計測表(小池作成) 92
表 5 石	5鏃計測表 (1) (小池作成)95
表 6 石	S鏃計測表 (2) (小池作成) ·····97
表 7 石	5鏃計測表 (3) (小池作成)96
表 8 石	- S鏃計測表 (4) (小池作成) ····································

表	9	石鏃計測表 (5) (小池作成) 103
表	10	石鏃計測表 (6) (小池作成) 105
表	11	石鏃計測表 (7) (小池作成) 107
表	12	石鏃計測表 (8) (小池作成) 109
表	13	石鏃計測表 (9) (小池作成) 111
表	14	石鏃計測表 (10) (小池作成)
表	15	つまみ形石器計測表 (1) (小池作成) 115
表	16	つまみ形石器計測表 (2) (小池作成) 117
表	17	つまみ形石器計測表 (3)(小池作成) 119
表	18	つまみ形石器計測表 (4) (小池作成) 121
表	19	つまみ形石器計測表 (5) (小池作成) 123
表	20	つまみ形石器計測表 (6) (小池作成) 125
表	21	つまみ形石器計測表 (7) (小池作成) 127
表	22	つまみ形石器計測表 (8) (小池作成) 129
表	23	つまみ形石器計測表 (9) (小池作成) 131
表	24	つまみ形石器計測表 🕼 (小池作成) 133
表	25	つまみ形石器計測表 (山) (小池作成) 135
表	26	つまみ形石器計測表 (2)(小池作成)
表	27	つまみ形石器計測表 (3) (小池作成)
表	<b>2</b> 8	つまみ形石器計測表 14 (小池作成) 141
表	29	つまみ形石器計測表 (5) (小池作成) 143
裘	30	刃器計測表 (1) (小池作成) 147
表	31	刃器計測表 (2) (小池作成) 149
表	32	刃器計測表 (3) (小池作成) · · · · · · 152
表	33	刃器計測表 (4) (小池作成) 154
麦	34	刃器計測表 (5) (小池作成) ······ 156
表	35	台形状石器計測表(小池作成) 157
表	36	石核計測表(小池作成) 161
表	37	影器計測表(小池作成) 165
表	38	石錐計測表 (1) (小池作成) 169
表	39	石錐計測表 (2) (小池作成) 170
表	40	サイドブレイド・不明石器計測表(小池作成) 172
表	41	削器・搔器計測表 (1) (小池作成)
表	42	削器・搔器計測表 (2) (小池作成) 178

	表	43	削器・搔器計測表 (3) (藤瀬禎博作成)	185
	表	44	削器・搔器計測表 (生) (藤瀬作成)	186
	麦	45	石錘計測表(小池作成)	191
	表	46	石斧計測表(小池作成)	197
	表	47	磨石・石皿・砥石等計測表(大石昇作成)	<b>2</b> 00
	表	48	柏田遺跡における木炭分析結果(西田正規作成)	201
	表	49	花粉·胞子出現個体数 (安田喜憲作成) ······	206
	麦	50	土壌のプラント・オパール分析結果(藤原宏志作成)	214
	麦	<b>51</b>	出土土器のプラント・オパール分析結果(藤原作成)	214
	表	<b>52</b>	未掲載石器計測表(小池作成)	242
	表	53	1号建物跡計測表(高田弘信作成)	265
	表	54	2号建物跡計測表(高田作成)	265
	表	55	土錘·石錘計測表(小池作成)	301
	表	56	土師器の器種構成(井上作成)	306
	表	57	3号建物跡計測表(高田作成)	312
	表	58	4号建物跡計測表(高田作成)	314
·	表	59	5号建物跡計測表(高田作成)	314
	表	60	6号建物跡計測表(高田作成)	314
	麦	61	7号建物跡計測表(高田作成)	314
	麦	62	8号建物跡計測表(高田作成)	317
	麦	63	土師器皿計測表(井上作成)	321
	麦	64	土師器杯底部計測表(井上作成)	323
	表	65	磁器出土点数と比率(井上作成) ;	334
			付 図 目 次	
	付 図	1	梶原川流域縄文時代遺跡分布図(微地形図)(1/5000)(小池史哲作成,高	1500
	11 121	-	信製図)	ACITI 1
	付 図	2	柏田遺跡遺構配置図(井上裕弘・小池・藤瀬禎博・高田実測,高田製図)	
	付 図		柏田遺跡旧地形図(井上・小池・藤瀬・高田実測,高田製図)	
	付 図		柏田遺跡B列層序(松岡史・馬田弘稔・市川富久実測、高田製図)	
	付図		柏田遺跡C列層序(小池・藤順・高田実測,藤瀬製図)	<i>:</i>
	付 図	6	柏田遺跡溝状遺構実測図(井上・小池・藤瀬・高田実測,高田製図)	
	付 図	7	柏田遺跡古墳時代遺物分布図(井上作成,高田製図)	
	付 図	8	柏田遺跡歷史時代遺物分布図(井上作成,高田製図)	

#### Ⅵ 古墳時代の遺構と遺物

#### 1. 遺 構

確認された遺構は、竪穴住居跡 2, 掘立柱建物跡 2, 円形竪穴状遺構 1, 方形竪穴遺構 2, 長方形土壙 2, 旧河川状遺構 1 である。時期はすべて古墳時代前期のものである。遺物としては多くの土師器と土製品・木製品・石製品が若干出土した。

#### (1) 竪穴住居跡

7号住居跡 (図版58-1,第122図) 第3層から始まり第4層基盤層に床面を有する住居跡である。北側及び西側の大部分を橋脚基礎工事により失われ、南側半分が残るのみであり、全貌を知り得ない。しかしながら壁に東接して長楕円形坑が設けられ、壁沿に水はこの坑に流れ入る様になっている。他の遺跡における土師住居跡の調査で数多く経験した事であるが、かかる坑は住居跡片側の中央に位置する例が多数を占める事を考えられず、本住居跡もこの坑を境に北側にも同程度の拡がりをもつものと解釈できる。5.4m×6.8m、36.7㎡程度の隅丸方形の住居跡と見られ、比較的大住居とも言える。

壁沿いに溝が見られるが、埋められており、この溝は単なる水流しではなく壁体下部をこの中に埋め込み、外部から壁体素材に降り注いだ雨水の中、壁体に浸み込んだ水は流下してこの溝を通り中央の坑に溜り、地面の乾燥化と共に自然に土中に吸収されたものと思われる。柱穴は二本分南側に残り、掘り方と柱根部が明瞭に識別できる。恐らく四本柱であったと思われるが北半が失われて知る由もない。

住居跡内からは別項で述べる各器形の一括土師器類が床面から数cm浮いた情況で散乱して出土した。東壁寄りと中央部と西壁寄りに集中する傾向を示し、特に西壁寄りは大形壺を含み密集度が高く、恐らく西壁に接して炉が設けられたもとの思われる。

床と遺物との間は淡茶褐色の土塊混り黒色土が敷き固められ、住居竪穴掘削後床土として敷かれたものであろう。 (松岡 史)

8号住居跡 (図版58-2,第122図) B  $6-13\cdot 14$ 区で検出されたもので,縄文時代の  $3\cdot 5$ 号住居跡と一部複合している。本住居跡は,東壁側の一部を確認しただけで,その大半は

未発掘である。東辺4.05mを測るもので、耕作等によりかなり削平されているため、壁高は約5 cmと浅い。床面はさほどたたきしめられていない。柱穴・炉跡等についても不明である。出土遺物としては、壺・甕・杯・椀・高杯等の古式土師器がある。時期は古墳時代前期に属する。

#### (2) 円形竪穴状遺構 (図版59, 第123図)

 $B8-11\cdot 15$ 区で検出された円形をなす竪穴状の遺構である。 北辺と 東辺の一 部は 直線的で,他は円形をなす不整円形の竪穴で長径3.80m,短径3.30mを測る。上面が耕作によりかなりの削平されていることもあって,東側で26cmを測る他は, $2\sim 7cm$ と浅い。床面は緩い鍋底状を呈す。床面は住居跡のようなたたきしめはみられない。竪穴内には不規則な 4 個のピットがあるがしっかりしたピットは P1 のみであり,遺物とししても若干の古式土師器片を出土しただけで性格不明の竪穴である。時期は古墳時代前期に属する。

#### (3) 方形竪穴遺構

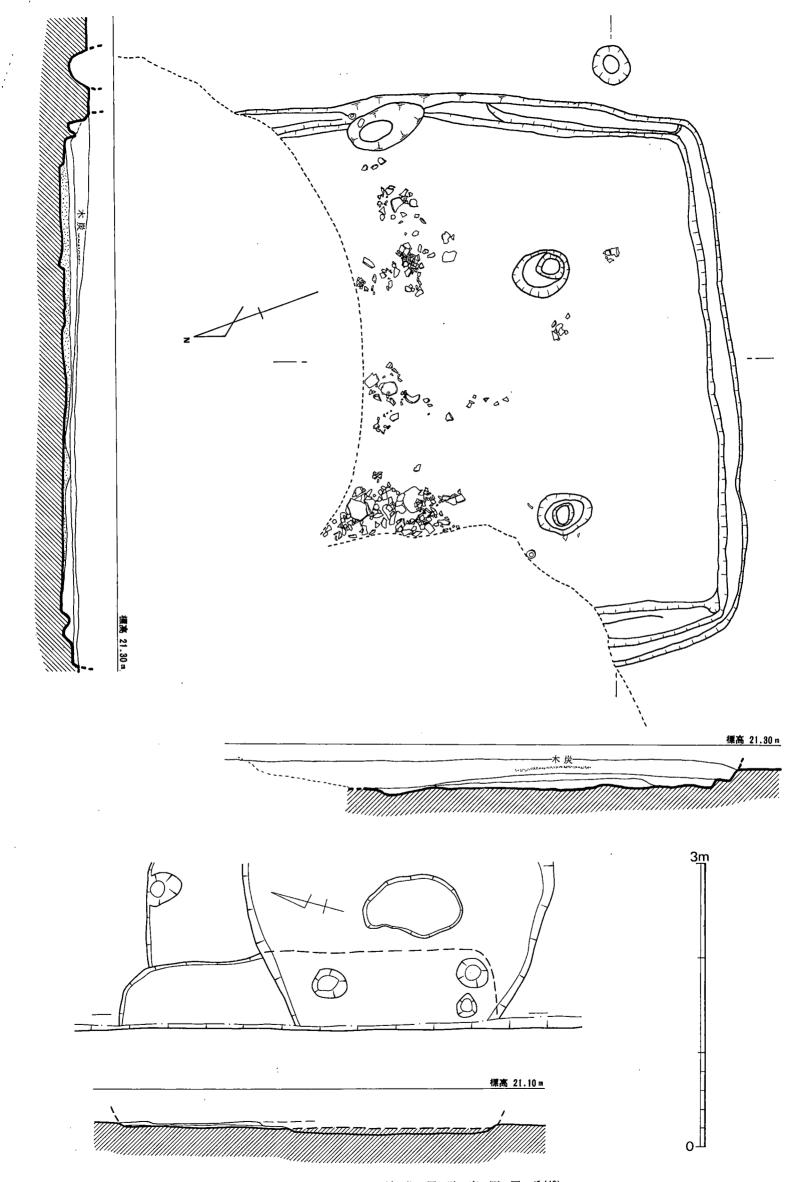
1号竪穴 (図版601,第124図) B5-15区で検出されたもので縄文時代の6号住居跡の北側に位置する。未発掘区を残すもので明確ではないが、ここでは1号と同種のものとしておく。北東~南西に長軸をもつ竪穴である。短辺は最大の所で1.20mを測り、壁高は北側で約18 cm、南側で約11cmを測り断面は緩いU字状をなす。床面には短辺側に2個のピットがある。出土遺物としては数片の古式土師器と土製勾玉1個が出土したのみである。時期は古墳時代前期である。 (井上裕弘)

2号竪穴 (図版60-2,第125図) 7号住居跡の東南側に土師器類が一括して遺存する坑があり床面は南側に深く、北に浅くなるもので、南辺に近く土師器が集中し、東側は水田の畔で切られて全形は判らず、西側は細く三角形の一角をなしている。遺存した土師器類には完形に復原可能なものを含み、7号住居跡の土師器類より僅かに先行する器形であった。

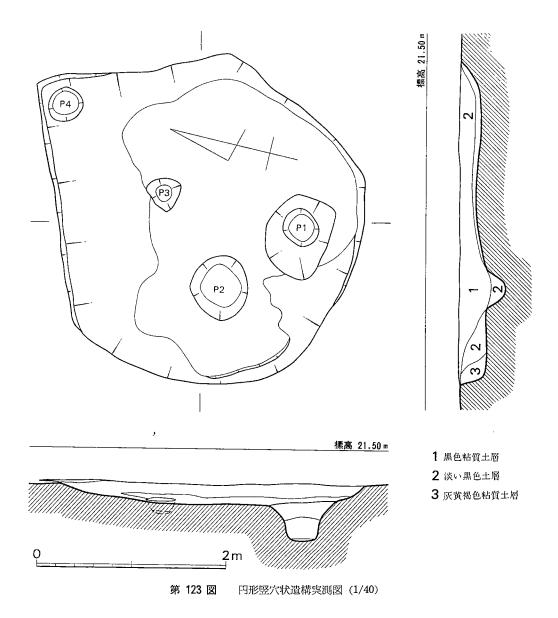
(松岡 史)

#### (4) 長方形土壙

1号土壙 (図版61~63,第126図2) B6—10・14区で検出されたもので,1号と同様,長軸をほぼ東西にもつ長方形の土壙である。東西4.70m×南北0.35m,深さは中央部で0.28mを測る。底面は西側に二段のテラスをもつ他は中央部にゆるやかに傾斜している。また,壙底中央部より少し東側には2号と同様,深さ30cmの楕円形のピットがある。そのピットの東側の壙内からは小型壺・甕・高杯等の多くの古式土師器が一括して発見された。時期は古墳時代前期である。

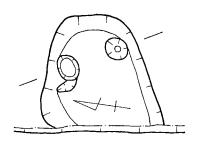


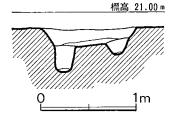
第122図 7 · 8 号 住 居 跡 実 測 図 (1/40)



**2号土壙** (図版63-2,第126図 1) B 7-9・13区で検出された,長軸をほぼ東西にもつ長方形の土壙である。東西3.10m×南北0.65m,深さは中央部に行くに従って深くなり,約0.3mを測る。さらに擴内中央部床面には北側に偏して 楕円形のピットが 存在する。出土遺物としては若干の古式土師器片がある。時期は古墳時代前期である。

**3号土壙** (第126図 3) B5-11区で発見されたもので、長軸をほぼ南北にもち、 $1\cdot 2$ 号とは万向を異にする。上面がかなり削平されているため、かならずしも明確ではないが、南



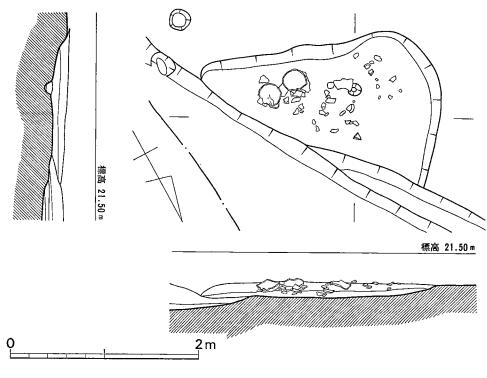


**第 124 図** 1 号方形竪穴遺構 実測図 (1/40)

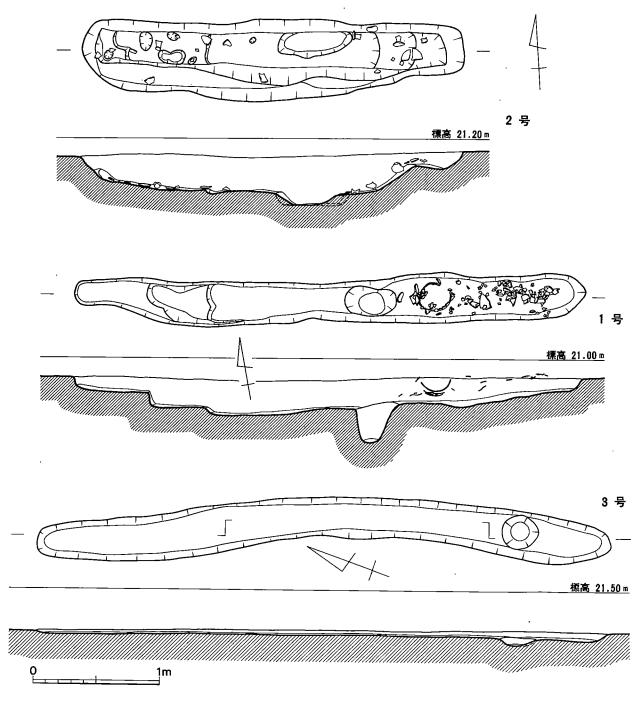
北4.5m×東西約0.33m,深さ5cmを測る。また底面 南側に偏して,直径29cm,深さ8cmのピットがある。 遺物としては若干の古式土師器片のみである。時期は 古墳時代前期である。

#### (5) 掘立柱建物跡

1 号建物跡 (図版64・65,第127図1・表52) B 9 —10・11区で検出された 1 間×1 間の建物跡で、梁間間220cm,桁行間308cmの長方形を呈す。桁行方位はN-14°15′-W を指す。柱穴の深さは平均39.75cmを測る。時期は Pit 内出土のほぼ完形の高杯の脚部から古墳時代前期に比定できる。



第 125 図 2 号方形竪穴遺構実測図 (1/40)



第126図 長方形土壙実測図 (1/30)

**2号建物跡** (図版64・65,第127図  $2 \cdot$ 表53) 1号建物跡の南側にほぼ 並んで 発見された。 1間×1間の建物跡で,南東隅の P 3 は歴史時代の溝により切られていたがわずかに痕跡をとどめていた。梁間間265cm,桁行間290cmの長方形を呈す。桁行方位は N-7°30'-W で,1号とわずかに異なる。柱穴の深さはほぼ 5.0cm内外で平均し,しっかりしている。時期はほぼ 1号と同様,古墳時代前期に比定できよう。 (井上裕弘)

表52 1 号建物跡計測表

(単位cm)

1間	〈1間	梁間間			桁行間	P	深さ	長 径	短 径
P 1	P 2	214.0	P 1	P 3	320.0	1	43	31	31
3	4	228.0	2	4	305.0	2	36	29	27
平	均	221.0	平	均	312.5	3	33	28	27
l				<del></del>	l .	4	47	30	25
				*		平均	39,75	29.5	27.5

表53 2号建物跡計測表

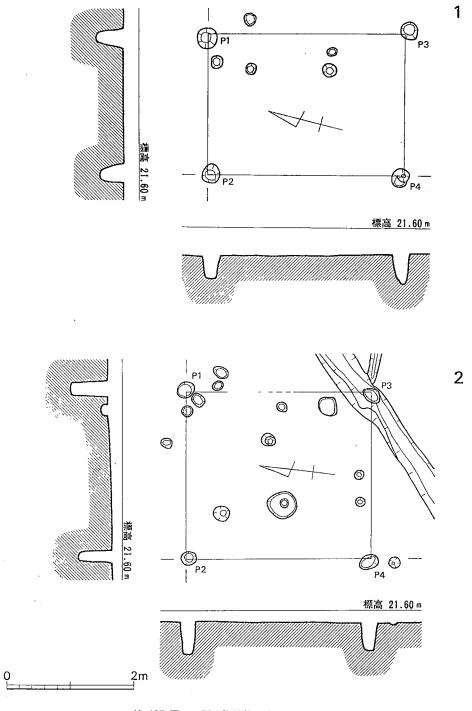
(単位cm)

1間>	〈1間	梁間間			桁行間	P	深さ	長 径	短 径
P 1	P 2	265.0	P 1	P 3	290.0	1	58	30	25
3	4	265.0	2	4	284.0	2	52	25	21
	均	265.0	亚	 均	287.0	3	44	30	21
<u> </u>			<u> </u>			4	50	30	22
						平均	51	28.75	11.25

#### (6) 旧河川状遺構 (図版66, 付図2)

縄文及び土師器を伴なう遺構の東側は地勢が低く傾斜する情況を示し、発掘区域の東側直角に二ケ所において調査を拡大した。その結果、遺跡の東側は古い河道であった事が判明し、その堆積層中に縄文土器・石器・弥生式土器片・土師器・漆器片・木器・木材片等が遺存し、層序は認められるものの、出土遺物の重なりは上下不同であり、上流から流下したものや一部は住居跡出土の土師器片と接合できるものもあり、土師の時期に活動した小川であった事を物語る。

なお縄文1号住居跡はこの川の曲流により浸蝕を受けており、縄文期には更に東側に流路をもった川である事を想わせる。 (松岡 史)



第 127 図 掘立柱建物跡実測図 (1/60)

#### 2. 遺 物

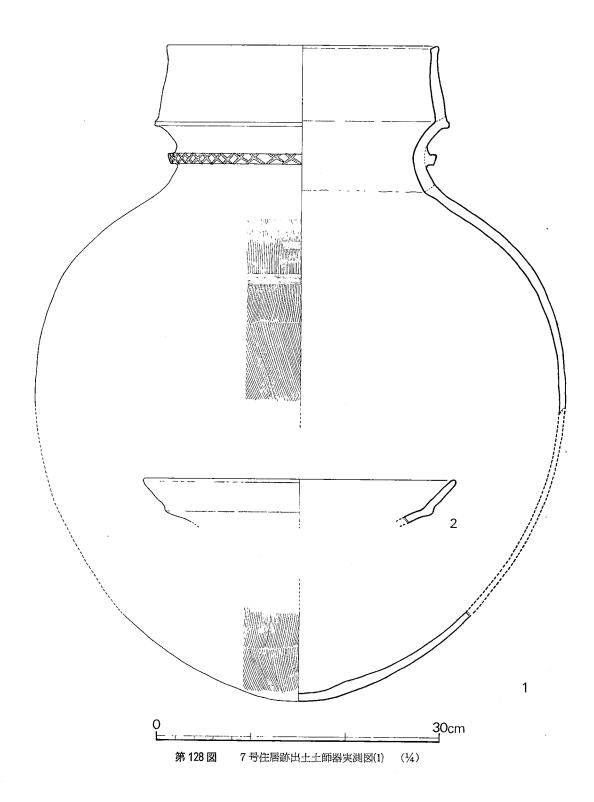
遺物としては、古墳時代前期の土師器がその大半を占め、壺・小型丸底壺・甕・杯・椀・鉢・甑・手揑・高杯・器台等がある。木器としては又鍬・杭・加工木材等があり、土製品として 勾玉・土錘・土製円盤が出土している。石製品としては石錘・砥石数点ある。他に、古墳時代後期の須恵器も数点ある。ここでは各遺構出土の一括土器群ごとに説明を加えた。また、壺A~F、小型丸底壺A・B、甕A~J、杯A~C、椀A~D、鉢、甑、高杯A~G、器台A・Bに分類した。

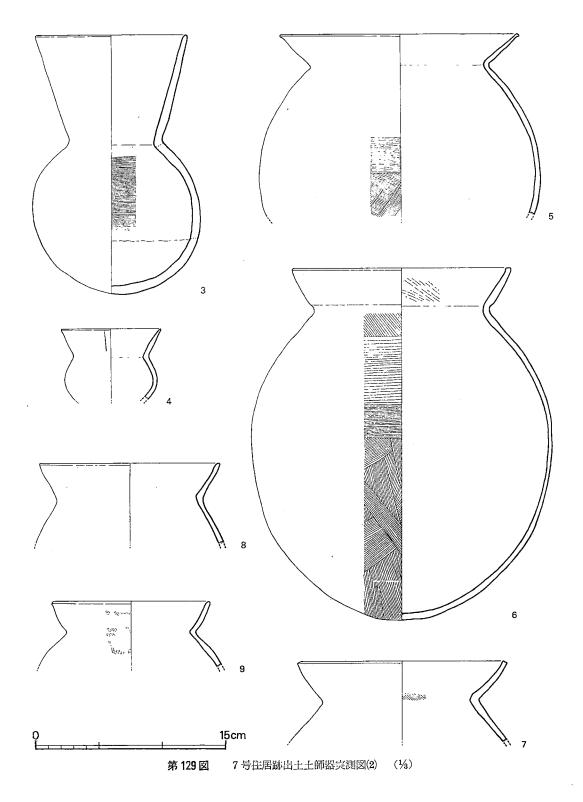
#### (1) 土師器

7号住居跡出土土器群(図版66~69,第128~131図)

壺  $(1\sim3)$  壺にはA, B, Fの三種がある。A (1) は内傾する複合口縁の大形壺であ る。口縁部は逆「く」の字状をなし,屈折は顕著である。口唇部はわずかに内外に肥厚し,端 部は平坦で内傾する。短い頸部には断面「コ」の字形の凸帯がめぐり,凸帯には「X」状の櫛 状工具による刺突文がある。胴部最大径は中位にあり長球形をなし、わずかに尖り気味にすぼ まる丸底へと続いている。口縁部は内外ともヨコナデ仕上げ,胴部外面は上から縦位→横位( 肩部)→斜位の刷毛整形を行っている。肩部上半と底部はナデて仕上げている。胴部内面はョ コヘラ削りを行い、底部内面はさらにナデて仕上げている。肩部内面は刷毛のあとヘラ削りし ている。色調は淡黄褐色を呈す。胎土には多くの砂粒を含むが焼成は良い。口径28.8㎝,復原 器高69cmを測る。壺B(2)は外反する複合口縁の壺で,大きさは大小ありa,bの2類に分ける ことができる。 2 は口縁部の破片資料で、 a 類に属する。口縁部内外はヨコナデで仕上げてい る。色調は淡黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。口径33㎝を測る。壺 F(3)は長く外上方に直 立する口縁部をもつ長頸壺である。頸部は鋭くくびれて、球形の体部に移行する。底部はわず かに尖り気味の丸底を呈す。体部外面は丁寧なヨコヘラ磨きで仕上げ、口縁部内面は刷毛のあ とナデで,さらにヨコヘラ磨きしている。胴部内面上半は細かい刷毛整形のままで,下半はナ デて仕上げている。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも極めて良好、堅緻である。口径11.9 cm, 器高20.5cmを測る。

小型丸底壺 A (4) 口径7.80mの小型丸底壺の破片資料で、中位にて 張り 出す胴部に強く外反した短い口縁部がつくものである。口縁部内外と胴上半はヨコナデ仕上げ、下半はヨコへ ラ削りのままである。胴部内面は ナデて 仕上げている。口縁部には 1~3本のヘラ 記号がある。色調は黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。





**甕**(5~13) 甕にはA・B・C・D・Iの5種がある。甕A(5・10)は短く外反する口縁部を有し、端部を外方につまみ出し、わずかに肥厚させ、外傾する平坦面を作り出すものである。5は口径19.2㎝を測る胴部上半の破片資料である。口縁部内外はヨコナデ、肩部はナデ、胴部は横位→斜位の刷毛で仕上げている。色調は淡赤褐色を呈す。胎土には多くの砂粒を含み、焼成は普通である。10は口径15.5㎝を測る胴上半部の破片資料である。若干肩の張った胴部に外反する口縁部がつくもので、口縁部内外をヨコナデ、胴部外面は横位→斜位の刷毛で仕上げ内面はヘラ削りしている。胴部中位に煤の付着がみられる。色調は黄茶褐色を呈し、胎土には大きい砂粒を多く含む。焼成は良い。他に、口縁部は不明であるが、ほぼ甕Aに入れるものと思われる11がある。11は口縁部と底部を欠く破片資料で、胴部中位に最大径をもって卵形を呈すものである。胴部外面は縦位→横位→斜位→縦位の 細かい 刷毛目で、内面はヘラ削りし、器壁を薄く仕上げている。体部外面全体に煤の付着が著しい。色調は黄茶褐色、胎土には大きい砂粒を多く含むが焼成は良好。

甕B(6~9) は内彎気味に外反する口縁部がつくもので、端部のあり方によりさらに細別できる。 a 類(6) はわずかに内側につまみ出し、肥厚させているもの。 b 類(7) は外傾する平坦面をもつもの。 c 類(8・9) は端部を丸くおさめているものにわかれる。甕Ba(6)は口径17.3cm、器高27.6cmを測る卵形の胴部をもつものである。胴部外面は斜位→横位→斜位の刷毛を使い、内面はヘラ削りで器壁を薄く仕上げている。口縁部内外はヨコナデで仕上っているが、内面には刷毛の痕跡を残している。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。甕Bb(7)は口径16.4cmを測る肩部上半の破片資料である。口縁部内外はヨコナデ、肩部外面はナデて仕上げ、内面はヘラ削りしている。口縁部内面一部に細い刷毛目痕を残している。色調は黄茶褐色を呈し、胎土普通、焼成良好である。甕Bc(8・9) 両者とも肩部上半の破片資料である。8は、なだらかな肩部に内彎気味に外反する口縁部がつもくので、口径14.3cmを測る。外面全体に煤の付着が著しい。9は、わずかに張った肩部に内彎気味に外反する口縁部がつくもので、口径12.5cmを測る小形のものである。口縁部内外は刷毛のあと、ヨコナデ、肩部外面は斜位の刷毛のあとナデて仕上げている。肩部内面はヘラ削りである。8・9とも色調は黄褐色を呈し、胎土は砂粒が少く、焼成も良好である。

**甕C(12)**は肩のあまり張らない胴部に波うちながら外反する口縁部をもつものである。口径16.5cmを測る肩部上半の破片資料で,口縁部内外と肩部外面はヨコナデ,肩部内面はヘラ削りしている。色調は茶褐色を呈し,胎土・焼成とも普通。

**塾D(13)**は球形の胴部に「く」の字形に外反する口縁部がつき、口縁端部が薄く尖って終る特色をもつ甕である。内外とも細かい刷毛で整形し、口縁内面上半と外面から肩部にかけてヨコナデで仕上げている。色調は黄茶褐色を呈し、胎土・焼成とも普通。口径14.1cm。

趣 I いわゆる庄内式土器といえるもので、胎土・焼成・色調・調整手法が他の土器群と明

確に分離できるグループのものである。その内でも口縁端部のあり方からさらに4類に細別される。 a 類は口唇部を上方につまみ上げ,小さい隆起をつくっているもので,口唇部外面にしばしョコナデによる凹線をもっているもの,b 類は a 類とは少し異なる丸味をもった低い隆起をつくりだしているもの,c 類は口唇部を外方につまみだし端部を丸くおさめているもの,d 類は端部が隆起せず薄く尖って終るもので,口唇部内面にわずかな凹みを作るもの,の4類である。住居内で出土したものは細片で図示できないが,d 類とされる 口縁部破片 一点と,他に,細いタタキ目をもつ胴部破片 2 点が出土している。

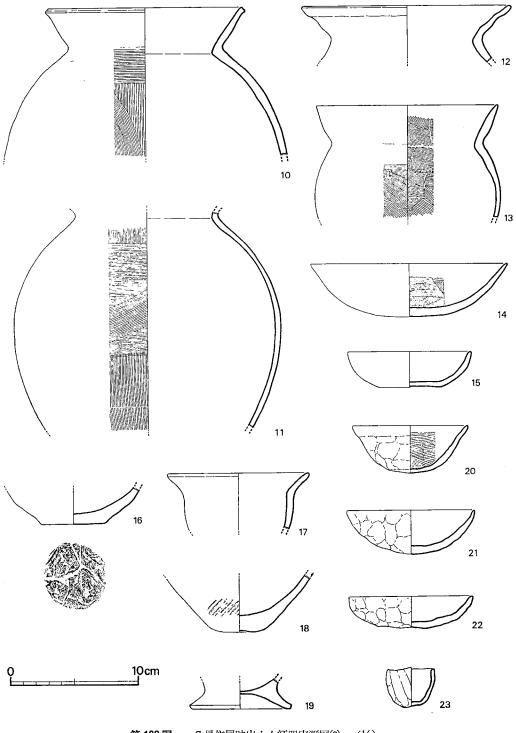
杯(14・15) 杯にはA(14)丸底のもの,B(15)平底の2種がある。杯A(14)は口径15.3cm,器高4.1cmを測る。体部内面は刷毛整形し,外面はナデている。口縁部内外はヨコナデで仕上げ,底部外面はヘラ削りのままである。色調は褐色を呈し,胎土はよく精製されている。焼成は普通。杯B(15)は口径9.6cm,器高2.75cmを測る。底部はわずかに上げ底気味の平底で,内外をナデて仕上げている。内底部には刷毛の痕跡を残している。色調は暗茶褐色,胎土・焼成とも普通。

**椀A**(16・17) 16は底径5.1cmを測る胴下半の 破片資料である。底部は 平底で,底面の木の葉痕を残す。内面はヘラ削りのあとナデ,外面はナデて仕上げている。色調は淡褐色を呈し 焼成は良い。17は口径11.1cmを測る胴上半の破片で,口縁部が緩かに外反するものである。口縁部内外はヨコナデ,胴部内面はヘラ削り,外面はナデて仕上げている。色調は淡黄褐色を呈し,胎土・焼成とも普通。

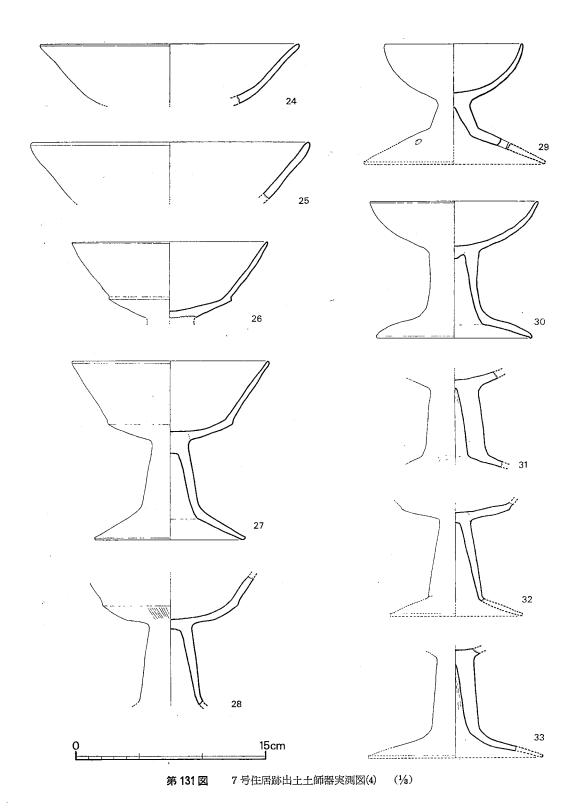
鉢(18・19) 18は胴部下半の資料で,底部中央が凹む丸底気味のものである。胴部下半には粗いタタキの痕跡を残し,上半はヘラ削りしたあとナデている。内面はナデ仕上げである。色調は淡褐色を呈し,胎土には多くの砂粒を含む。焼成普通。台付鉢(19)は底径8cmを測る高台付鉢の高台部の破片資料である。内底面はヘラ磨きで,台部外面と外底面はヨコナデ仕上げしている。色調は灰黒色を呈し,焼成は良い。

手捏(20~23) 20は口径10cm,器高3.8cmを測る指頭圧痕を顕著に残す手揑の杯である。 内面は粗い刷毛で整形し,口縁部内外はヨコデナ仕上げである。色調は黄褐色を呈し,胎土には多くの砂粒を含む。焼成普通。21は口径10cm,器高3.4cm,22は口径8.7cm,器高2.4cmを測るもので,外面には指頭圧痕を顕著に残し内面をナデて仕上げた粗雑な土器である。色調は両者とも黄褐色を呈し,胎土・焼成とも普通である。23は口径3.7cm,器高3cmのぐい飲み形の土器である。

高杯 (24~33) 高杯にはA・B・Cの3種がある。高杯A (24・25) は, 杯部が杯底部から口縁部へなだらかに移行し,口縁部は外上方に大きく外反するもので,24が口径20.8cm,25



第130図 7号住居跡出土土師器実測図(3) (%)



— 273 —

が22.1cmと大形である。杯部内外を丁寧にヘラ磨きした(24)と、ナデで仕上げた(25)がある。 24は、口縁部内外をヨコナデしたあと、外面はヨコヘラ磨き、内面もヨコヘラ磨き、さらに放射状の暗文を施し丁寧に仕上げている。25は口縁部内外をヨコナデし、杯部内面は刷毛のあとナデて、外面はナデで仕上げている。色調は両者とも淡黄褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含むが焼成は良好である。

高杯B(26~28・32・33)は、杯底部の屈折が明瞭で、口縁部は外上方に大きく外反する。口縁端部は薄く尖って終るものである。高杯Bは胎土・色調・調整手法により、さらに2類に分けられる。a類(26・27・32・33)は、色調が赤褐色ないし淡赤褐色で、胎土は砂粒が極めて少ない精良なものである。口縁部はヨコナデのあと、丁寧にヨコヘラ磨きして仕上げ、杯底部外面は、ヘラ削りしたあとヨコヘラ磨きしている。脚部は中空で、内面はしぼりのあとヨコヘラ削りし、外面は縦位のヘラナデのあと、刷毛調整し、さらにヨコヘラ 磨きで 仕上げている。作りの良い高杯である。26は口径15.5cm、27は口径15.6cm、器高14cm。b類(28)は暗茶褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含む。杯部内面は刷毛のあとヨコナデし、さらにヨコヘラ磨きを加えているが、外面はヨコナデのままである。杯底部外面は粗い刷毛のあと軽くなでているだけである。柱状部内面は、ヨコヘラ削り、外面は刷毛のあと粗くヨコヘラ磨きして仕上げている。高杯Bの杯部と脚部の接合は挿入手法による。

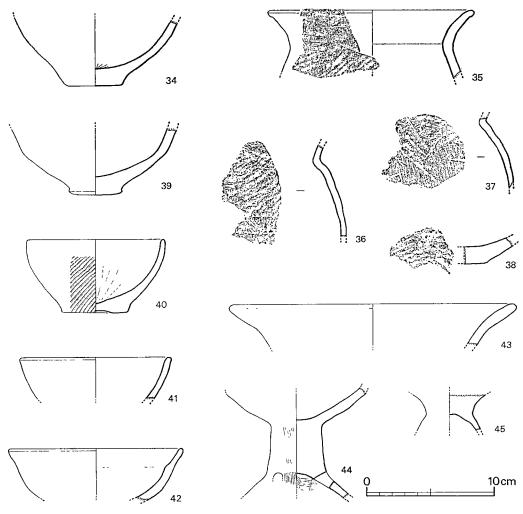
高杯 C (29・30) は,杯部の形状が杯形をなすものである。さらに脚部の形状により4類に分けられる。ここで出土しているのはa,b類である。a類 (29) は,杯形の杯部に柱状部が極めて短く,脚台部が大きく内彎気味に水平に拡がった脚部がつくものである。脚台部には3個の円孔を穿っている。杯部内外はナデて仕上げ,柱状部外面は縦位のヘラナデを行い,そのあとナデている。脚台部と柱状部内面もナデて仕上げている。色調は淡褐色を呈し,胎土・焼成とも普通。口径10.9cm。b類 (30) はズン胴の脚部を持つもので,脚台部はわずかに内彎気味に拡がり,端部は内面の下方にわずかに突出する。杯部内外はナデ,柱状部内面はしぼりのあとヨコナデしている。外面は縦位のヘラナデのあと軽くヨコナデして仕上げている。脚台部内外はヨコナデしている。色調は黄褐色を呈し焼成は良い。口径13.3cm,器高10.7cm。

31は柱状部が太く短いもので、中空の内面はしぼりのあと軽くナデているだけで 器肉は厚い。外面は縦位のヘラ磨きで仕上げ、色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好、堅緻な土器である。

8号住居跡出土土器群 (図版70,第132図)

壺(34) 平底の底部をもつ胴下半の資料である。内外面ともナデて仕上げ、内底部にはへ ラにて押えた痕跡を残している。色調は淡黄褐色で胎土には多くの砂粒を含む。焼成普通。壺 Bbの底部と思われる。

甕(35~39) 変には $F \cdot I$ の2種があり、変Fが主体となる。変Fは体部外面に粗いタタ



第132図 8号住居跡出土土師器実測図(%)

キ目を施した粗雑な土器の一群である。口縁部の特色によりa・b・cの3類に細別される。a類 (35) は肩部上半の破片資料で,口径16.2cmを測る。肩の張らない胴部に,わずかに立ちさらに強く外反する口縁部がつくもので,肩部外面は粗い右上りのタタキ目,内面はナデ,口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄茶褐色を呈し,胎土には多くの砂粒を含むが焼成は良い。36・37とも胴部上半の破片資料で,外面は右上りのタタキ目で,37はさらに粗い刷毛で調整している。内面はナデて仕上げている。38は平底の破片資料で,35~37の底部であろう。外面は粗いタタキ目,内面ナデである。39は貼付けの底部を思わせる胴下半の資料である。内外面ともナデて仕上げている。色調は淡黄褐色を呈し,胎土には砂粒を多く含み悪い。焼成もあまり良くない。甕Iは小破片で図示しえないが,胴部破片が14点出土している。

**椀A**  $(40 \cdot 41)$  40は口径10.8 $^{\text{cm}}$ ,器高  $5.7 \,^{\text{cm}}$  を測り,内彎しながら外反する体部に凹み底の平底がつく。体部外面はラセン状のタタキ目,内面にはヘラによる押え痕を残し,口縁部内外はヨコナデしている。色調は茶褐色を呈し,胎土には大きい砂粒を多く含むが焼成は良好である。41は40と同様のものと思われるが,内外面をナデて仕上げている。

**杯C**(42) 口縁部内面に稜を持ち、口縁端部でわずかに外反している杯である。内外とも ナデ仕上げで口縁部はヨコナデしている。色調は淡黄褐色をなし、焼成は良い。口径14cm。

高杯(43~45) 高杯にはA・D・Eの3種がある。高杯A(43) は口径22.6㎝を測る。内外ともヨコナデして仕上げている。色調は淡黄褐色を呈し,焼成は良好である。高杯D(44) は杯底部が強く外上方にのび杯底部と杯部の屈折は高杯Bほど明瞭ではないが屈折をもつ深目の杯部がつくものと思われるものである。脚部は短く充実し,脚台部の拡がりは大きく,3個の円孔を持っている。杯底部内面はナデ,外面は粗い刷毛のあとナデている。柱状部外面は縦位のヘラナデのあと粗い刷毛,内面は刷毛で仕上げている。色調は淡黄褐色を呈し,胎土・焼成とも普通。高杯E(45) は柱状部が極めて短くラッパ状に拡がる小形の脚部がつくもので,120と同様のものと思われる。杯部は174のような少し小振りの作りの良いものがつくものと思われる。内外面はヨコナデのあと丁寧にヨコヘラ磨きを行い,内面はナデのままで仕上げている。色調は淡黄褐色を呈し,胎土には多くの砂粒を含むが焼成は良好・堅緻である。

円形竪穴状遺構出土土器群(図版71,第133図)

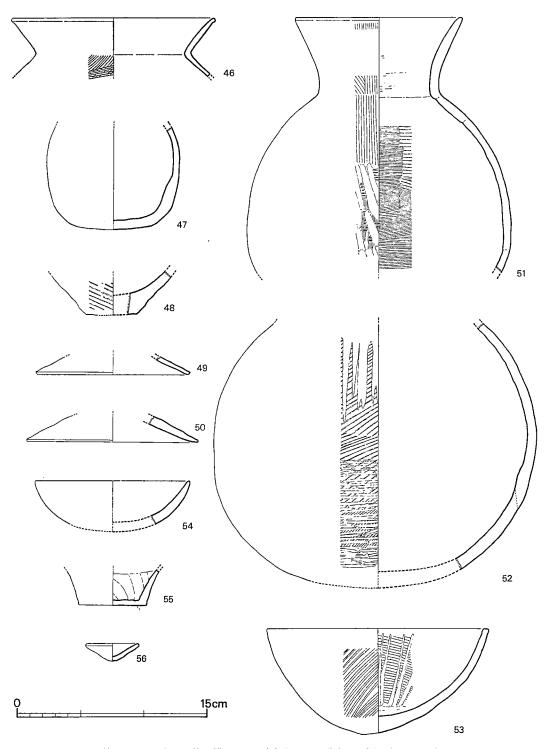
**甕**(46・48) 甕には F・I の二種がある。竪穴内の出土量は極めて少なく細片のためかならずしも明確ではないが,ほぼ同量の破片を数える。甕 F (48) は平底の底部で,外面は左上りの粗いタタキ目を施し,内面と底面はナデて仕上げている。36・37のようなあまり胴の張らない胴部に35のような口縁部がつく甕と思われる。色調は暗茶褐色を呈し,胎土・焼成とも普通である。甕 I (46) は,いわゆる庄内式土器といわれるもので,胴部外面には2mm内外の間隔の極めて細かいタタキ目を施し,内面は頸部までヨコヘラ削りを行い,内面頸部の屈折は明瞭である。口縁部内外はヨコナデで仕上げ,口唇部をわずかに外方につまみ出し丸くおさめている。これは4類の内のC類にあたる。色調は灰黄色を呈し,胎土の砂粒は極めて細かく,雲母を多く含む。焼成は普通である。口径16・2cm。他に,胴部細片が38点出土している。

**椀B(47)** 口縁部が内彎するブランデーカップ形のもので、底部は丸底気味の平底である。作りは手捏のようであるが、外面は指頭ナデのあと丁寧にヘラ 磨きしている。底面はナデ、内面は指頭による押えやナデの痕跡を残している。体部外面全体に煤の付着が著しい。色調は黄褐色を呈し、胎土には多くの細粒を含む。焼成は良い。

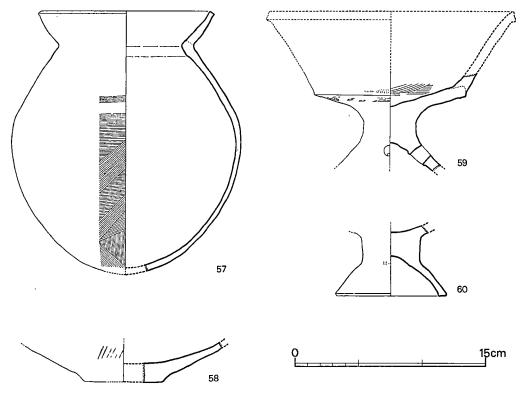
1号方形竪穴出土土器群(第133図)

**甕I 口唇部をつまみ上げ,小さい隆起をつくっているa類の破片1点が出土している。** 

高杯 (49・50) 脚台部の破片資料で,タイプは不明である。49は底径12.2cmを測る作りの



第133図 円形竪穴状遺構, 1·2号方形竪穴遺構出土土師器実測図(%)



第134図 2号方形竪穴遺構出土土師器実測図(%)

良い土器である。外面は細かい 刷毛のあと 丁寧にヨコヘラ磨きし、 内面はナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し胎土は精良である。焼成良好・堅緻。50は底径13.5cmを測る。内外をヨコナデし、外面はさらに粗いヨコヘラ磨きを加えている。色調は暗黄褐色を呈し、焼成は良い。

2号方形竪穴出土土器群(図版71·72,第133·134図)

**壺D**(51・52) ゆるやかに外反した少し長目の単口縁の壺である。51は口径13.2㎝を測る胴上半部の資料である。肩の張らない胴部に、ゆるやかに外反する口頸部がつくものである。口縁部内外は粗い刷毛のあとヨコナデし、胴部は粗い平行タタキのあと細かい縦位の刷毛を行い、その上からさらに粗いへう磨きを加えて仕上げている。肩部は粗い縦位の刷毛のままである。胴部内面は横位の細かい刷毛と粗い刷毛を使っている。色調は淡褐色を呈し、胎土には多くの大きい砂粒を含む。焼成は良好である。52は底部と口頸部を欠く資料である。最大径を胴中位にもち球形を呈す。口縁部は広口の単口縁のものと思われる。底部は丸底であろう。胴部上半外面は粗い右上りのタタキ(4㎜間隔)で、下半は粗い斜位刷毛を施し、その上をさらに上半は粗い縦位のへう磨き、下半は横位の丁寧なへう磨きを加えて仕上げている。内面は横位のへう削りで、肩部内面はナデて仕上げている。胴部下半には粘土の接合部が顕著に残ってい

る。色調は黄褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含む。焼成は良好である。

**甕** (57・58) 甕には $Bb \cdot F \cdot I$  の 3 種がある。甕Bb (57) は口径I3.9cm,復原器高20.8cm を測る。肩の張らない卵形を呈する胴部に,内彎気味に外反する口縁部がつくもので底部は尖り気味の丸底と思われる。口縁端部は外傾する平坦面をもっている。胴部外面は横位 $\rightarrow$ 斜位 $\rightarrow$ 総位の細かい刷毛目,縁部内外と肩部外面はヨコナデで仕上げている。胴部内面はヘラ削りしている。 色調は黄茶褐色を呈し, 胴部下半には煤の付着が著しい。 胎土には多くの砂粒を含む。焼成は普通。甕F (58) は平底の底部破片で,外面には粗い右上りのタタキを行い,底部と底部付近はヘラ削りしている。内面は刷毛で調整している。色調は黄茶褐色で,胎土には多くの砂粒を含み焼成は悪い。甕I は小破片が6 点ある。

**杯A** (54) 口径12.2㎝を測る。体部内面から口縁部外面にかけてはヨコナデ、体部外面は ナデている。色調は淡黄褐色を呈す。胎土には多くの砂粒を含む。焼成普通。

**鉢**(53) 口径17.5cm, 器高 8.3 cm を測る。尖り気味の丸底の底部から, ゆるやかに内彎気味に外反し口縁部につづく。体部外面は粗いラセン状のタタキ (4 mm間隔) を施し, 底部付近はヘラ削りしている。体部内面は粗い刷毛のあと放射状のヘラ磨きで仕上げている。口縁部内外はヨコナデしている。色調は黄褐色を呈し, 胎土・焼成とも良い。

手捏(55・56) 55は口縁部を欠く平底の土器である。内面には指頭によるナデ上げ痕を顕著に残し、外面ははナデ仕上げている。色調は淡黄褐色で、胎土には多くの砂粒を含む。焼成普通。56は酒杯形のもので、内外をナデて作っている。色調は暗茶褐色を呈す。

高杯 (59・60) 高杯にはC・Fの2種がある。高杯C (60) は杯部を欠く資料であるが、安徳中原遺跡の資料に同一の脚部をもつ高杯があり、それは浅い皿形をなす杯部がつくものである。従って高杯Cにおけるバラエティーであり、d類とする。柱状部は太く短いもので、脚助部は内彎気味に拡がり短い。端部は平坦である。杯内底部はナデのあとへラ磨きしている。柱状部は縦位のヘラナデのあと刷毛調整し、さらにヨコヘラ磨きを加えている。脚台部内外はヨコナデし、外面はさらにヨコヘラ磨きした作りの良い土器である。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好・堅緻である。高杯F (59) は旧河川状遺構出土の113と色調・胎土・焼成・調整手法など極めて共通するもので、おそらくこのような杯部がつく高杯と思われる。杯底部の屈折は明瞭で、柱状部は短く充実し、大きく拡がる脚台部に続く。脚台部には4個の円孔が穿たれている。杯底部外面は横位の刷毛のあとヨコナデしている。内底部は刷毛を行い、中央部はさらにナデて仕上げている。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含むが焼成は良好である。

1号長方形土壙出土土器群(図版72·73,第135·136図)

小型丸底壺B(66) 口径8.6cmを測り、口縁部は内彎気味に大きく外反し、頸部は強くしまる。球形の胴部がつくものと思われる。口縁部内外はヨコナデのあとへラ磨きで仕上げた作り

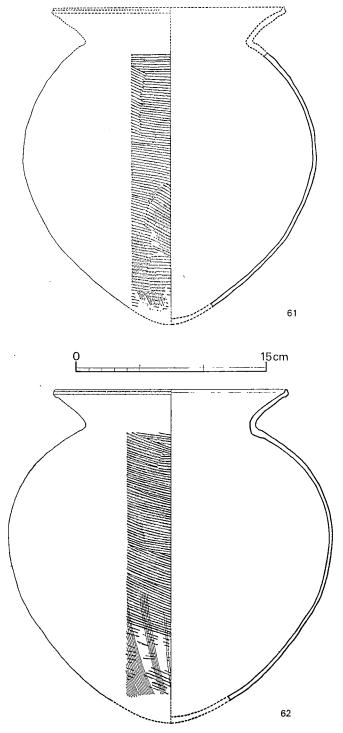
の良い土器である。色調は赤褐色を呈す。胎土は精良で、焼成は良好・堅緻である。

甕I(61~65) 口縁部が不明なものを除き全てa類である。61は口縁部と底部を欠く資料 である。肩部はなだらかなふくらみをもち,最大径は胴中位より少し上にあって,尖り気味と 思われる,底部へとすぼまる器形を呈している。体部外面には細かいタタキ目(約2 mm間隔) をラセン状に施し,さらに下半は間隔を置いて細かい刷毛目調整がされている。内面はヘラ削 りし, 2~3mmの薄い器壁に仕上げている。胴部下半には煤の付着がみられる。色調は暗茶褐 色を呈す。胎土は極めて小さい砂粒と雲母を含むが多くなく,精良で,焼成は良好・堅緻であ る。62は口径18.3cm,復原器高26.3cmを測る。口縁部は強く外反する。口縁端部は小さく上に つまみあげて、横にナデ、上方に拡張した形になっている。端部外面にはヨコナデにより凹線 をつくりだしている。胴部最大径は上位にあり,61より肩の張った器形を呈し,尖り気味と思 われる底部へとすぼまっている。口縁部内外はヨコナデ,胴部外面は細かいタタキ目(約2mm 間隔)をラセン状に施し,下半部はさらに間隔を置いて細い刷毛調整を行っている。内面はへ ラ削りして器壁を薄く仕上げている。色調は淡黄褐色を呈す。胎土には小さな砂粒・雲母を含 み精良である。焼成は良い。63は肩の張らない胴部に強く外反した口縁部がつくもので、口縁 端部は62と同様にヨコナデでつまみあげている。胴部外面は右上りの細かいラセン状タタキ目 で、刷毛はみられない。内面は頸部までヘラ削りを行い明瞭な稜を形成している。色調は外面 淡茶褐色,内面淡灰色を呈す。胎土にはきめのこまかい砂粒と雲母を含む。焼成は良好・堅緻 である。口径16cm。64は口径14.7cmを測るもので,胴部外面のタタキ目が平行タタキである他 は63と同じである。65は甕Fの底部で尖り気味の底部の資料である。外面は細かいタタキ目の 上から細かい刷毛目を施していて、内面はヘラ削りしている。器壁は極めて薄い。外面全体に 煤の付着が著しい。色調は暗茶褐色を呈す。胎土には多くの小さい砂粒と雲母を含む。焼成は 良好•堅緻。

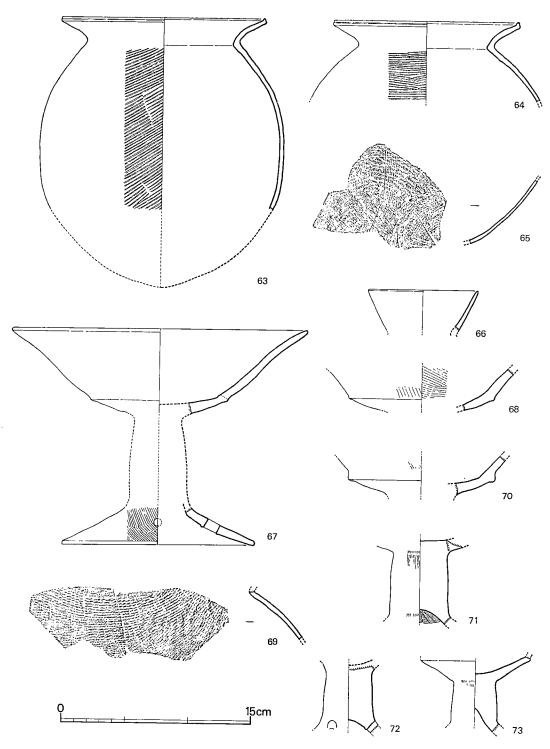
高杯(67・68) 高杯には $A \cdot F$ の2種がある。高杯A(67)は口径23.3㎝を測る大形のものである。脚部は調査中に盗まれたため現存しないが,写真より復原したものである(図版62 -1)。中位にて若干ふくらみをもつ柱状部から大きく拡がる脚台部につづく。脚台部には4個の円孔が穿たれている。杯底部の屈折は明瞭で,杯部は長く大きく外反するものである。杯底部内面はナデ,杯部外面は細かい刷毛を施し,そのあと内外をョコナデして仕上げている。杯底部外面はナデ,脚台部外面は粗い刷毛のままで,内面はナデている。高杯F(68)は杯部の破片資料で,色調・調整手法とも59と共通している。

2号長方形土壙出土土器群(第136図)

**甕** I (69) 肩部の破片資料である。外面下半は右上り、上半は横位の細かいタタキ目を施しそのあと間隔を置いた細かい刷毛調整を行っている。内面はヘラ削りで器壁を薄く仕上げている。外面には煤の付着がみられる。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には小さい砂粒を多く含むが雲母は少ない。焼成は良好・堅緻である。他に、a 類の口縁部破片 1 点と、胴部破片が 3 点ある。



第135図 1号長方形土壙出土土師器突測図(⅓)



第136図 1·2号長方形土壙出土土師器実測図(½)

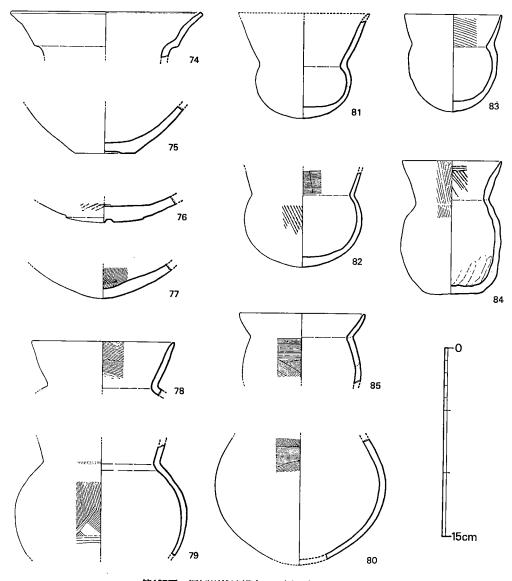
高杯D (73) 杯底部が強く外上方にのび、杯部への屈折ははっきりしている。深い杯部がつくものであろう。柱状部は短く充実し、裾部への屈折は明瞭で、拡がりは大きい。器面の風化がはげしく調整手法は不明。色調は褐色を呈す。胎土には多くの砂粒を含み、焼成は悪い。71・72は柱状部のみの資料である。両者とも柱状部は短く太めで充実している部分が長い。裾部への拡がりは大きく、円孔を穿つもの (72) もある。柱状部外面をヨコナデ、内面をナデている (72) と、杯内底部をへう磨き、柱状部外面を細かい刷毛のあと縦位のへう磨きを加えて、内面を刷毛で仕上げた作りのよいもの (71) がある。色調は (71) が黄褐色、 (72) が赤褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含むが焼成は良好・堅緻である。これらの柱状部の大きさ・太さ・調整手法等から考えてAかFの脚部になるものと思われる。高杯F (70) は杯底部の屈折が明瞭で疑口縁状をなすもので、柱状部への移行は幅広く、太めの柱状部がつくものと思われる。杯外底部は刷毛のあとヨコナデし、さらにへう磨きを行っている。杯部外面はヨコナデ、内面はへう磨きで仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含む。焼成良好である。

旧河川状遺構出土土器群(図版74~78, 第137~140図)

壺(74~80) 壺には  $B \cdot E$ の 2 種がある。壺 B(74)は口径 15.4 cm を 測る小形の複合口縁の壺で,b 類である。頸部から口縁部への屈折は明瞭で,口唇部へと大きく外反し,口縁端部をわずかにつまみあげている。内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し,焼成は良好である。75~77は底部の資料で,上げ底気味の平底をもつ(75),不安定な丸底気味の平底で,中央部に凹みをもつ(76),尖り気味の丸底をもつ(77)がある。内外をナデて仕上げた(75)や,外面にタタキ目を施したあと,内外ともへう磨きで仕上げた(76),内面を刷毛,外面をへう磨きで仕上げた(77)がある。これらの底部は壺  $B \cdot D$ につくものであろう。

壺 E (78~80) は短い単口縁の小形の壺である。78は内彎気味に外反し、口唇部にてわずかに外傾するもので、口径11.5㎝を測る。口縁部内面は細かい刷毛、外面はヨコナデしている。色調は赤褐色を呈す。79は球形の胴部に、短い単口縁がつくと思われるものである。口縁部内面から肩部にかけてはヨコナデで、胴部外面は刷毛を施している。胴部内面はへう削りである。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも普通。80は胴部中位が張ったソロバン玉状を呈する胴部の資料で、底部は尖り気味の丸底であろう。

小型丸底壺 (81~85) A・Bの2種がある。小型丸底壺A (83~85) は球形の胴部に、短く外反した口縁部がつくもので、口縁部には内彎気味に外反する (83・85) と、「く」の字形に外反する (84) とがある。83は体部外面はナデ、口縁部内面は粗い刷毛、胴部内面をナデて仕上げている。色調は黄褐色、胎土・焼成とも普通。84は口縁部内外を粗い刷毛、胴部内外をナデている。色調は淡褐色を呈し、胎土は精良で、焼成もよい。85は口縁部内外をヨコナデ、体部外面を細かい刷毛、内面をヘラ削りで仕上げている。色調は淡赤褐色を呈す。小型丸底壺

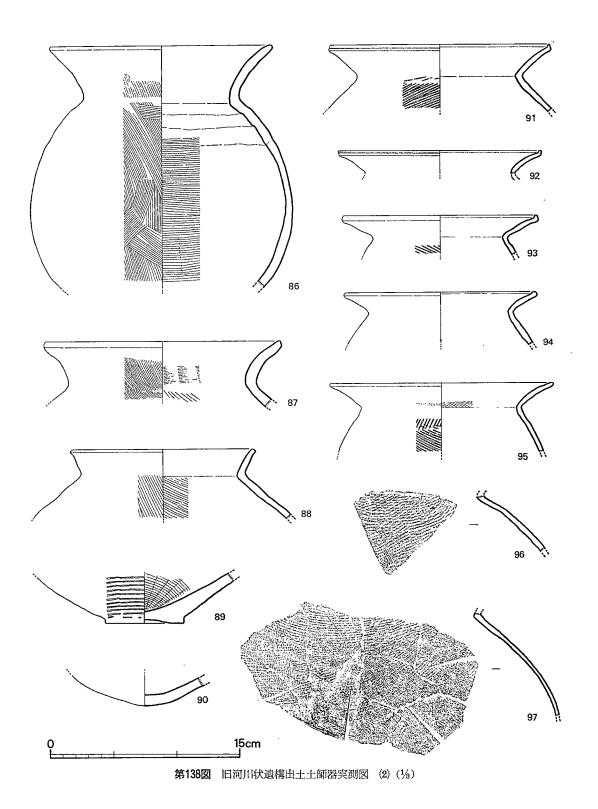


第137図 旧河川状造構出土土師器実測図 (1) (%)

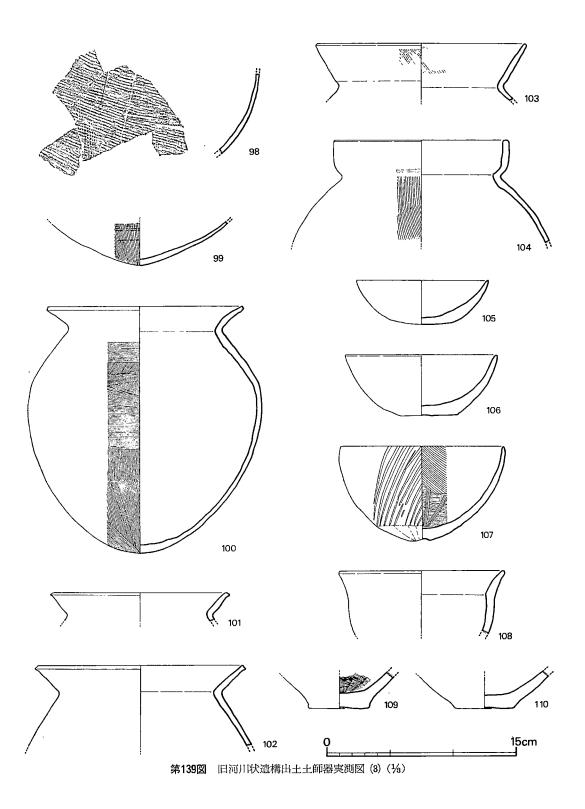
B (81・82) は、いわゆる坩といわれる小型丸底の壺である。球形の体部に外上方に大きくひらく口縁部がつく。口縁部はいったん内彎して中央部にふくらみをもち、端部へ屈曲して薄く尖って終る。口縁部の高さが体部の高さと比べほぼ同じか、少し大きいものと思われる。81は口縁部内外と胴上半をヨコナデし、そのあとヨコヘラ磨きで丁寧に仕上げ、胴下半はヘラ削りのままにしている。胴部内面はナデている。色調は赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好・堅緻である。82は口縁部内面を細かい刷毛、外面はヨコナデしている。胴部内面はナデ、外

面上半は粗い刷毛,下半はヘラ削りで仕上げている。色調は淡黄褐色を呈し,胎土・焼成とも あまりよくない。

甕にはA・D・G・I・Jの5種がある。甕A(88・101・102)は、卵形を 甕(86~104) 呈すると思われる胴部に、「く」の字形に外反した短い口縁部がつくものである。口縁端部は ョコナデにより、外方につまみ出された形状を呈し、外傾する平坦面を有する特色をもってい る。また、上下につまみ出されたもの(102)もある。88・101は口頸部が極めて短いものであ る。88は胴部内外を粗い刷毛で,口縁部内外をヨコナデで仕上げている。101は,口縁部内外 をヨコナデし、 胴部内面はヘラ削りしている。 色調は、88 が淡黄褐色、 101 が黄茶褐色を 呈 す。口径は88が14.7cm, 101が14.2cm。102は口縁部から肩にかけてヨコナデで,胴部内面はへ ラ削りのあとナデて仕上げている。色調は茶褐色を呈す。胎土は精良で、焼成も良好である。 甕D (103) は、口縁部が直線的に外反し、端部が薄く尖って終る特色をもっている。口縁部内 外を細かい刷毛で整形し、そのあとヨコナデで仕上げている。色調は暗茶褐色を呈す。胎土普 通・焼成良好・堅緻。口径16.7cm。甕G (86・87) は、強く外反する口縁部をもつもので、口 縁部内面の外彎は大きく、器肉が厚いのが特色である。86は球形の胴部に、大きく外反する長 目の口縁部がつくものである。胴部内外面は粗い刷毛目で、口縁部内外はヨコナデで仕上げて いる。肩部内面には粘土の巻き上げ痕を顕著に残している。体部外面には煤の付着が著しい。 色調は暗茶褐色を呈す。胎土には多くの砂粒を含むが、焼成は良好である。口径17.5㎝。87は 口縁部内外を粗い刷毛調整を行い、口縁部内面と口唇部外面を軽くヨコナデしている。肩部内 外面とも粗い刷毛目を 施している。色調は 黄茶褐色を呈す。胎土には 多くの大きい 砂粒を含 む。焼成は良い。89は甕Fの底部と思われるものである。底部は中央部が凹む平底である。体 部外面は粗いタタキ目を施し、内面は粗い刷毛で仕上げている。色調は暗茶褐色を呈す。90は 甕Gの底部と思われるもので、尖り気味の丸底である。内外ともナデを行い、そのあと外面底 部付近をヘラ削りしている。色調は暗茶褐色を呈す。甕 I (91 $\sim$ 100) には、口唇部の あり方 に、a・b・c・dの4種があるが、ここではそのa・b・dの3種が出土している。主体を しめるのはa類である。a類 (91~93) は頸部が「く」の字形に鋭く屈折して外反する。口縁 端部が,上方につまみあげられている。また,一般に91・92のように口唇部外面にヨコナデに よる凹線を形成する特色をもつ塾である。91・93は口縁部内外はヨコナデ,胴部外面は細かい タタキ目を施し、内面は頸部までヘラ削りを行っていて、頸部内面に明瞭な稜を形成する。色 調は91が暗茶褐色、92・93が淡茶褐色を呈す。全て体部全体に煤の付着が著しい。胎土には, きめの細かい砂粒と 雲母を含み 精良である。 焼成は極めて良好である。 口径は 91が 17.5cm, 92が16.1cm, 93が15.5cmを測る。b類 (94) は,a類とは少し異なる丸味をもった低い隆起を 口唇部に作りだしているのが特色である。頸部内面から肩部外面にかけてヨコナデし、胴部外 面はナデて仕上げている。胴部内面はヘラ削りであるが、頸部までは達せず、頸部内面はゆる



--- 286 ---



— 287 —

やかなカーブを描く。色調は淡黄褐色を呈し,胎土には砂粒・雲母を含む。焼成は悪い。 d 類 (95・100) は端部が隆起せず薄く尖って終るもので、口唇部内面にわずかな凹みを作る塾であ る。また、100のように口唇部外面にヨコナデによるわずかな凹みをもつものもある。95は卵 形を呈すると思われる胴部に、頸部で鋭く屈曲し外反した口縁部がつき、端部を薄く尖らせて 終る甕である。端部内面にはヨコナデにより凹みを作りだしている。胴部外面には細かいタタ キ目を施し、内面はヘラ削りで、頸部より少し下から行い器壁を薄く仕上げている。口縁部内 外は細かい刷毛のあとョコナデしている。色調は暗茶褐色を呈す。胎土は精良で,焼成良好・ 堅緻である。口径17.6㎝。100は口径15.5㎝, 器高19.4㎝を測る資料である。 胴部最大径を上 位にもち,尖り気味の丸底の底部へすぼまる卵形を呈するものである。頸部の屈曲は鋭く,口 縁部の外反は強く,端部を細く仕上げている。端部外面にはヨコナデによる凹みを形成する。 胴部外面は横位→斜位→横位→斜位の細かい刷毛を底面まで行っている。内面はヘラ削りで、 内底部は指頭による押え痕を残す。口縁部内外はヨコナデで仕上げている。器面全体に煤の付 着が著しい。色調は暗茶褐色を呈し,胎土には砂粒・雲母を多く含む。焼成良好。他に,胴部 ・底部 (96~99) の破片資料がある。96・97は胴部上半の資料である。肩部外面を横位,下半 を右上りの細かいタタキ目を施し、さらに上を細かい刷毛調整している。内面はヘラ削りを頸 部まで行い器壁を薄く仕上げている。器面には煤の付着が著しい。色調は黄茶褐色を呈し、胎 土には小さい砂粒・雲母を多く含む。焼成は良い。98は胴部下半の資料で、外面は右上りの細 かいタタキ目を施し、そのあと間隔をあけた細かい刷毛調整で仕上げている。内面は下半をへ ラ削り、上半を細かい刷毛を施している。色調は暗茶褐色で、外面には煤の付着が著しい胎土 にはきめの細かい砂粒・雲母を含む。焼成は良好・堅緻。99は尖り底の底部の資料で、外面は 横位の細かいタタキを施したあと、細かい刷毛を行っている。内面はヘラ削りで器壁を薄く仕 上げている。外面全体に煤の付着が 著しい。 色調は暗茶褐色を呈し、 焼成は良好・堅緻であ る。 甕J (104) は複合口縁状をなす甕で、 頸部の屈折は明瞭で、口縁部は直立し、端部は平 坦面をもっている。胴部は球形をなすものと思われる。口縁部内外はヨコナデ,胴部外面は縦 位→斜位の刷毛、内面はヘラ削りしている。器面全体に煤の付着が著しい。色調は茶褐色を呈 す。焼成は良好である。

**杯A**(105) 口径10.5cm, 器高3.5cmを測る丸底のもので, 内外をナデて仕上げている。色調は黄褐色を呈し, 胎土には多くの砂粒を含む。焼成普通。

椀(106~110) 椀には $\mathbf{A} \cdot \mathbf{C} \cdot \mathbf{D}$ の3種がある。椀A(108)は口径13.1cmを 測る底を欠く資料で、丸味をもつ胴部にゆるやかに外反する口縁部がつくものである。屈折する頸部内面に稜を形成する。口縁部内外をヨコナデ、胴部内外をナデて仕上げている。色調は茶褐色を呈し、焼成は良い。椀C(106)は、中央部がわずかに凹む平底の底部から、丸味をもちながら内彎気味に外反する口縁部へと続く。口径1cm,器高4.8cmを測り、内外をナデて仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良い。椀D(107)は、底部に指頭ぐらいの凹みをもつ尖

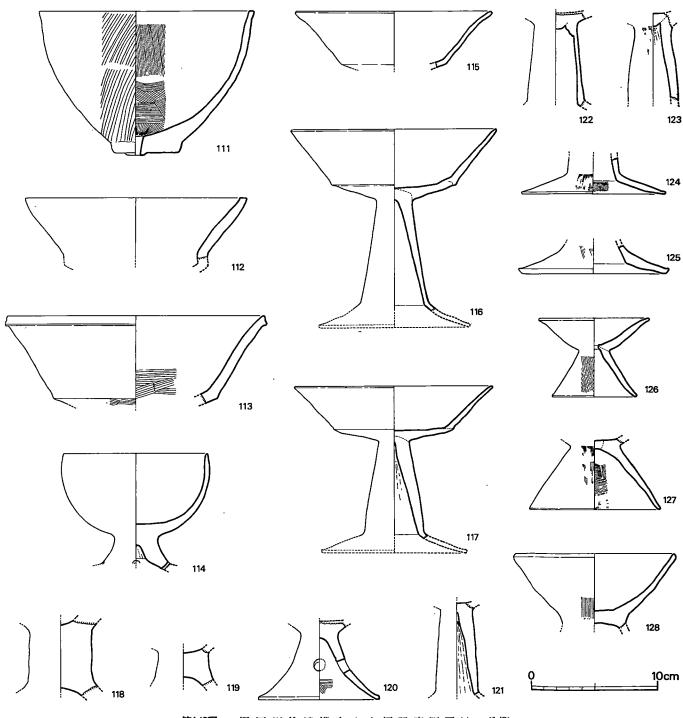
り底から内彎気味に外反し、口縁部に続き、口唇部は細く尖って終るものである。体部外面は右上りの粗いタタキ目を施し、そのあと底部付近はヘラ削りしている。内面は斜位の刷毛を行いさらに内底部中心から放射状に刷毛調整している。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含む。焼成は良好。109・110は底部の資料で、両者とも凹み底の平底である。109は内面を刷毛調整し、外面はナデ、110は内外をナデて仕上げている。これらの底部はおそらくA・Cのものと思われる。

面 (111) 口径17cm,器高11.1cmを測る。底部は平底で、底部中央よりわずかに偏した所に1個の円孔を、焼成前に内面から穿っている。体部は、ゆるやかに内彎気味に外反し口縁部に続く。体部外面には粗い右上りのタタキ目を施し、内面は細かい刷毛で、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口縁端部内外にはヨコナデによる凹みを形成している。色調は黄褐色を呈し焼成は良好である。

高杯(112~125) B・C・E・F・Gの5種がある。高杯Bが主体を占める。高杯B(116 ・117・121~125) は,杯底部の屈折が明瞭で,口縁部は外上方に大きく外反する。口縁端部 は薄く尖って終る特色をもっている。口径は15.5~16.5cmのものが多い。また,胎土・色調・ 調整手法によりさらにa・bの2類に分けられる。ここでは両者が出土しているがb類が主体 を占める。 a 類 (116) は、色調が淡赤褐色を呈し、胎土は砂粒が極めて少なく精良で、作りの 良い土器である。口縁部内外はヨコナデのあと,丁寧にヨコヘラ磨きして仕上げ,杯底部外面 はヘラ削りのあと、軽くヨコヘラ磨きしている。脚部は中空で、柱状部は直線的に拡がる。内 面はヨコヘラ削りである。外面は縦位のヘラナデのあと,刷毛調整し,さらにヨコヘラ磨きで 仕上げている。。口径16.5cm, 復原器高16cm。 b類(115・117・121~125)の色調は淡黄褐色 (117・121・125), 黄褐色 (115・122), 暗赤褐色 (123), 茶褐色 (124) などさまざまで ある。胎土・焼成・調整手法ともa類と 比べ粗雑である。その中で,115・121・122は 作りの 良い方である。117は,口径15.8㎝,復原器高13.4㎝を測る。杯部は116と比べ浅く,柱状部は 裾部付近でわずかにふくらみを持っている。口縁部内外はヨコナデ,杯内底部はナデ,外底部 はヘラ削りのあとヨコナデしている。柱状部内面は,しぼりのあとナデて,外面は縦位のヘラ 削りのあと,粗いヨコヘラ磨きで仕上げた粗雑な作りの 高杯である。 高杯C(114)は,いわ ゆる椀形の杯部に極めて短い柱状部がつき、裾部への屈折は大きく、裾部の拡がりは水平で広 いものと思われる。屈折部には4個の円孔が穿たれている。a類である。杯部内外と柱状部外 面は丁寧にヘラ磨きされ,柱状部内面は,ナデて仕上げている。作りのよい土器である。色調 は黄褐色を呈す。胎土には 砂粒が多いが,焼成は 良好である。高杯E(120)は,杯部に直接 小形のラッパ状に拡がる脚部がつくもので,4個の円孔が穿たれている。杯部は 174 のような 小形の作りのよいものがつくものと思われる。脚部外面は細かい刷毛のあと,縦位のヘラ磨き を行い,内面は刷毛のあと,ナデて仕上げている。色調は黄褐色を呈し,胎土・焼成とも良好 である。高杯 F (113) は,口径20.7cmを測る大形品で,杯底部の屈折は明瞭である。脚部は,色調・調整手法の共通する115のように,柱状部が充実した短いものがつくものと思われる。杯内底部付近は粗い刷毛,口縁部外面は刷毛のあと内外ともヨコナデしている。杯底部外面は横位の刷毛目を施している。色調は,外面が黄褐色,内面が暗茶褐色を呈す。胎土・焼成とも良い。高杯 G (112) は,口径17.6cmを測る杯部の資料である。杯底部の屈折は明瞭で,杯底部から一端,直に立ち上り,さらに大きく外反する口縁部がつくのが特色である。口縁端部は平坦で,わずかに内側につまみだしている。脚部は不明であるが,118のような脚部がつくものであろう。

器台(126~128) 器台にはA・Bの2種がある。器台A(126・127)は、ラッパ状にひらく脚部に、浅い皿状の受部がつくものである。受部内底部中央に1個の円孔をもつもの(128)と、円孔のないもの(127)がある。126は口径8.8cm、器高6.4cmを測る小形品である。受部内外はヨコナデ、脚部外面は細かい刷毛のままで、内面はヘラ削りのあとナデて仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。127は 脚部の 破片資料である。脚部内外は細かい刷毛を施し、外面はさらにナデている。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。焼成普通。器台B(128)は、脚部を欠く資料であるが、安徳中原遺跡の資料に同一のものがある。それによると、短い柱状部に内彎する裾部がつく形態のものである。受部内部とも、細かい刷毛のあとナデて、さらにヘラ磨きしたものである。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。包含層出土の土器群(図版79~81、第141~145図)

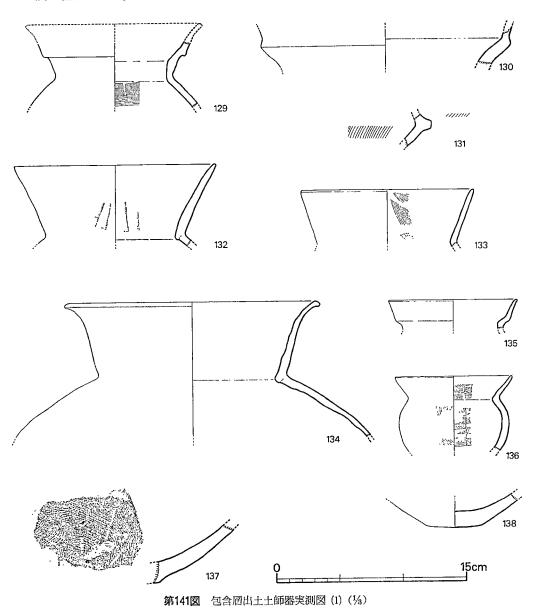
壺 (129~135, 137~142) A・B・C・D・Eの5種がある。壺A (131) は口縁部の小 片である。口縁部は内傾する複合口縁の壺で、いわゆる一般に、弥生後期の壺とされているも のである。他に、弥生式土器といえるものは小片で20数点あるが、すべて中期のものである。 壺B(129・130)には、a・bの2種がある。a類(130)は、口縁部の一部の 資料で 口径は 知り得ないが,大形の壺である。 b 類(129)は複合口縁の小形の 壺である。 球形をなすと思 われる胴部に、外反気味にのびる頸部がつき、口縁部への屈折は大きく疑口縁状をなす。胴部 内面は細かい横位の刷毛,頸部内面はナデ,口縁部内面から頸部まではヨコナデのあと,ヘラ磨 きを行っている。胴部外面はナデのあとヘラ磨きして仕上げている。色調は淡赤褐色を呈す。 壺C(134)は、球形を呈すると思われる胴部に 直立気味に外反し、口唇部付近で さらに外方 に屈曲した口縁部がつくものである。また、端部はつまみだされている。内面頸部の屈折は明 瞭で、稜を形成する。口径20.3cm。口縁部内外はヨコナデ、胴部内面はヘラ削り、外面はナデ て仕上げている。色調は淡黄褐色を呈す。胎土には多くの砂粒を含み、焼成は悪い。137・138 は底部の資料で,両者とも丸味をもった平底である。137は内外を刷毛,138はナデている。壺  $B \cdot D$ の底部であろう。 壺 D (132) は口径16cmを測る強く外反した長目の口縁部をもつ壺であ る。頸部の屈曲は強く、球形の胴部につづくものと思われる。口縁部内外は刷毛のあとヨコへ ラ磨きを行っている。色調は淡黄褐色を呈す。 壺 E (133)はいわゆる短い 単口縁の小形壺で



第140図 旧河川状遺構出土土師器実測図(4) (1/3)

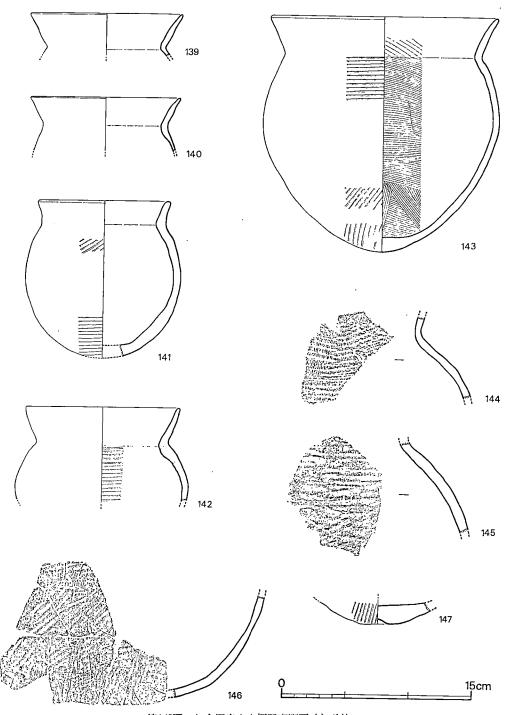
ある。口縁部内面は刷毛,そのあと内外をヨコナデし,さらにヨコヘラ磨きで仕上げている。 色調は暗茶褐色を呈し,胎土は精良で焼成も良い。

小型丸底壺A (136) 底部を欠く資料で、口径9.2cmを測る。球形の胴部に強く外反する短い口縁部がつく壺である。胴部内外は細かい刷毛のあとナデ、口縁部内面は細かい刷毛、そのあと内外をヨコナデして仕上げているものである。色調は黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好・堅緻である。

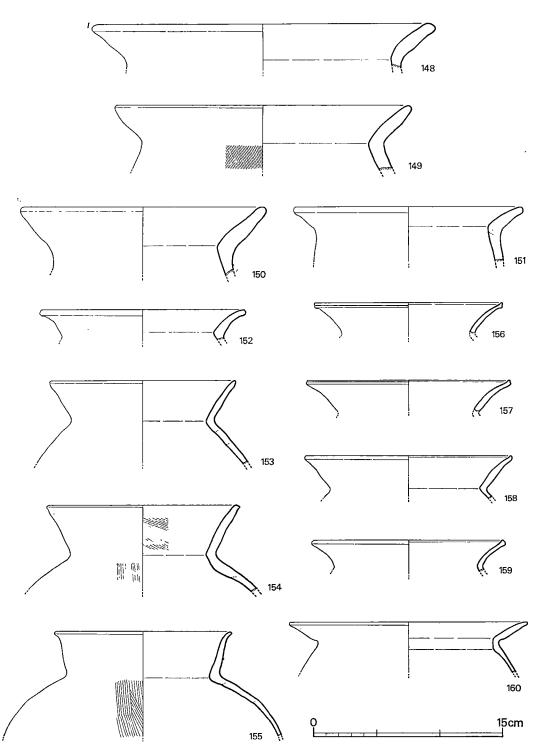


-- 291 ---

A·B·D·E·F·H·Iの7種がある。 **38** A (154) は口径15.2cmを測る肩部 上半の資料である。球形の胴部にくの字形に外反した口縁部がつき、端部を外方につまみ出し ている。胴部内面はヘラ削り、外面は粗い刷毛のあとナデている。口縁部内面は細かい刷毛を 施し,さらに内外をヨコナデして 仕上げている。色調は 淡茶褐色を 呈し,焼成は 良い。甕B (142) は口径12.2cmを測る胴部上半の資料である。球形の 胴部に,内彎気味に 外反した口縁 部がつき、端部を丸くおさめているもので、c類にあたる。口縁部内外はヨコナデ、胴部内面 は粗い刷毛,外面はヘラ削りのあとナデて仕上げている。色調は淡黄褐色を呈し,胎土には多 くの砂粒を含む。焼成は悪い。甕D(139・140・153) は球形の胴部に, くの字形に外反した 口縁部がつき、端部が尖り気味に薄く終る特色をもつ甕である。口径は139・140が12㎝と小さ く,154は14.6cmで一般的な甕の 大きさを測る。139・140とも 口縁部内外をヨコナデ,胴部外 面はナデ,内面はヘラ削りである。色調も淡黄褐色を呈す。140は 胴部外面を 刷毛のあと,ナ デて、内面はヘラ削りしている。口縁内外はヨコナデで仕上げている。色調は褐色を呈し、胎 土に多くの砂粒を含み,焼成も悪い。甕E (155) は口径14㎝を測る胴部上半の資料である。球 形の胴部に直立気味に外反し、端部付近でさらに外上方に屈曲した口縁部がつく。壺Cに共通 する口縁部である。口縁部内外はヨコナデ,胴部外面は縦位・斜位の粗い刷毛,内面はヘラ削 りしている。色調は淡茶褐色を呈し,焼成は良い。甕 F (141・143~147) は,体部外面を粗い タタキ目を施した一群の甕で、口縁部の特色により、a・b・cの3類に分れる。a類は肩の 張らない球形の胴部に、直立気味に外反し、中途で、さらに強く外反する口縁部がつくもので ある。35が 典型的な資料である。底部の 破片資料である147は,この種の底部と思われる。b 類(143)は、卵形を呈する胴部に、くの字形に外反する口縁部がつくもので、端部は薄く尖 り気味である。底部は尖り底である。胴部外面は,下半が右上り,上半が横位の粗いタタキ目 を施し,下半部はさらにナデている。底部はヘラ削りしている。内面は細かい刷毛である。口 縁部内面は粗い刷毛,そのあと内外をヨコナデして仕上げている。色調は黄褐色を呈す。胎土 には多くの砂粒を含み,焼成は悪い。口径17.9cm,器高18.5cm。 c 類 (141) は球形の胴部に, わずかに外反した短い口縁部がつく。口径10.5cm,復原器高12.2cmを測る小形の甕である。体 部外面には,粗いタタキ目を施している。上半は右上り,下半は横位で,そのあとさらに軽く ナデている。内面はナデ,口縁部内外はヨコナデで仕上げている。全体に器肉の厚い作りの雑 な土器である。色調は淡黄褐色を呈す。胎土には大きい砂粒を多く含む。焼成普通。144・145 は口縁部を欠く胴部上半の破片資料である。外面には粗いタタキ目を施していて、右上りのも の(144) と, 横位のもの(145) とがある。また, 144は さらに刷毛目を 施している。内面も 刷毛のもの(144)と,ナデのもの(145)がある。色調は144が暗茶褐色,145が淡黄褐色を呈 す。145の体部外面には煤の付着が目立つ。胎土には多くの砂粒を含み,焼成は普通。146は胴 部下半の破片資料である。胴部は球形で丸底をなすものであろう。外面には右上りの粗いタタ



第142図 包含層出土土師器実測図(2)(%)



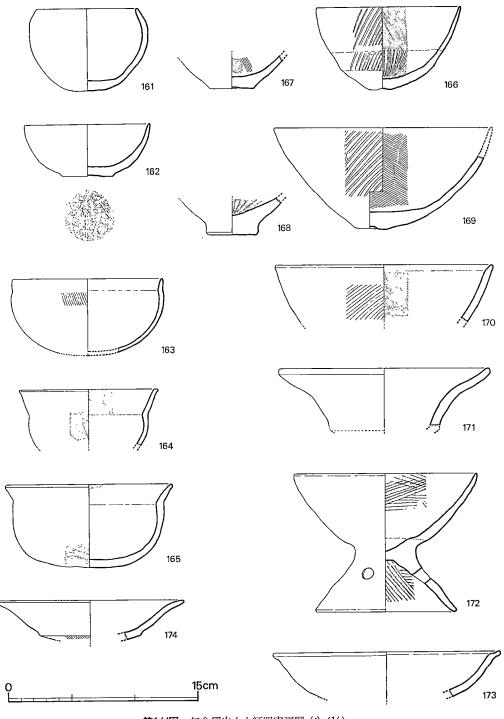
第143図 包含層出土土師器実測図(3)(%)

キ目が施され、上半は粗い刷毛、下半はへう削りで仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含む。焼成普通。甕H(148~152)は、あまり張らない胴部に強く外反する器肉の厚い口縁部がつくもので、作りは雑な土器群である。全て、口縁部付近の破片資料である。体部外面は刷毛のもの(149)、刷毛のあとナデているもの(148・150~152)とがあり、内面は全てへう削りである。他の資料にナデで仕上げたものもある。口縁部内外はヨコナデである。色調は茶褐色(148・149・151)と、黄褐色(150・152)があり、胎土は全体に砂粒が多い土器である。大きさには大小がある。甕I(156~160)には、a類(156~158)とり類(159)とd類(160)があり、a類が主体を占める。a類は口縁端部を上方につまみ上げた隆起をもつもので、端部外面に凹線を形成するのが一般である(156・157)。また、胴部内面のへう削りは頸部まで達するものが多く、頸部内面に稜を作る(158)。b類(159)は口縁端部の隆起が丸味をもつもので、やや内傾するのが特色である。d類(160)は、口縁端部が薄く尖って終る特色をもっている。口縁部内外はヨコナデ、肩部外面はナデ、内面のへう削りは頸部よりやや下位の所から行なっている。従って、頸部内面の稜は顕著でない。色調は159が暗茶褐色を呈す他は、淡茶褐色を呈す。胎土は全てきめの細かい砂粒・雲母を含み精良で、焼成も良好・堅緻な土器である。

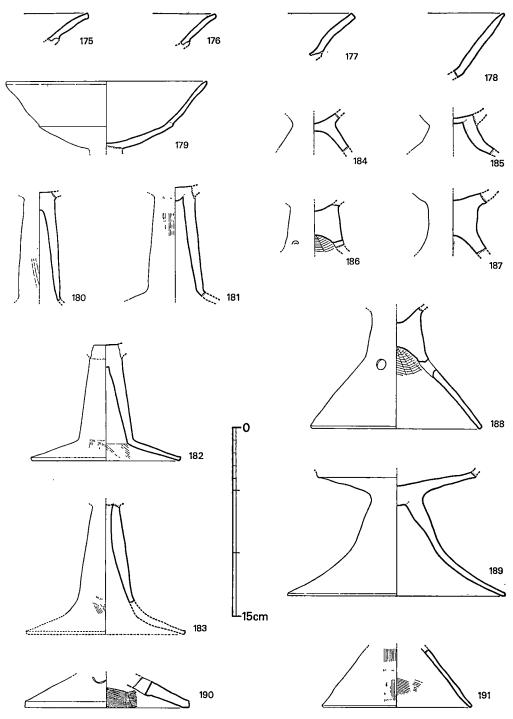
椀 (161~168) A·B·C·Dの4種がある。椀A (163~165) は、丸味をもつ体部に短く 外反する口縁部がつくもので、極めて短く、わずかに外反した163、少し長く外反が大きい164 などがある。また,頸部内面に稜を形成し,端部を丸くおさめた163・165と,平坦にした164 とがある。体部外面は細かい刷毛のあとナデたもの (163・165)と ,刷毛のままのもの (164) とがある。内面はナデたもの(163)と、 ヘラ削りしたもの(164・165)がある。 また、口縁 部は163が内外をヨコナデ,164が内面を 刷毛,外面をナデ,165は 内面刷毛のあと内外をヨコ ナデして仕上げたものである。色調は黄褐色(163・165) と淡茶褐色(164)を呈する。 胎土 は精良で,焼成は普通。椀B(161)は内彎する口縁部をもつブランデーカップ型のものであ る。底部は平底気味の丸底で,体部内外をナデて仕上げている。色調は黄褐色を呈し,胎土は 精良である。焼成普通。椀C(162)は、わずかに上げ底気味の平底に丸味をもちながらまっす ぐに立ちあがる土器である。内外はナデ仕上げで,底部外面には木の葉痕を残している。色調 は淡黄褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含む。焼成普通。 椀D(166)は、 外底部中央に、 指頭大の凹みをもつ尖り底の底部で,体部は直線的に大きく拡がりがある。端部は尖り気味に 薄く仕上げている。体部外面は右上りの粗いタタキ目を施し、底部付近は粗くヘラ削りしてい る。内面は下半を粗い放射状の刷毛、上半を細かい刷毛を使っている。作りの粗雑な土器であ る。色調は淡黄褐色を呈し,胎土には多くの砂粒を含む。焼成は普通。 鉢(169) と共通する 作りの椀である。167・168 は底部の資料で平底である。167 は凹み底である。C類の底部であ ろう。内面は刷毛、外面はナデて仕上げている。

鉢(169・170) 169は尖り気味の底で、底部中央部に指頭大の凹みを持つ。体部は外上方に大きく拡がるもので、端部は薄く尖り気味に終る。口径17.3cm,器高8cmを測る。体部外面は粗い右上りのタタキ目を施し、底部付近は粗いへう削りを行なっている。内面は刷毛、内底部はナデで仕上げた粗雑な作りの土器である。色調は黄褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含む。焼成は悪い。170は口径17.2cmを測る破片資料で、体部は169に比べふくらみをもつもので、口縁部をわずかに外反させ、内面にあまい稜を作る。体部外面は右上りの粗いタタキ目、内面は細かい刷毛、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し、胎土は普通。焼成は良い。

高杯(171~190) B・C・D・Eの4種がある。高杯B (178~183) は、杯底部の屈折が 明瞭で,口縁部は外上方に大きく外反し,端部は薄く尖って終るものである。柱状部は長くス マートで,裾部は大きく拡がる特色を持っている。また,色調・胎土・調整手法の違いにより, a・bの2類にわけられる。包含層出土の資料は,すべてb類である。その中でも丁寧にョコ ヘラ磨きを加えた作りのよいもの(178~182)とヘラ削りのままの柱状部をもつ悪いもの(183) がある。179は口径15.9㎝を測る 杯部の資料で,他と比べ少し杯部が 浅いものである。杯部内 外は丁寧にヨコヘラ磨きで仕上げている。ヘラ磨きの前に,杯内底部は刷毛,外底部はヘラ削 りを行っている。脚部との接合は挿入法による。色調は黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も 良好・堅緻である。180~183は脚部の資料である。柱状部内面はすべてヨコヘラ削りで,外面 は縦位のヘラナデのあと刷毛調整し,ヨコヘラ磨きで仕上げている。しかし, 183 は外面は縦 位のヘラ削りのままの粗雑な作りのものである。色調は全て黄褐色を呈す。胎土は精良で,焼 成も良い。高杯C(172・173), 172は浅い鉢形の 杯部に, 直接ラッパ状の 脚台部がつくもの で,脚台部には3個の円孔が穿たれている。c類にあたる。杯部内面は粗い刷毛,外面は粗い へラ磨きである。脚台部外面から一部内面にかけてヨコナデ、内面は粗い刷毛で仕上げた粗雑 な作りの高杯である。色調は淡黄褐色を呈し,胎土には多くの砂粒を含む。焼成普通。 173 は 高杯Cに入るものと思われる杯部の破片資料で、杯部は浅く、端部をわずかに外方につまみ出 したものである。高杯D(186~188)は柱状部が充実し,深目の 171 のような杯部がつくもの と思われるもので、内底部の傾斜が強い特色をもっている。脚台部は、 188 のようにラッパ状 に大きく拡がったものと思われる。 188 は脚部の資料で,底径13.5㎝を測る。柱状部は短いが 充実で,脚台部の拡がりは大きく,わずかに内彎気味である。杯底部の傾斜は強い。柱状部外 面は縦位のヘラナデのあとタテヘラ磨き、脚台部外面はヨコヘラ磨きしている。内面は刷毛の あと、下半はヨコナデして仕上げている。丁寧な作りの土器である。色調は黄褐色を呈し、胎 土は精良で、焼成も良好・堅緻である。高杯E (174~176) は、底部の杯屈折は明瞭で、杯部 の外反は大きい。高杯Bと比べ,杯部が浅く,小振りである。脚部は45のような柱状部で極め て短く,ラッパ状に拡がる小形のつくりの良い脚部がつくものと思われる。また,杯部にも口



第144図 包含層出土土師器実測図(4)(%)



第145図 包含層出土土師器実測図 (5) (%)

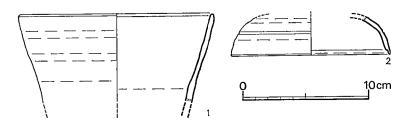
縁部が長いもの (174) と短いもの (175・176) とがある。内外はヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色 (174) と茶褐色 (174・175) を呈し、胎土は精良で焼成も良好。189は口縁部を欠く資料で、底径17.2㎝を測る。脚部の拡がりが極めて大きいもので、杯部はかなり大きい高杯Aのようなものと思われる。体部外面はナデのあと、軽くヘラ磨きし、脚部内面上半はヘラ削り、下半はナデて仕上げている。色調は赤褐色を呈す。 胎土・焼成ともあまりよくない。190は4個と思われる円孔をもつ脚台部の資料である。外面はヘラ磨き、内面は細かい刷毛で仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒は多いが、焼成は極めて良好である。高杯Fの脚台部の可能性をもっている。

器台A (191) 脚部の資料で,底部11.8㎝を測る。外面は細かい刷毛のあとヨコヘラ磨き, 内面は刷毛のあとナデて仕上げている。色調は暗黄褐色を呈す。胎土には砂粒が多いが,焼成 は良い。 (井上裕弘)

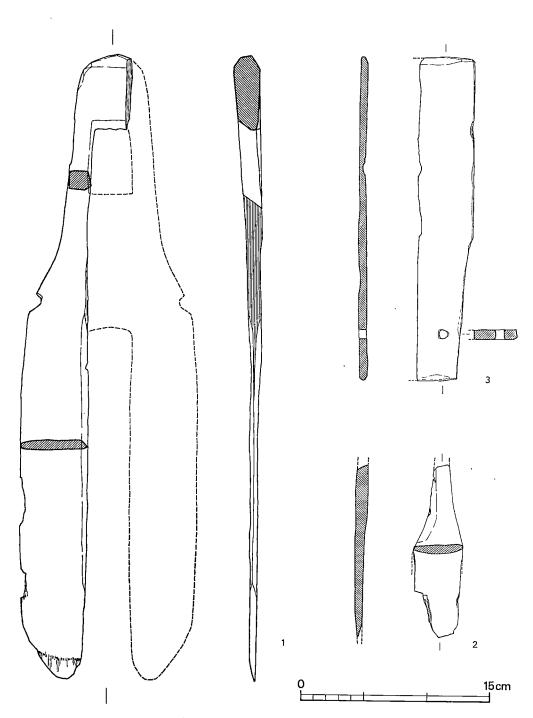
## (2) 須 恵 器 (第146図)

1は長頸壺の口縁部であろう。内外面とも口縁部下 5 cm前後までは回転ナデを施し、それ以下も回転ナデだがやや方向が違う。これはおそらく最後の調整段階に口唇部から指を入れ回転ナデを施した為と思われる。復原口径15.2cmを測る。胎土はやや不良で、石英・細かく砕いた長石粒・雲母を含む。焼成は普通で、色調は青灰色を呈している。器面にはどの段階に起因するものかは把めないが、気泡らしきものがみられる。2 は杯蓋になると思われる。器面内外面共回転ナデを施している。天井部と体部との境には沈線がある。口唇部は段を有し、沈線状を呈している。胎土は混入物を殆んど含まないが、若干量の砂粒を含んでいる。焼成は良好で、色調は淡灰色を呈している。復原口径12.5cmを測る。

以上, 2点の須恵器については,小田氏編年Ⅱ期に比定できよう。特に2の杯蓋については 古式の特徴を残しており, Ⅱ a に属すると思われる。実年代は6世紀中頃から後半と比定され ている。 (藤瀬禎博)



第146図 須恵器実測図(%)



第 147 図 木器実測図 (⅓)

#### (3) 木 製 品 (第147図)

又鍬(1) 柄着装部から半折しているが、ほぼその全容を知ることができる。頭部は数次の面取りで丸味に仕上げ、断面の厚さは、1.6cm。柄着装部は、図上縦方向はその切り込み面と割損面間で5.8cm。横方向は2.5cmが現存するが、3.0cmを越えないものと思われる。柄着装角度は120°。刃部に平行な着装孔中軸線からの図上復原形は、全長49.3cm・刃部長27.5cm・最大幅14.0cm。なお、その製作において次の特徴が認められる。柄着装部に突起は認められないが、頭部から孔下3.2cmまでを断面直線状にやや厚手に仕上げ、次に刃部切込み部までを裏部で若干薄く仕上げ、刃部は0.6~0.7cmの厚さをなし、先端部約3cm幅の使用による磨滅を認める。また刃部内側は表裏共に面取りを施し、V字状に鋭利に仕上げるが、先端部までは至らない。次に、外側肩部に幅1.5cm、深さ0.6cmの扶りを切り込んでいる。柄着装の使用時の強靱さを補う為に、紐様のもので結び止めたものか。部材はカシ類と思われるが、刃部の非常に薄手な仕上げである。

ふぐし状木製品(2) 柄頭部と先端部を欠失する。表面は平坦に仕上げるが,裏面は木取りの 年輪の丸味をそのまま残す。カシ類の硬い部材ではない。

有孔板状木製品(3) 全長25.5cm で端部に面取りを施す。孔径は $0.6\,cm$ 。断面の厚さは $0.7\,cm$  で,丁寧な仕上げである。部材はカシ類と思われる。

杭状木製品 径3cm前後の小さな表皮付きのもので、焼焦げたものも含めて若干出土した。 漆塗木製品 破片で出土した。 (馬田弘稔)

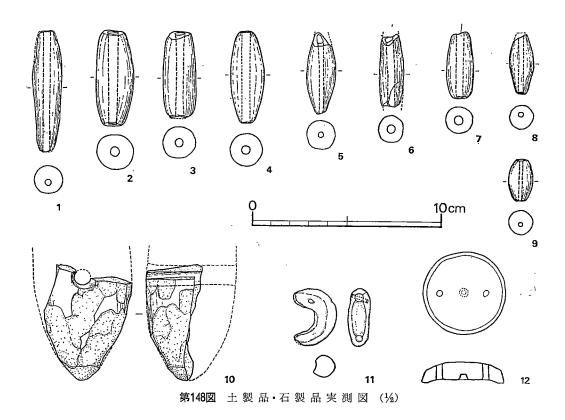
#### (4) 土錘 • 石錘 (図版81, 第148図, 表55)

 $1\sim 9$  が土錘、10が石錘である。土錘はすべて手揑のもので、色調は5 が赤褐色を呈す他は、黄褐色を呈す。胎土には多くの砂粒を含むが、焼成は普通で、本遺跡出土の古式土師器と共通する色調・胎土・焼成法である。重さでは、大きく16 g を越すもの(4)、 $11\sim 14$  g のもの(7)、4 g 以下のもの(9)の 4 種に分れる。

石錘(10)は、暗灰色の泥岩質の石材で作られている破片資料である。平面は紡錘形をなするのと思われ、下端が細かく尖っている。身の中央に一孔が穿たれている。器面は剝落がはげしいが、研磨

表55 土錘・石錘計測表

	長き	最大径	重 き	備考		
1	(cm) 6.4	(cm) 1.6	11.6			
2	5.1	2.0	13.5			
3	4.6	1.7	13.2			
4	4.9	4.9 1.8				
5	(4.3)	1.6	(8.0)	(欠)		
6	(3.9)	1.3	(5.7)	(欠)		
7	3.5	1.4	6.8			
8	(3.2)	1.3	(3.95)	(欠)		
9	2.2	1.3	3.45			
10	(6.1)	(4.4)	(59.1)	石錘(欠)		



されていたことが判る。

#### (5) 砥 石 (第149図)

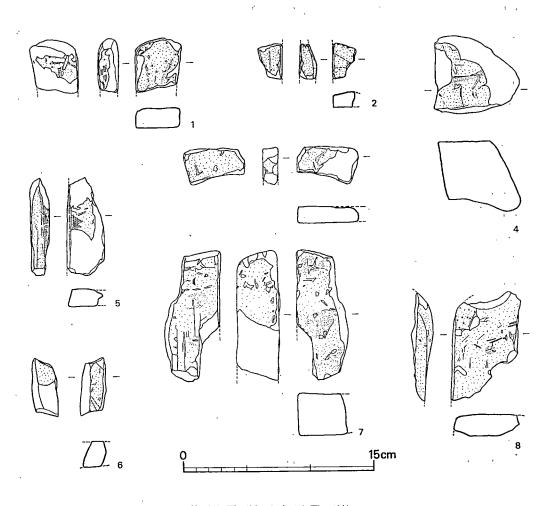
全て破片資料である。1・2は砂岩製のもので、1の研砥面は表裏と両側面の4面、2は表 いままと右側面の研砥面を残している。3・6~8は硬質砂岩製のもので、3は表裏と右側面、6 は表裏両面、7は表裏と上側面、8は表面と右側面にそれぞれ研砥面を残している。4は玄武 岩製のもので、大形の砥石の破片で、表面に研砥面を残すのみで、他面は欠損して不明であ る。5は緑泥片岩質のもので、表面と右側面に研砥面を残す。すべて包含層出土のものであ る。

# (6) 勾 玉 (図版81, 第148図11)

土製の勾玉である。長さ3cm,厚さ1.1cm,重さ6.2gを測る。色調は黒灰色を呈し,胎土・焼成とも普通。1号方形竪穴出土。

## (7) 土製円盤 (図版81, 第148図12)

円盤状をなす不明土製品で,直径4.3cm,厚さ1cm,重さ25.5g を測る。器面はふくらみを持ち,端部に近い両端に2つの円孔が穿たれ,裏面中心部には貫通しない円孔が1つある。裏面は周囲に幅3mmの平坦面を残し,中央は凹んでいる。色調は淡黄褐色を呈し,胎土・焼成とも良好・堅緻である。旧河川状遺構内出土。



第149図砥石実測図(%)

#### (8) おわりに

この時代の遺構として検出されたものは、竪穴住居跡2,円形竪穴状遺構1,方形竪穴遺構2,長方形土壙3,掘立柱建物跡2,旧河川状遺構1と少ない。すべて古墳時代前期に属し、他に、流入物と思われる後期の須恵器が若干出土しているのみである。

本遺跡の調査は、博多車輛基地建設に伴う側道敷の極めて狭小な範囲であったため、集落の 全貌を明らかにすることはできなかった。しかし,遺物の分布からみて,さほど大きな集落と は思われない。発掘した遺物の量と分布(付図7)をみると、遺構の存在するA5~7区、B 5~9区に集中する。とりわけ、住居跡の付近に集中する傾向をもち、他は散在的になってい る。また,先年,本遺跡の西側を流れる小河川の西岸地区(那珂川町大字今光字藪ノ内)に, 下水道管埋没工事の計画が出されたため,当教育委員会は,柏田遺跡の範囲確認を含め,事前 調査を実施した。その結果は,この時期の遺構・遺物は何等検出されず,遺跡の範囲がこの小 河川より西側にはのびないことが判った。従って、現在、西側を流れる小河川が、柏田に集落 が形成された時期にも流れていた可能性を持っている。また,発掘区東端で検出された旧河川 状遺構も,出土遺物からみて古墳時代前期の時期のものであり,このような二つの小河川に挟 まれた,狹長な自然堤防上が,当時の生活面であったことが判る。従って,集落の規模も,さ ほど大きなものと考えられず,10軒以内の小規模な単位集団と思われる。この地域でも,近年 の開発事業に伴う発掘調査で、門田遺跡をはじめ、下原遺跡・安徳中原遺跡・原遺跡等の同時 期の集落跡が急激に発見されてきた。とりわけ、 安徳中原遺跡では 10数軒の 住居跡が 発見さ れ、現在も調査中で、さらに遺跡が拡大することが判っている。かなり大規模な集落を形成し ていたようである。従って、現在、この地域における集落の実態、その間の相互関係等を理解 する作業が必須の時期にきているといえる。しかし、この福岡平野における古式土師器の編年 は、いまだ、資料的に充分でないため確定をみていない現状である。これまでの筑前における 編年は室見川を中心とした早良平野での資料をもとにすすめられたもので,宮の前Ⅲ式→有田 Ⅰ期→有田Ⅱ期へと推移する編年が考えられている (註1) 。この福岡平野においても,その編 年が現在採用されている。今回、柏田遺跡の調査を行い、この時期の良好な資料が出土し、そ れが早良平野における古式土師器群とかなり様相を異にすることが明らかになった。従って、 筑前における編年も,少なくとも早良平野,福岡平野の平野単位に行い,相互の横の関係を把 握する必要がある。まさに,「古墳出現前夜」というすぐれて重要な歴史的位置にあるこれら の土器群の地域的差異を明らかにすることは、大きな課題である。ここでは、本遺跡出土土器 群の実態と特徴を把握し、さらに、その間の相互の関係を明らかにする中で、この地域の編年 的見通しを立ててみた。

本遺跡における土師器の器種構成は、壺・小型丸底壺・甕・杯・椀・鉢・甑・手捏・高杯・

器台等からなり、壺は6種、小型丸底壺は2種、甕は10種、杯は3種、椀は4種、鉢は1種、 甑は1種、高杯は7種、器台は2種に、それぞれ細別できた。実測しえた資料は191点と多い。その内、同時共存としてとらえうる資料は、7号・8号竪穴住居跡、円形竪穴状遺構、1号・2号方形竪穴遺構、1号・2号長方形土壙内出土の土器で、その数は62点と少なく、かならずじも充分とはいえない。しかし、ここでは各土器群の特徴と相互の関係を検討し、その中から若干の編年的見通しを立ててみたい。

本遺跡の特色は、明らかに「庄内式土器」といえる甕Iとした土器が多量に検出されたこと にある。「庄内式土器」とは,昭和39年,田中琢氏によって布留式以前の土師器として提唱さ れたものである(註2)。しかし、その様式内容は一括土器群として確認されたものではなく、 その後,上田町遺跡の調査で原口正三氏は「上田町Ⅱ式」を提出された(註3)。現時点ではそ の具体的典型として理解されている。上田町 I 式甕は尖底気味の丸底に倒卵形の胴部がつき, 口頸部の屈折は強く、大きく外反する。口縁端部外方はヨコナデにより、その上端を小さく隆 起させる特色を持っている。体部内面はヘラ削りで、器壁を1~3mmと極めて薄く仕上げてい る。内面へラ削りはしばしば頸部まで達し、内面頸部に鋭い屈折を形成する。体部外面は、極 めて細いタタキ目(1~2 mm間隔)を施している。また,タタキ目の上から細い刷毛目を施し ているものも多くある。胎土には極めてきめの細い砂粒や雲母を含み,色調は暗褐色で,焼成 が良好・堅緻な土器である。本遺跡で実測しえた資料は23個体と極めて多く,他の破片から考 えて、少なくとも30個体は存在していたものと思われる。これまで、九州地方においては、ほ とんど認識されていなかった土器である。近年の発掘調査の進展により,この周辺でも安徳中 原遺跡群や,実測図をみるかぎり多々良込田遺跡 (註4) 等で発見されている。将来,さらに増 加する可能性をもっている搬入された土器である。また,多々良込田遺跡では「酒津式土器」 の甕も発見されているなど,多くの外来系土器群の存在が知られようになった。しかし,在地 の土器群の実態がかならずしも充分でなく、その間の分離をあいまいにしてきたことも事実で ある。北部九州の弥生終末期の土器群として西新式が提唱されているが,その実態は,若干の 器種をもってなされたものであり,現在でも良好な遺跡の報告にめぐまれていない。しかし, 最近,福岡市西区・野方中原遺跡の調査によってその間の豊富な土器群が発見された (註5)。 近い将来,報告されるものと思われる。ここでは本遺跡で,明らかに外来系土器群として分離 しえる甕 I (庄内式) に共伴する他の土器群の特徴と実態がどのようなものであるかを明らか にし,その間の変遷過程を,関連資料にもふれながら検討しよう。まず,各遺構内出土の土器 群の器種構成を整理すると表56の通りである。

7号住居跡出土土器群は、いわゆる「布留式」とされる土器群に共通する特色をもつものである。しかし、近年、本遺跡と近接した下原遺跡の調査で「布留式」併行期の典型的な土器群の一括資料をえた(註6)。それによると、今回の資料は全体としてより古式の様相をもつ土器

表56.土師器の器種構成

器中	М		· <u>-</u> .						-		1	4
	٧					: '			.03	7	က	
, .	G				<u> </u>				-		<del>,  </del>	
É	Ţ			4		1		7	-		4	
	ഥ		н						-	3	വ	
	Ω		1					1		3	r	43
	υ	62							Η,	2	9	
吨	Д	ΓC			<u> </u>	<u> </u>			2	. 9	18	
	4	8	-			<u> </u>		4	$\triangleleft$		4	
覆_									H			
*		2 (E)				` <b>-</b> -				7	ro	വ
	А					_			-	-	2	
, ,	ິບ								-		2	
裙	Ξ,									-	- 27	14
	4	23	2						н	က	∞	
	υ		1									
茶	Д	П									-	വ
.``	¥	н				-			Ţ		က	
	5								1		-	
	H		0	●	4	0	ဖ	<b>-</b> √	9	ന 🗨	स्य	
	H		•		2					က	2	
٠,	: ტ								62.		0	
10477	ഥ		ம் 🗨			1			-	9	14	
顯	छ									-		65
	α								1	က	ro	
,	С										-	
,	В	4				-				. ∺	9	
	A	3		<u> </u>					က		2	
小型 丸底壺	В								2		က	8
<u>小</u> 型	Ą	-		<u> </u>					က		5	
	. 면	1							<u> </u>		<u> </u>	
	<b>E</b>								က		4	
題	D					2				н	က္	15
	c							]		-		Ť
	В								-	2	4	
	A									1	72	_,
		居路	超	円形竪穴状遺構	1号方形竪穴遺構	2号方形竪穴遺構	号長方形土壤	号長方形土壙	川状遺構	<u>m</u>	1/1111	11111
	•	住庫	任。	次	竪六	竪穴	があ	历	<b>☆</b>	ا جر	<b>.</b>	
	.			翠	元.	一系	長7.	展7.	=	41		
		耶	宀	易	号天	号入	파		定	_		҉
		7	∞	比.	· <b></b>	72	1	77	巴	<u>E</u>	÷	

群といえる。また, 甕I (庄内式)を多く出土した 8号住居跡・円形竪穴状遺構・1号長方形土壙出土の一括土器群は, 甕F (肩のあまり張らない胴部に,直立気味に外反し,中途でさらに強く外反した口縁部がつくもので,底部は一般に平底や,中央部がわずかに凹む丸底気味の平底で,また尖底気味の丸底のものもある。体部外面は4~5 mm間隔の粗いタタキ目を施し,内面はナデか刷毛調整した器肉の厚いずんぐりした土器)のような,弥生終末期土器群の系譜をひくものと思われる甕と共伴している。しかし,7号住居跡出土土器群には,一切含まれずいわゆる下原遺跡でも明らかのように,布留式土器(球形の胴部に内彎した口縁部がつく甕)の典型的な甕につながると思われるBタイプの甕がその主体を占める。また高杯にはA・B・Cがあるが,Bが主体になることは,下原遺跡出土の高杯が,すべてBタイプのものであることと合せて,7号住居跡一括土器群を下原遺跡に近い時期のものと理解できる。従って,本遺跡で最も新しい時期に位置付けられる土器群といえよう。

ここで、その間の変遷をみると、8号住居跡、円形竪穴状遺構、1号・2号長方形竪穴出土 土器群→2号方形竪穴出土土器群→7号住居跡出土土器群の順にたどることができる。

次に、各土器群の特徴と相互の関係を明らかにすることによって、その間の変遷を検討したい。

8号住居跡出土土器群 変  $\mathbf{F} \cdot \mathbf{I}$  , 杯  $\mathbf{C}$  , 椀  $\mathbf{A}$  , 高杯  $\mathbf{A} \cdot \mathbf{D} \cdot \mathbf{E}$  がある。また,壺の底部と思われる平底のものもある。甕は  $\mathbf{F}$  が主体を占め,  $\mathbf{I}$  も小片ではあるが10数点ある。  $\mathbf{F}$  の胴部内面は,すべてナデ調整でヘラ削りはみられない。外面には粗いタタキ目を施すのが一般的であるが,37のようにタタキの上から刷毛目を施したものもある。杯は  $\mathbf{C}$  のみで,他にはみられない。椀  $\mathbf{A}$  には,40のような体部外面を粗いタタキ目を施した平底のものと,ナデて仕上げたものとがある。その粗いタタキ目は甕  $\mathbf{F}$  のタタキ目と共通するものであり,その間の調整手法の関連がつかめる土器である。また,底部中央の凹みも共通する特徴である。高杯には, $\mathbf{A} \cdot \mathbf{D} \cdot \mathbf{E}$  の3種があり,色調は淡黄褐色で共通している。以上の一括土器群は,粗いタタキ目を施した甕  $\mathbf{F}$  と甕  $\mathbf{I}$  (庄内式),高杯  $\mathbf{A} \cdot \mathbf{D} \cdot \mathbf{E}$  が共存し,壺・甕・椀とも丸底気味の平底の底部のものが目立つ一群である。

円形竪穴状遺構出土土器群 甕 F・I, 椀 B, 高杯 Fがある。遺物の量が極めて少ないので充分ではないが,甕 F・Iがほぼ同量出土している。高杯には Fがあり, 2 号方形竪穴, 1・2 号長方形土壙出土の例と共通するもので, 杯部が大きく, 柱状部が充実で短い特色をもつ高杯である。椀は B がある。これらは, 8 号住居跡出土の土器群に含めてよい内容であろう。

1号長方形土壙出土土器群 小型丸底壺 B, 甕 I, 高杯 A・ Fがある。小型丸底壺 Bは,口径8.6㎝を測る小形のもので,口縁部は内彎気味に 大きく外反し,頸部は 強くしまる。おそらく球形の体部がつくものであろう。内外面を丁寧に 箆磨きした 精良品で, 色調は 赤褐色を呈す。甕はすべて I (庄内式)で, 6 個体 (図示しえたものは 5 個体) ある。他に胴部破片が多

数あり、別個体と思われるものもある。口縁部は強く「く」の字状に外反し、端部を小さくつまみ上げて、横にナデ、上方に拡張した形をなす。端部外面にはヨコナデにより凹線をつくりだしている。胴部最大径はやや上位にあり、尖り気味と思われる底部にすぼまり、形態は倒卵形を呈すものである。体部外面は細いタタキ目(約2mm間隔)を、ラセン状に施している。さらに、間隔を置いた細い刷毛目を施したものもある。内面はすべてへラ削りで、器壁を1~3mmと薄く仕上げる。頸部内面に稜を形成する特色をもっている。胎土は極めて、きめの細かい砂粒と雲母を含み、焼成は極めて良好・堅緻である。色調は暗茶褐色・淡茶褐色・淡黄褐色を呈する土器で,他の土器群とは、色調・胎土・調整手法・焼成法とも明確に分離できる土器である。甕Iは、さらに口唇部の形状により、a・b・c・dに分れるが、この土壙内出土のものは、すべてa類である。高杯にはA・Fの2種がある。Aは口径20cmを越す大形の高杯で、杯部の外反が他の高杯と比べ大きいのが特色である。柱状部は若干ふくらみをもち、ラッパ状に開く裾部についづくものである。また裾部に4個の円孔がある。杯部内外はヨコナデで、裾部外面は刷毛のままで仕上げている土器である。高杯F(68)は円形竪穴状遺構・旧河川状遺構出土の高杯Fと、胎土・色調・調整手法とも極めて類似するものである。以上の組成から、8号住居跡・円形竪穴状遺構と同様の土器群といえよう。

2号長方形土壙出土土器群 甕  $\mathbf{I}$  ,高杯  $\mathbf{A}$  ・  $\mathbf{D}$  ・  $\mathbf{F}$  がある。資料的に極めて少なく充分ではないが,甕  $\mathbf{I}$  と高杯  $\mathbf{A}$  ・  $\mathbf{D}$  ・  $\mathbf{E}$  の共存,さらに太目で短い高杯の柱状部が伴う点で,ほぼ前記した土器群に包括しうるものと思われる。

2号方形竪穴遺構出土土器群 壺D, 甕B・F・I, 杯A, 鉢, 高杯C・Fがある。壺Dはゆるやかに外反した少し長目の単口縁がつく壺である。体部外面は粗いタタキ目の上から,刷毛ないしへラ磨きを粗く行ったもので,内面はヘラ削りしたものと,刷毛目を施したものとがある。この粗いタタキ目は,鉢の外面のタタキ目とも共通し、さらに、甕Fとも共通する調整手法である。甕にはB・F・Iの3種がある。とりわけ、甕Bの出現は,前記した土器群にはみられないもので,内鬱気味に外反する口縁部の特色は、「布留式」土器の甕になってより内鬱度をつよめ,隆盛する特徴である。典型的資料を出した下原遺跡の甕(註7)につながる特色を持つ土器といえるものである。また,体部外面の刷毛目,内面のヘラ削りの存在も共通性をもっている。しかし,下原遺跡の甕にみられる球形を呈する胴部とは異なり,最大径が胴中位よりやや上にあり,卵形をなす。このことは,甕I(庄内式)に一般的にみられる胴部の形態を残す土器ともいえる。さらに,体部外面の刷毛目調整をみても,肩部にみられる横位の整然とした刷毛目(しばしば文様的にみえる)が,下原遺跡の甕の大半にみられなくなる傾向を持っていることも重要な点であろう。甕Fも底部付近の破片資料であるが共存している。鉢は,壺D・甕Fと共通する粗いタタキ目を体部外面に残す土器である。底部付近はさらにヘラ削りしている。内面は刷毛のあと,放射状のヘラ磨きを行っている。底部付近のヘラ削りは包含層

出土の瓤F,椀Dにもみられる手法である。高杯にはC・Fの2種がある。Cは杯部を欠く短い脚部の資料であるが,類例が安徳中原遺跡群の4号住居跡の中にあり,それによると,杯部は浅い杯形をなすものである。また,Fは,旧河川状遺構出土の113と,色調・胎土・焼成・調整手法など極めて共通するもので,おそらく器肉の厚い深目の杯部がつくものと思われる。杯底部の屈折も明瞭で,2号長方形土壙出土の高杯F(70)とも共通している。柱状部は短く,内面は充実で,大きく拡がる裾部をもつ土器である。裾部には4個の円孔がある。他に,杯Aもある。これらの一括土器群は,壺D,雞F・I,鉢,高杯Fの共存にみられるように,全体として8号住居跡,円形竪穴状遺構,1・2号長方形土壙出土土器群と組成を同じくするものが多い。また,体部外面に施された粗いタタキ目の存在も共通した手法である。しかし,甕Bの出現は,すでに記したように7号住居跡の主体をなす恋であり,両者をつなぐ過渡期の様相を持っている。ところが,7号住居跡の高杯の主体をなす高杯Bを,一切合まない点で,古い様相の土器群といえるものである。このような組成を持つ遺跡として,安徳中原遺跡4号住居跡の一括土器群があるり,甕Iとは異なるが,口唇をわずかにつまみ上げ,内傾気味に隆起させた甕がある。胴部は倒卵形で,肩部に櫛目波状文を施した土器が共伴している。本遺跡では出土していないが共伴するものと思われる。

7号住居跡出土土器群 壺A・B・F,小型丸底壺A,甕A・B・C・D・I,杯A・B, 椀A,鉢,高杯A・B・Cがある。壺には大形のA・Bと,いわゆる長頸壺のFがある。Aは 内傾した複合口縁状の大形壺である。胴部最大径を中位よりやや上にもち,わずかに,尖り気 味の丸底へとすぼまる形態で,頸部は短く,断面コの字形の凸帯を貼り付けている。凸帯には 櫛状工具により「×」字状の刺突文を付けている。体部外面は刷毛,内面は刷毛のあとへう削 りで仕上げている。内傾する口縁部や,頸部の凸帯にみられる「×」字状の装飾文は,一般に 弥生終末期の壺・甕・甕棺等にみられるものである。しかし,体部外面の刷毛目,とりわけ, 肩部に施された 横位の刷毛, 内面ヘラ削りの原則は,甕A・Bに特徴的に みられる 手法であ る。 壺Bは、一般にいう複合口縁(二重口縁)といわれる外反する二重の口縁部をもった大形 壺である。包含層出土の小形の複合口縁の壺Bb (135)も,少なくともこの土器群に共伴する といえよう。壺Fは、長く外上方に直立する口縁部をもつ長頸壺である。頸部は鋭くくびれ、 球形の体部に移行する。底部は,わずかに尖り気味の丸底である。体部内面上半は細い刷毛, 下半はナデている。 口縁内外と 体部外面は ヨコヘラ磨きで 丁寧に仕上げた精良品である。高 杯Bと共通するヨコヘラ磨きである。 小型丸底壺Aは, いわゆる 定式化した 坩とは異なり, 口頸部の長さが短く,偏球形の体部がつく土器である。甕には,A・B・C・D・Iの5種が あり、A・Bが主体を占め、C・Dがそれに続く。甕Iは細片で、数点あるにすぎない。すで に甕Fの存在はないのが特色である。A・B・C・Dは,後続する下原遺跡の土器群に引き次 がれる特色をもつ甕である。しかし,胴部の形態は,最大径が中位よりやや上にある長球形を なし、典型的な球形を呈す下原遺跡の恋とは異っている。また、甕Bにみられる内彎度も小さく、肩部外面の横位の刷毛目の原則も保たれている。杯には、A・Bの二種がある。下原遺跡の杯Aとくらべ粗雑な作りで、体部内面が刷毛、外面はヘラ削りのままである。 椀はAのみで、他に、平底のものもある。鉢は、体部外面に粗いタタキ目を施したものである。底部は丸底気味の平底で、中央部に凹みをもつ古い様相を残した土器である。また、台付鉢と思われる脚台部もある。高杯には、A・B・Cの3種があり、Bがその主体をしめる。すでに、D・E・Fの高杯が完全に姿を消し、Bが新たに出現し、その主体を占める特色をもっている。高杯Bには、さらにa・bがあり、a類(色調が赤褐色ないし淡赤褐色を呈し、胎土は細砂が極めて少なく精良で、杯部内外と脚部外面とを丁寧にヨコヘラ磨きした作りの良い高杯)が圧倒的に多数を占める。

これから 7 号住居跡出土の土器群は、壺には  $A \cdot B \cdot F$  があり、甕には  $A \cdot B \cdot C \cdot D$  の 4 類があり、 $A \cdot B$  がその主体を占めること。タタキ目を残した鉢が残存すること、高杯 B の新たな出現と、それがその主体を占めること。しかし、高杯 C (29) にみられるような柱状部が短く、裾部の広がりが水平で大きい古いタイプの高杯が残ることがこの土器群の大きな特徴である。

以上、各土器群の器種の消長と、甕・鉢・高杯を中心に、形態・調整手法の変化をみてきたそして、本遺跡での変遷が、8号住居跡・円形竪穴状遺構・1号長方形土壌・2号長方形土壌を中心とした I 期→7号住居跡を中心とした II 期の順にたどることが明らかになった。しかし、各期の組成がかならずしも充分ではなく、欠落した器種も多いため、その間の変遷に問題を残すところも多いといえよう。

従って、ここで、この地域の編年体系を確立するには、資料的にかならずしも充分でないが、少なからず柏田遺跡の土器群と下原遺跡の土器群によってその間の変遷をたどることは可能と思われる。柏田 I 期→ II 期→ II 期→ 下原遺跡出土土器群への推移である。しかし、その間の変遷には、すでに述べたようにいまだ欠落した器種が多くあり、今後の資料の増加により多くの補足、改変が必要な土器群であろう。

また、柏田 I 期の土器群と弥生終末期とされている。西新式の土器群との関係は、いまだ充分でなく、現在、その間に一時期の土器群の存在を想定している。この時期の土器群は、門田遺跡辻田地区17号住居跡一括土器群等があげられる。現在整理中であり後日、報告する予定である。

すでに、各所で触れてきたように 柏田遺跡の 大きな成果は、 外来系土器として 分離しえた 「庄内式」の甕(甕 I )が多量に発見されたことである。このことは、 「古墳発生」というすぐれて重要な歴史的位置にある畿内との関係を把握する上で極めて重要な土器といえる。 柏田 I 期には、多くの「庄内式」 翌を共伴し、各器種の組成も畿内における庄内式並行期の土器群

と共通した様相を持っている。また柏田 II 期は,全体の器種構成としては,庄内式並行期の様相を強く持ちながらも,新たな甕 B の出現に見られるような,柏田 II 期への過渡的な甕が存在する時期といえる。柏田 II 期は甕 A・B の盛行や,高杯 B の出現と,その隆盛にあり I・II 期にみられた,粗いタタキ目を施した壺 D,甕 F,椀 D,鉢や高杯 D・E・F が完全に姿を消す特色をもつ一群である。全体の器種組成として,布留式期の古期のものと考えたい。下原遺跡出土土器群は,球形をなす胴部に,内彎する口縁部をもつ甕,いわゆる坩といわれる定式化した小型丸底壺,スマートな脚部を持った典型的な高杯 B が主体をなすもので,布留式期の典型期と理解しているものである。

以上、不充分ながらもこの地域の古式土師器の変遷をみることができた。しかし、編年体系がほぼ確立しようとしている早良平野との対比は出来なかった。後日明らかにしていきたい。 また、在地系土器群の実態を充分に把握しえなかったことも、今後の課題である。

(井上裕弘)

- 註1 小田富士雄他「有田遺跡」有田遺跡調査団 1968 下条信行他「宮の前遺跡(A~D地点)」福岡県 労働者住宅生活協同組合 1971
  - 2 阳中琢「布留式以前」『考古学研究』12-2 1965
  - 3 原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府島上高校研究紀要』1969
  - 4 折尾学「多々良込田遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』32 1975
  - 5 柳田純孝他「野方中原遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』30 1974
  - 6 井上裕弘「下原遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』3 1977
  - 7 註6に同じ

# Ⅶ 歴史時代の遺構と遺物

# 1. 遺 構

検出された遺構は、掘立柱建物跡 7 棟と溝 5 条のみである。遺物としては、土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・瓦・磁器等で、遺構に共伴した資料は極めて少なく、大半が包含層出土のものである。

#### (1) 掘立柱建物跡

**3 号建物跡**(第150図上,表56) B  $6-10\cdot 11$ 区で検出された 2 間 $\times$  2 間と思われる建物跡である。未発掘区を多く残すのでかならずしも明確ではないが,他の例と比べ, 柱間が 150 cm内外と極めて狭いことから総柱の建物の可能性をもっている。 梁間間292cm, 桁行間復原推定321cmを測る。桁位方位は $N-81^\circ 45'-W$ を指す。

表56 3 号建物跡計測表

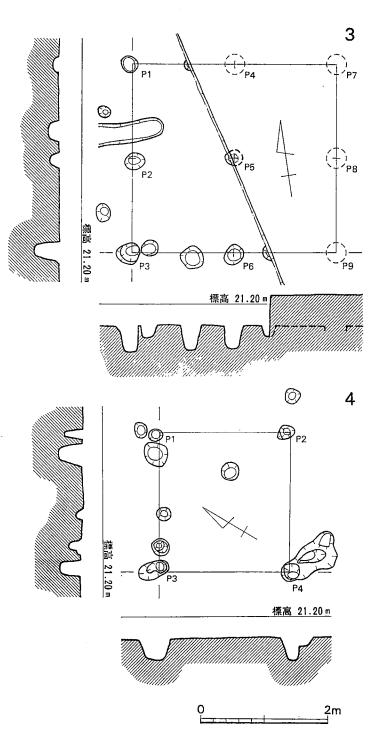
(単位cm)

2 間×2 間		梁間柱間	梁間間		_	桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P 1	P 2	150.0 լ	290.0	P 1	P 4	166.0	326.0	1	10	27	24
2	3	140.0	290.0	4	7	160.0	320.0	2	14	32	25
4	5	146.0	296.0	2	5	158.0 լ	318.0	3	35.5	31	30
5	6	150.0	490.0	5	8	160.0		4			
7	8	146.0 լ	292.0	3 🔍	6	160.0	320.0	5	_		
8	9	146.0∫	292.0	6	<u> </u>	160.0∫	320.0	6	38	33	26
平	均	146.33	292,66	並	均	160,66	321,33	7	_	_	
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·			<u> </u>	<u> </u>				8	_		_
								9	_		
								平均	24.37	30.75	26,25

**4号建物跡**(第150図下,表57) 3号建物の南側で発見された 1間×1間の建物跡である。梁間間206cm,桁行間220cmを測る。 柱穴の深さは30cm内外とほぼ平均している。桁行方位は N-60 $^{\circ}$ -Eを指す。 表58) B4-11・15, B5-9・13区にわたって検出された2間×1間の建物跡である。一部北西隅のP1は溝5に切られているが、ピット底の痕跡を残していた。梁間間309cm、桁行間582cmの長方形を呈す。柱穴の深さは極めてばらつきがある。桁行方位はN-25°30′-Wを指す。

表59) 5 号建物跡の南側に接して検出された1間×1間の建物跡である。梁間間308cm,桁行間324cmを測る。柱穴はP4が19cmと浅いが2個の根石を持っている。桁行方位はN-45°-Eを指し、溝5とほぼ並行する建物である。

7号建物跡 (図版82 第152図上,表60) B4 一10・14区で検出された 1間×1間の建物跡である。梁間間 227cm, 桁行間 235 cmのほぼ方形を呈す。柱穴は二段堀りで,深さは平均39cmとしっかりてしいる。桁行方位は



第 150 図 3 · 4 号建物跡実測 (1/60)

(単位.cm)

1 間×	1 間	梁間間			桁行間	P	深さ	長 径	短 径
P 1	P 2	206.0	P 1	P 3	208.0	1	27	24	19
3	4	212.0	2	4	226.0	2	32	24	21
平	均	209.0	ZİŞ	均	217.0	3	32 35	50 26	25 26
		<u>'</u>			.'	4 平均	31.5	31	22,75

表58 5 号建物跡計測表

(単位cm)

1 間×	2 間	梁間間		Ī	桁行柱間	桁行間	P	深さ	長 径	短 径
P 1	P 2	320.0	P 1	P 3	280.0	580.0	1		_	
3	4	315.0	3	5	300.0	360.0	2	32	33	30
5	6	292.0	2	4	276.0	584.0	3	10	21	20
承	均	309.0	4	6	308.0	364,0	4	6	25	22
	استد	309,0		均		582.0	5	19	21	20
				الساد	•	1	6	28	37	35
							平均	19	27.4	25.4

表59 6 号建物跡計測表

(単位cm)

1間>	〈1間	梁間間			桁行間	Р	深さ	長 径	短 径
P 1	P 2	304.0	P 1	P 3	324.0	1	31	40	37
3	4	312.0	2	4	324.0	2	25	25	18
	均	308.0		——— 均	324.0	3	30	23	23
		330,3				4	19	30	21
						平均	26.25	29.5	24.75

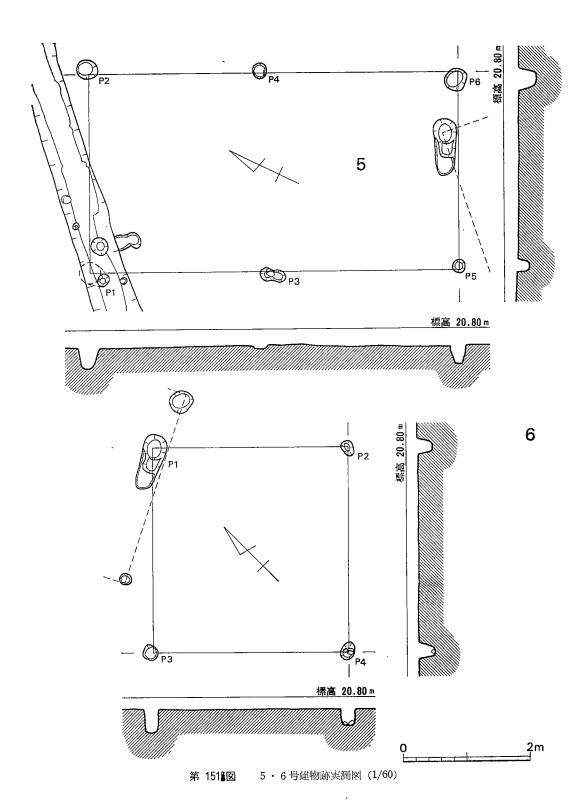
表60 7号建物跡計測表

(単位cm)

1間>	〈1間	梁間間			桁行間	P	深さ	長 径	短 径
P 1	P 2	224.0	P 1	Р3	236.0	1	43	68	54
3	4	230.0	2	3	234.0	2	40	58	55
ZK	均	227.0			235.0	3	43	62	37
		221.0			200,0	4	30	61	58
						平均	39	62.25	51

N-104°45′-Eを指す。

8号建物跡(図版82,第152図下,表61) B4 $-11\cdot12\cdot16$ 区にわたって検出された2間  $\times 1$ 間の建物跡で,溝5に並行している。梁間間312cm,桁行間332cmを測る。P4が二段掘りの柱穴である。他は素掘りであるが,しっかりした柱穴である。桁行方位は $N-41^\circ45'-W$ を指



— 315 —

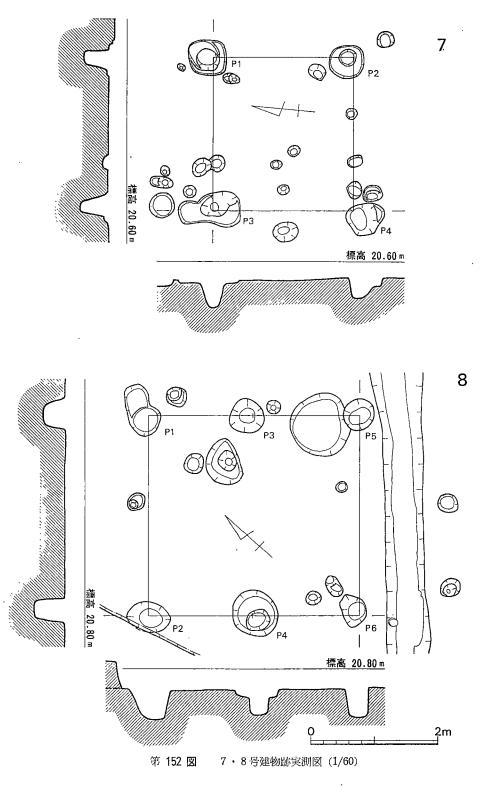


表61	8	号	建	物	跡	計	測	表

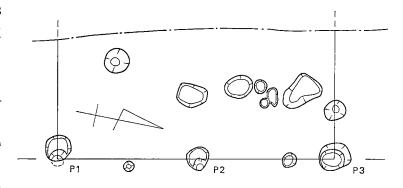
(単位cm)

1間	〈2間	梁間間			桁行柱間	桁行間	P	深さ	長 径	短径
P 1	P 2	310.0	P 1	P 3	160.0	226.0	1	35	50	43
3	4	320.0	3	5	176.0 }	336.0	2	44	69	50
5	6	306.0	2	4	168.0	328.0	3	52	55	55
平	均	312.0	4	6	160.0 }	320.0	4	38	75	68
	450		平	均	-	332.0	5	34	50	46
				4-1		332.0	6	46	50	38
							平均	41.5	58.1	50

す。

9 号建物跡 (第 153

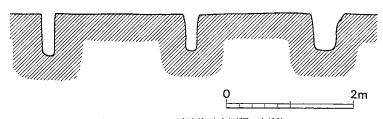
図) B6-6・7区 で検出されたもので, その大半は未発掘のため不明である。P1-P3間が436cmを測る2間×?間の建物跡である。柱穴は二段掘りのしっかりしたものである。



標高 21.50 m

#### (2) 溝狀遺構

**溝1** B10-13区か らB9-4区にかけて 走る溝でB9区では耕 作が深く,溝底をわず



第 153 図 9 号建物跡実測図 (1/60)

かに残すだけの溝であった。B10-13区で溝2と複合する。断面は逆台形状を呈し,最も広く B10-9区で約1m,深さは約14cmを測る浅い溝である。溝底のレベルをみると,北東側が15cm以上深く,南東から北東へ流路をもつ溝であったことがわかる。出土遺物としては,須恵器・土師器・磁器・瓦等が多数ある。古い遺物として須恵器10m期のものと,奈良時代の瓦の破片が多数出ている。新しい遺物としては,糸切り底の土師器(第155図 $15\cdot17$ )と,青磁・白磁片が10m010m101

土師器と、磁器が示す鎌倉時代前期後半から中期前半期の年代が比定できよう。

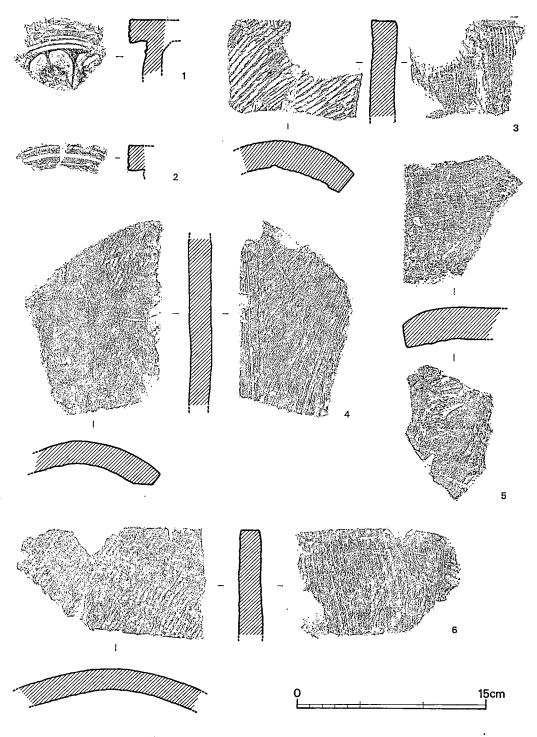
- 溝2 B10—13区で溝1と複合する溝で,溝1より東側に振っている。発掘時の表面観察では切り合い関係はつかみえなかったが,溝底の方向から見て溝2が新しい可能性を持っている。溝の幅は広い所で約60cm,深さ18cmを測る断面U字状をなす溝である。出土遺物としては,糸切り底の土師器片が数点出土している。溝1とほぼ同じ鎌倉時代前期後半から中期前半のものと思われる。
- **溝3** B9-16区からA9-15区にかけて走る溝で耕作による削平で一部,B9-3区付近でとぎれるが,溝1とほぼ平行して走るものである。溝の幅は広い所で,約50cmと狭いが,深さは約39cmあり,断面もしっかりしたU字形をなす溝である。また,B9-3区で溝4と当初は直交していたものと思われる。時期は,出土遺物がほとんどなく不明であるが,流路は南東から北東である。歴史時代のものであろう。
- **溝4** B7—8区からB9—3区にかけて走る溝で、当初は溝3と直交していたものと思われる。溝の幅は、広い所で約40cm、深さ約33cmを測り、断面U字状をなす溝で溝3と同様のしっかりした溝である。流路は北西から南西に走るものである。出土遺物はなく、時期は不明であるが、溝3とほぼ同じ時期に比定できよう。
- **溝5** B 4-12区から16区にかけて走る溝で、幅約60cm・深さ約11cmを測る。断面は緩やかなU字形をなす。溝3と比べ北に少し振っている。溝に平行して北側に8号建物跡がある。出土遺物としては、糸切り底の土師器片が若干ある。時期は鎌倉時代前半期のものであろう。

# 2. 遺 物

遺構と共伴して確認されたものはすべて鎌倉時代前半期のものである。しかし、本遺跡出土の遺物には、奈良・平安・鎌倉時代にわたる瓦・土師器・須惠器・土師質土器・瓦質土器・磁器などが多数ある。

#### (1) 瓦

軒丸瓦 (図版83,第154図1・2) 1は重弁八葉軒丸瓦の破片資料である。周縁に三重圏 文を飾り,その中に八葉の重弁,逆三角形の間弁を配している。蓮弁は先端部が反転し,弁形 は大きく丸い形の整ったものである。色調は淡灰色を呈す。胎土は精良で,焼成は普通。瓦当 径は復原して約17.6㎝,周縁幅は1.8㎝を測る。2は,1と同様の重弁八葉軒丸瓦の周縁部破片資料である。周縁には三重圏文が飾られている。色調は暗灰色を呈する。胎土には多くの砂



第154図 軒丸瓦・丸瓦・平瓦実測図 (½)

粒を含むが、焼成は普通である。瓦当径は復原して約17.6cm,周縁幅は1より少し広く2cmを 測る。両者とも器面の風化がはげしい。

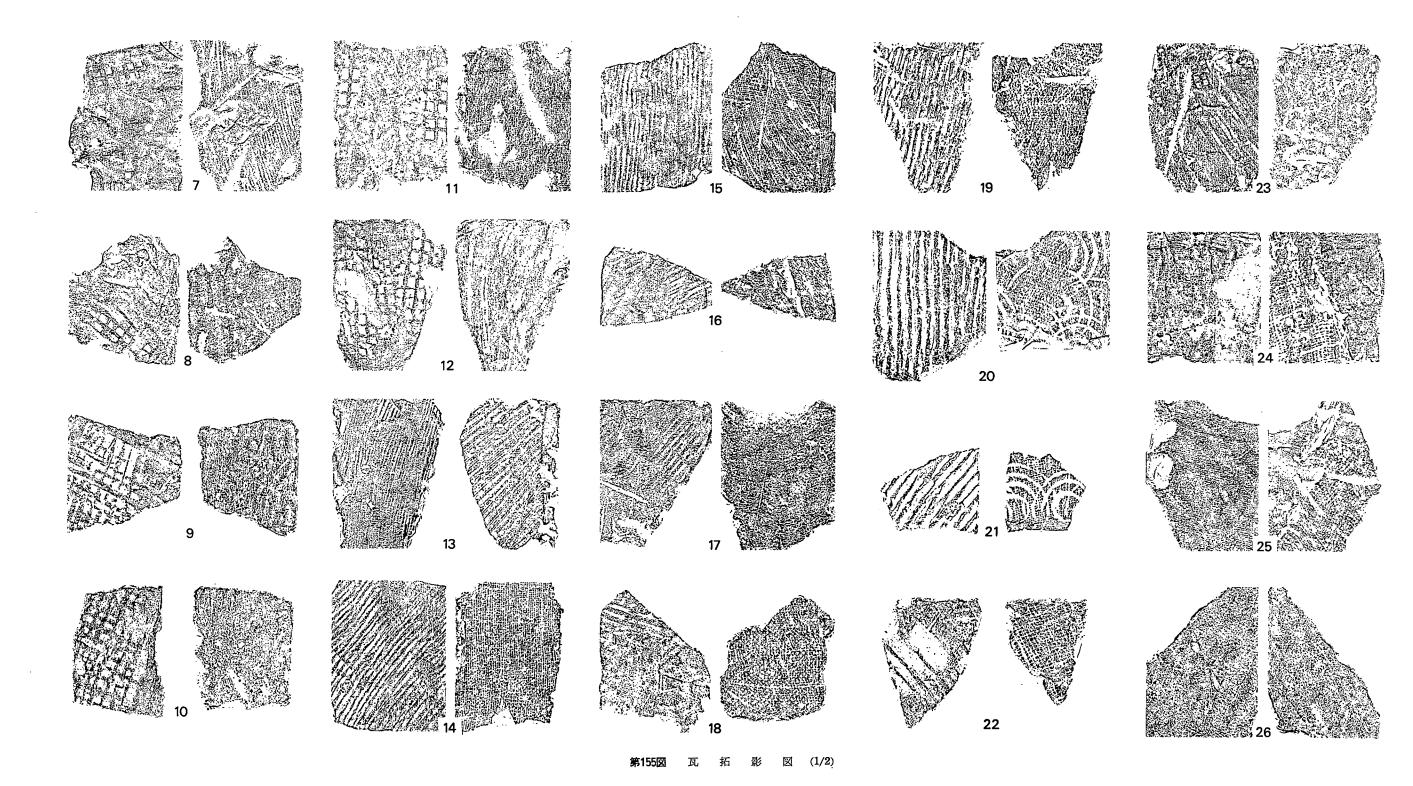
丸瓦・平瓦 (図版83~86,第154図 3~6・155図 7~26) すべて破片資料であるため、大きさ、模骨の規模等は不明である。叩文様は、大きく格子目文と平行線文、両者の複合文に分けられ、格子目文 4 種、平行線文 9 種、複合文 1 種に細分できる。他にすり消されているもの (5・24~26) がある。

格子目文(第155図 7~12) 7は凸面が 3.5×3.5mmの正方形格子目文, 凹面は細かい布目で, また, 粘土板糸切痕も明瞭である。色調は淡黄褐色を呈し, 焼成は軟質である。平瓦。8は凸面が 4×4.5mmの長方形格子目文, 凹面は布目で, その上をさらにナデて仕上げている。縁はへう削りしている。焼成は須恵質。丸瓦。9は凸面が 3.5×5 mm の粗雑な長方形格子目文, 凹面は布目で, 焼成は須恵質である。丸瓦。10~12は凸面が4.5×5 mmの長方形格子目文, 凹面は布目である。色調は淡茶褐色で, 焼成は軟質。12の凹面には糸切痕が残っている。全て丸瓦である。

平行線文 (第154図3~6・第155図13~23) 3 は幅 3 mmの平行線文, 凹面は布目で, 糸切 痕を明瞭に残している。焼成は須恵質である。丸瓦。 4・17は幅 2 ㎜の平行線文(叩き板の凹 面の幅が2mmで、 $14\sim16$ のものと比べ細い),凹面は布目である。4には糸切痕が明瞭で、17はナデて仕上げている。 焼成は4が須恵質で,17は褐色を呈す軟質の瓦である。4は丸瓦。17は 平瓦。5は幅2.5 mmの平行線文,凹面は布目で,糸切痕を残す。焼成は須恵質である。平瓦。 13は幅 1 ㎜の平行線文,凹面は布目で,糸切痕も顕著である。焼成は須恵質。丸瓦。14~16は 幅2mmの平行線文,凹面は布目で15には糸切痕を明瞭に残している。色調・焼成は,14が灰色 で硬質, 15が淡黄褐色, 16が茶褐色を呈し, 軟質である。すべて丸瓦。18は幅 2.5 mmの平行線 文, 凹面は粗い布目である。色調は茶褐色を呈し、焼成は軟質である。平瓦。19は幅2.77㎜の 平行線文, 凹面は粗い布目である。焼成は硬質。丸瓦。20は幅4㎜の太い平行線文, 凹面は布 目のあと,青海波文の叩きがみられる。色調は淡黄褐色で,焼成は軟質である。平瓦。21は幅 4 mmの太い平行線文(叩き板の凹面が 2 mmで, 20と比べ細い), 凹面は布目のあと, 青海波文 の叩きがみられる。焼成は須恵質である。丸瓦。22は幅5 mmの太くて浅い平行線文, 凹面は粗 い布目で,色調は淡茶褐色を呈す。平瓦。23は2.5×2.5 mmの細かい正方形格子目文と,幅2.5 mm(叩き板の凹面が 3~4.5mm)の平行線文の複合文で,凹面は布目である。 色調は 茶褐色を 呈し、焼成は軟質である。丸瓦。

他に、凸面がすり消されて不明なもの( $5 \cdot 24 \sim 26$ )がある。5 の凹面は布目のあと、青海波文を施し、26は布目のあと、ナデて仕上げている。他は粗い布目のままである。

小結 すべて奈良時代のものと思われる軒丸瓦・平瓦・丸瓦の破片資料である。とりわけ、 2点出土した軒丸瓦は、かって山田寺系の重弁八葉軒丸瓦(註1)を出した白水廃寺の瓦(図版



83)と同范のものである。また、共伴した平瓦・丸瓦についても、すでに記したように須恵器の叩文である。青海波文を凹面に持つもの(20・21)や、焼成が須恵質のもの(3~5,8・9,21)が多く、古い瓦の特色をそなえている。叩文様には、格子目文4種、平行線文9種、複合文1種がある。これらの瓦を多く出した溝1内では、須恵器片が多量に共存した。この須恵器には一点収期のものも含まれていたが、大半が収a・b期のもので現在ほぼ7世期中頃から後半の年代が比定されているものである。従って、これらの瓦も、その時期のものといえよう。この種の平瓦・丸瓦類は、門田遺跡門田地区(註2)、谷地区の調査でも確認されている。また、上白水字ウトロの丘陵斜面では、道路建設中に2基の窯跡が発見され、同種の平瓦が採集されている。近い将来、この周辺で、かっていわれた白水廃寺跡ないしは同種の瓦を葺いた建物跡が発見される可能性をもっている。

#### (2) 土師器

高台付椀 I 類 (図版87,第156図  $1 \sim 5$ ) やや内傾するしっかりした 高台に, 直線的に外上方にのびる体部がつくものである。 1 は口径14.4cm,器高 6.1cmを測るもので,外底部には墨書がみられる。字体はかならずしも判然としないが,「字」の文字を思わせる。 2 この文字は「字」と同意で,のき・へい・さかひ・やね等を意味する(註3)。体部内外はヨコナデで,内・外底部は不定方向のナデで仕上げている。色調は淡赤褐色を呈し,焼成は良好である。 2 ~ 5 は高台部の小破片資料であるため,底径・かたむき等に問題はあるが,ここではほぼ同類のものとしてあつかっておく。

高台付椀 I 類 (図版87, 第156図 6・7) 内傾する細身の高台に, 丸味を持った体部がつき, 口縁部は外側に屈曲する特色をもっている。 6 は口径12.2cm,

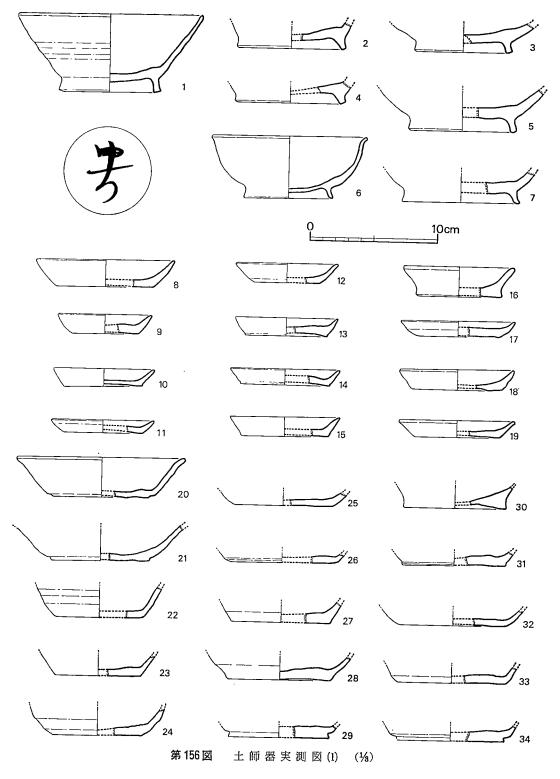
器高 4.9㎝を測る完形品である。器体の調整はヨコナデとナデである。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良い。7は高台部の破片資料であるが、高台の特徴からほぼ同類と思われる。

皿 I 類 (図版87, 第156図8) 口径10.9㎝, 器高2.1㎝, 底径7.55㎝を測る大形の皿である。底面の切り離しは, 器面の風化でかならずしも明瞭でないが糸切りではなく, ヘラ切りの可能性をもつ土器である。

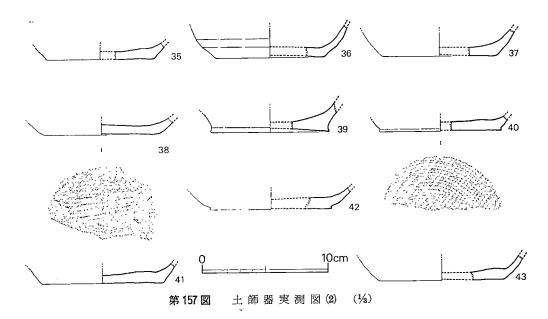
皿 Ⅱ 類 (図版87,第156図 9~19,表62) 底部の切り離しが糸 切りの皿である。大きさには大小ある。共伴関係が判るものは,溝 1 内出土の15・17のみで,他はすべて包含層出土のものである。また,10をのぞき,すべて破片から復原実測を行ったもので,かなら\_

表62 土師器皿計測表 (単位cm)

	口径	底径	器高
9	(7.4)	(5.2)	(1.5)
10	7,95	6.1	1.4
11	(8.1)	(6,2)	(1.0)
12	(8.1)	(5,0)	(1.5)
13	(8.1)	(6.4)	(1.4)
_14	(8.65)	(7,0)	(1,25)
15	(8,65)	(6.85)	(1.5)
16	(8.75)	(6.85)	(2,3)
17	(8.95)	(6.4)	(1.2)
18	(9.0)	(7.1)	(1.6)_
19	(9.1)	(6.6)	(1.3)



<del>- 322 --</del>



ずしも充分でないが、計測値は表62のとおりである。これらの皿は、大まかではあるが、a・ b・c・d に細別できる。a (14・15・17~19) は、口径8.65~9.1cm,底径6.6~7.1cm,器高  $1.2\sim 1.6$ cm を測るグループ,b( $10\cdot 11\cdot 13$ )は,口径 $7.95\sim 8.1$ cm,底径  $6.1\sim 6.4$  cm,器高  $1.4 \sim 1.5 cm$  を測る。 a とくらべ,口径・底径が少し小さくなる。 c ( 表63 9・12) は,口径7.4~8.1㎝,底径5.0~5.2㎝,器高1.5㎝を測り, 底径が極めて小さくなる。d (16) は,口径8.75cm,底径6.85cm,器

(図版87, 第156図20・21) 底面の切り離しが、ヘラ切 杯I類 りのものである。20は口径13.4cm,器高3.2cm,底径7.5cmを測る。底 部と体部の境には、わずかな屈折をもち、体部は外上方に直線的にの び、口縁部にてわずかに外反する特色をもっている。21は口縁部を欠 き口径は知りえないが、底径は7.7 cmを測る。両者とも色調は淡褐色 を呈し, 胎土・焼成良好である。

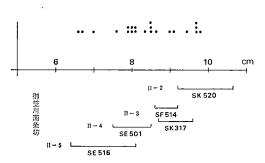
高2.3㎝を測り、他とくらべ極端に器高が高くなる。

(図版87, 第156・157図22~43, 表63) 底部の切り離し 杯Ⅱ類 が糸切り(糸切り痕+板目痕をもつものも含める)のものである。す べて底部のみの資料で、新旧の混在が充分考えられる。底径の計測値 は表63のとおりで、6.6~9.8cmの幅をもっている。6.6~6.7cmと小さ

No.	底径	No.	底径
22	(6.6)	33	(8.5)
23	(6.7)	34	(8.5)
24	(7.0)_	35	(8.5)
25	(7,6)_	36	(8,65)
26	(7.9)	_37	(9.0)
27	(7.9)	38	(9.1)
28	(8.0)	39	(9,45)
29	(8.0)_	40	(9.7)
30	(8.1)	41	(9.7)
31	(8.1)	42	(9.7)
32	(8,3)	43	(9.8)

いもの( $22 \cdot 23$ ), $7.9 \sim 8.1 cm$ のもの( $26 \sim 31$ ), $8.3 \sim 8.65 cm$ のもの( $32 \sim 36$ ), $9.0 \sim 9.1$ cmのもの (37・38), 9.7~9.8cm (40~43) と大きいものに, それぞれ集中する傾向をもって いる。とりわけ、ピークをなすのは7.9~8.65cmの所で、11個体と半数を占める。

小結 遺構と共伴した資料は極めて少ない。溝1内出土の皿(14・17)と杯(25・28・33)のみで,他は包含層出土の高台付椀・皿・杯の資料である。土師器としては平安・鎌倉時代のもので,鎌倉時代のものがその大半を占める。それは遺構として検出された溝状遺構・掘立柱



第 158 図 御笠川南条坊遺跡との対比

建物群がそれと同一時期のものであることからも判る。高台付椀をⅠ・Ⅱ類,皿をⅠ・Ⅱ類に分け,さらにⅡ類内をa・b・c・dに細分した。杯はⅠ・Ⅱ類に分けた。

高台付椀 I 類(1) 少し小振りであるが大率府 第18次 調査の S E 400 出土の 椀に 共通する特色をもっている。横田賢次郎・森田勉氏等が 9 世紀 前半代の 年代を 与えているのである (註 4)。 I 類は, S K 674出土のものと同類のもので,これは天慶 4 年(941)の純友の乱により焼き打ちされた後に整地された層出土の椀と,形態的にほぼ同時期のものと考えられている土器である (註 5)。 また,皿 I 類も高台付椀 II 類と共伴する可能性をもつ土器といえる。 皿 I 類は,近年,御笠川南条坊遺跡の資料で,精力的に研究を進めている前川威洋氏の分類 (註 6)に対比すると, a は  $I = 3 \cdot 4$ , b は I = 4, c は I = 5 類に対比できよう。 I = 3 類は鎌倉時代前期後半, I = 4 類は 鎌倉時代中期前半, I = 5 類は 鎌倉時代中期後半と 考えられている。 d は,さらに新しい時期の資料の可能性をもっている。

杯 I 類は,底部の切り離しがヘラ切りで,口径13.4cm,器高3.2cm,底径7.5cmを測り,高台付施 I 類と共伴する可能性をもつ土器である。 I 類は,すべて底部の破片資料であるため充分な分類はしえないが,底径の計測値を,豊富な資料から分類された御笠川南条坊遺跡の資料の底径との対比でみると 第158図 のようになる。それをみると, $I-2\sim I-5$ 類の土器の存在がおおまかではあるが把握できる。とりわけ,I-4類の杯と思われる土器が,その大半を占めることも判る。いわゆる鎌倉時代中期前半とされている土器群である。溝 1 内出土の杯(25・28・33)は,I-4類に入るもので,共伴したIIII a(14・17)も,II-3類ないしは 4 類とされた土器群であり,ほぼ一致する。

#### (3) 須恵器

杯蓋 杯蓋は口縁部の特徴から3分類出来る。

#### I類 (第159図1~5)

I類としたのは、口縁部に「返り」を有するものである。1は復原口径10.6cmを測る。残存

# Ⅱ類(第159図6・7)

口縁部に返りがなくなり、端部がほぼ直角に折れ曲がるものを I 類とした。 6 は 復原口径 14.3cm を測る。調整は口縁部・体部内外面共回転ナデ,天井部外面はやや乾いた段階で箆削りを施しているのか粒子の移動痕がみられる。内面は不定方向のナデである。胎土は砂質性で、細かい砂粒を含んでいる。焼成は良好で、色調は淡い茶灰色を呈している。 7 は復原口径11.7 cm を測る。残存部分の器面内外面共、回転ナデを施している。胎土・焼成共に良好で、色調は灰色である。11 は復原口径15.9cmで、他は 6 とほぼ同じである。

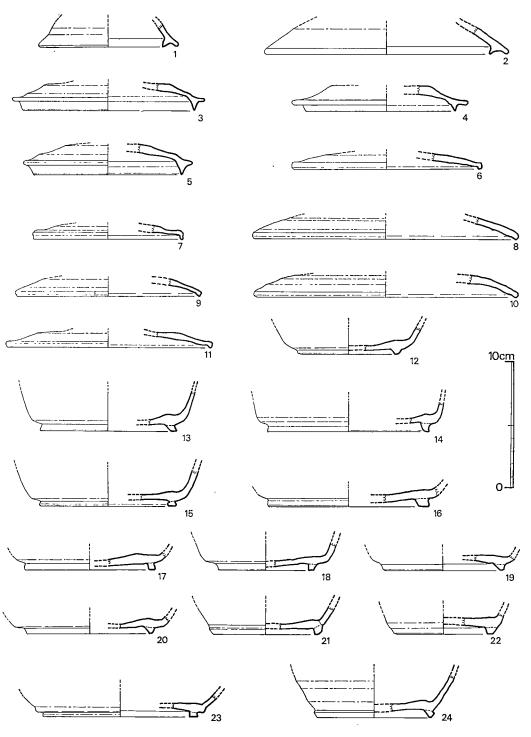
#### Ⅲ類 (第159図8~10)

■類としたのは、口縁端部を折り曲げないか折り曲げても鈍角の杯蓋である。8は復原口径20.6cmを測る。器面は内外面共、回転ナデを施している。胎土は砂粒含み、焼成は普通で、色調は灰色を呈している。9は復原口径14.2cmを測る。器面内外面共回転ナデを施している。胎土は良好・焼成も良好である。色調は灰色を呈している。10は復原口径20.3cmを測る。器面は内外面共回転ナデで調整している。胎土は砂粒多く含み、普通である。焼成はややあまく、色調は灰色を呈している。

# 有高台杯 有高台杯は高台の特徴から3分類出来る。

#### I類(第159図13~14)

I類としたのは、高台が小さくやや屈曲するタイプである。13は復原高台径10.7cmを測る。器面は残存部分回転ナデを施している。胎土は砂粒若干含み、良好である。焼成良好で、色調は灰色を呈している。14は復原高台径12.6cmを測る。調整は残存部分回転ナデを施している。胎土は砂粒若干含み、焼成は普通である。色調は外面暗灰色・内面灰色を呈している。



第159図 須恵器実測図(%)

#### Ⅱ類 (第159図12・15~20)

■類としたのは、高台が屈曲する事なく、断面長方形となるタイプである。 15は 復原口径 10.6cmを測る。底部内面は不定方向のナデ、その他は回転ナデを施している。胎土は砂粒若干含み、良好である。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。16は復原高台径12.5cmを測る。調整は15と同じである。胎土は良好で、焼成も良好である。色調は灰白色を呈している。17は底部内面に箆削りの痕跡を残し、内面は不定方向のナデを施している。他は回転ナデを施している。復原高台径10.3cmを測る。胎土は良好で、細かい長石粒を若干含んでいる。焼成はややあまく、色調は灰色を呈している。18は復原高台径7.5cmを測る。残存部分には、回転ナデを施している。胎土は砂粒含み普通である。焼成は良好で、色調は灰色を呈している。19は復原高台径9.5cmを測る。残存部分の調整は回転ナデである。胎土は砂粒若干含み良好である。焼成は良好で、色調は灰色を呈している。20は復原高台径9.9cmを 測る。底部外面は箆削り痕、内面は不定方向のナデ、その他は回転ナデを施している。胎土は良好で混入物を含んでいない。焼成は極めて良好で、色調は青灰色を呈している。12は復原高台径8cmを測る。底部外面は箆削り痕、内面は不定方向のナデを施し、他は回転ナデである。胎土は砂粒含み、焼成は普通で、色調は灰色を呈している。

#### Ⅲ類 (第159図21・22・24)

■類としたのは、高台が体部から 直線的 についた ものである。21は復原高台径10.3cmを測る。底部外面に箆削りの後ナデ、その他は回転ナデを施している。胎土・焼成共に良好で、色調は灰色を呈している。22は復原高台径7.8cmを測る。底部外面には 箆削り 痕がみられ、内面は不定方向のナデを施している。その他は回転ナデである。胎土は若干の砂粒を含み普通である。焼成は非常にあまく、灰白色の色調を呈している。24は復原口径 9 cmを測る。この有高台杯は他と異なり、高台がややはね上がり気味になり外側に段を有する。底部外面は箆削り痕を残し、内面は不定方向のナデを施している。体部その他は回転ナデである。胎土は細砂粒含み良好である。焼成は良好、色調は暗灰色を呈している。23は高台付壺等の底部であろう。復原高台径12.1cmを測る。体部内外面・高台には回転ナデがみられる。胎土は細砂粒多く含み普通である。焼成は普通、色調は暗灰色を呈している。

土鍋(第160図 1・2) 1 は復原口径30.6mを測る口縁部の 破片資料である。 口縁部は上下に拡張された直立気味の複合口縁状をなすものである。 色調は 黒灰色で, 焼成は 普通である。 2 は復原口径35.5cmを測る口縁部の破片資料である。 口縁部は, 内傾する複合口縁状をなす。 色調は灰色を呈し, 焼成は良好である。 (井上裕弘)

**小結** 以上これまで柏田遺跡出土の歴史時代の須恵器について述べてきたが、若干の時期考察を行ないまとめとしたい。

杯蓋 I 類は、小田氏編年並びに向佐野・長浦窯跡の調査に依る編年からすれば、須恵器 N a

期に相当する。杯蓋 II 類と有高台杯 II 類は同上の編年に依れば,須恵器 II b 期に相当する。杯蓋 II 類と有高台杯 II 類は須恵器 II c 期に相当する。有高台杯 II 類は須恵器 II は 期に相当する。有高台杯 II 類は須恵器 II 期に相当するのであろう。実年代は, II a が 7 世紀中頃を中心とした年代が与えられている。 II b が 7 世紀後半を中心とした年代である。 II c は 8 世紀前半から 8 世紀後半ないし末という年代である。 II は 平安時代前期つまり 9 世紀代が比定されている。23の高台付壺と思われる須恵器については,高台の形態からすれば,須恵器 II c に相当する可能性もある。しかし,その確証はなく判断は避けたい。又,須恵器の土鍋が 2 点出土しているが,口径・口縁部の特徴からすれば中世のものであろう。 (藤瀬禎博)

#### (4) 土師質土器

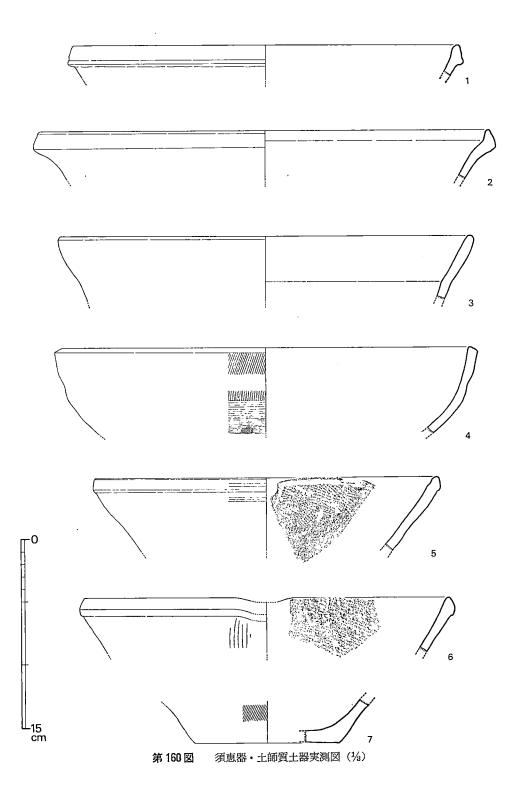
土鍋(第160図3~7) 3は口縁部の破片資料で,復原口径32.8㎝を測る。内外ともヨコナデで仕上げている。外面には煤の付着がみられる。色調は淡茶褐色を呈す。胎土には多くの砂粒を含み,焼成は悪い。4は胴部上半の破片資料で,復原口径32.2㎝を測る。わずかに外反する口縁部をもつもので内面に稜を形成し,胴部に移る器形を呈するものである。体部外面は粗い刷毛を施し,内面はナデて仕上げている。色調は淡黄褐色,胎土は精良で,焼成も良い。5は復原口径27.2㎝を測る。胴部上半の破片資料である。外面は刷毛のあとヨコナデ,内面は上半は刷毛のまま,下半はナデている。色調は淡黄褐色を呈し,焼成は良くない。6は復原口径28.9㎝を測る片口の土鍋である。外面は粗い刷毛のあとナデ,内面は粗い刷毛で仕上げている。色調は淡黄褐色を呈す。焼成は普通。7は平底の底部の破片資料である。外面は刷毛とナデ,内面はナデ仕上げである。色調は淡黄褐色を呈し,胎土には多くの砂粒を含む。焼成は良い。

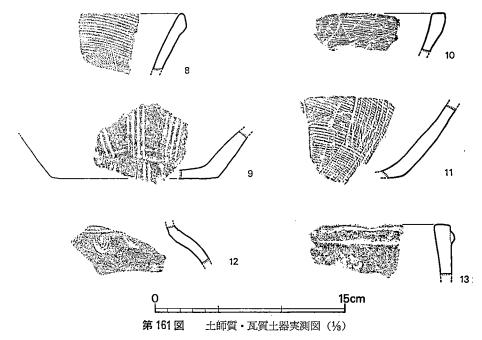
擂鉢(第161図8・9) 8は口縁部の小片で、口唇部が肥厚されているものである。内面には3条の櫛目条溝がある。内面は粗い刷毛、外面はナデ仕上げである。色調は淡黄褐色で、焼成は良好。9は底部の資料で、内面体部には4条、内底面に2条の櫛目条溝がみられる。色調は暗褐色を呈す。焼成普通。

### (5) 瓦質土器

土鍋 (第161図10) つまみあげ気味に肥厚させ、口唇部を 平滑にしている 口縁部の小片である。内面の仕上げは刷毛、外面はナデである。

**擂鉢**(第161図11) 胴部下半の破片資料で、内面に7条の 櫛目条溝をもっている。 内面は 刷毛、外面は刷毛とナデで仕上げている。色調は淡灰色で、焼成は良い。





湯釜(第161図12) 肩部の破片資料で、外面には一条の沈線と 重弧文で 飾られている。色調は灰黒色を呈す。胎土は精良で、焼成良好である。

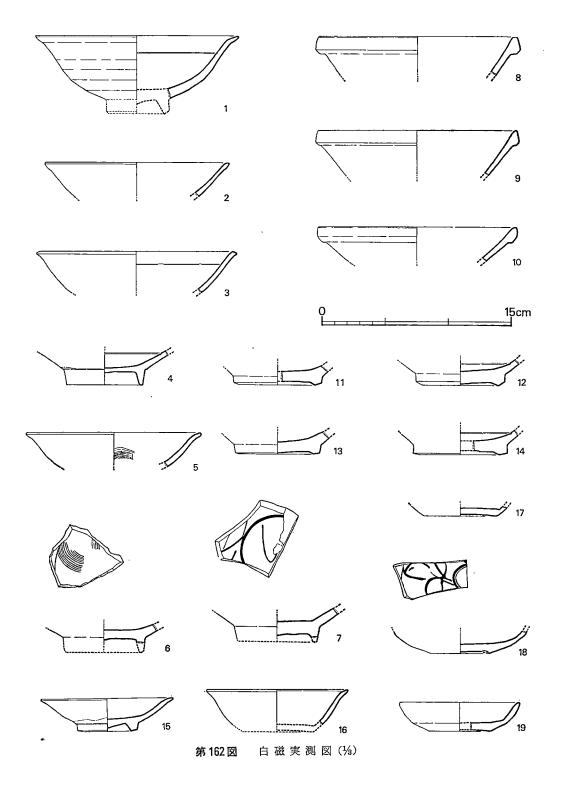
火舎(第161図13) 口縁部の破片資料で,口縁部外面に1条の貼り付け凸帯をもっている。 内面は刷毛,外面はナデ仕上げである。色調は灰黒色を呈す。焼成は良くない。

# (6) 磁 器

白磁

椀 I 類(図版88・89, 第162図1~4) 1 は底部を欠く,2・3 は胴部上半,4 は底部の破片 資料である。やや内彎しながら延びる胴部を口縁部で引き上げて軽く外反させる1と,端部に 平坦面をもたせて終るもの2・3 がある。底部は4のようなものと若干器肉の厚い高台がつく ものとがあると思われる。1 は口径16cmを測るもので,口縁部内面には一条の沈線がめぐる。 釉色は黄白色をなし,胎土は灰白色を呈す。2 は口径14.7cmを測り,端部は水平である。釉色 ・胎土とも乳白色を呈す。3 は口径15.8cmを測り,端部は平坦で外傾する。口縁部内面に1条 の圏線がめぐる。釉色は黄白色を呈し,胎土は灰白色をなす。4 は底径6 cmを測る高台で,垂 直に高くのびる。高台は比較的肉薄で,畳付部はやや細くなり水平である。釉色は乳白色をな し,高台には施されていない。

**椀 I 類(図版88・89,第162図5・6)** 器形としては I 類とほぼ 同じであるが, 内面に細い櫛歯文が描かれているものがある。5 は胴部上半,6 は高台部の破片資料である。5 は口径



— 331 —

14cmを測り内面には細線櫛歯文が描かれている。 釉色は 黄白色で, 胎土は 灰白色をなす。 6 は内底面に櫛歯文が描かれ,身込に一条の圏線がめぐるものである。高台がつくものと思われる。 釉色は乳白色で,胎土は灰白色を呈す。

椀 ■類(図版88・89,第162図7) 高台部の破片資料である。 内面には 箆描きのツル草文と一条の圏線がめぐり、器形としては I 類とほぼ同様のものと思われる。 釉色は緑かかった淡黄色を呈し、高台内面を除く全面に施されている。 胎土は灰白色。

椀Ψ類(図版88・89,第162図8~14) 8~10は口縁部,11~14は底部の破片資料である。口縁部はいわゆる玉縁状なるもの(8~10)で,ゆるやかに内彎した胴部から低く,肉厚のずんぐりした高台(11~14)に続くものである。8は口径15.5cmを測り,他と比べ玉縁が大きい。釉色は黄白色で,内外に施されている。胎土は黄白色を呈す。9は口径15.6cmを測り,釉色は乳白色で,胎土は灰白色。10は口径15.6cmで,少し浅目の椀と思われる。釉色は乳白色,胎土は灰白色である。11~14の高台部の資料は11の外面一部のたれ釉を除き,他はすべて内面にのみ施釉されている。底径は13が最も小さく6.6cm,他は6.9~7.4cmを測る。また,内面身込に1条の圏線がめぐるもの12・14もある。釉色・胎土とも黄白色,他はすべて乳白色で胎土は灰白色を呈す。

皿 I 類 (図版88・89, 第162図15) 口径10.5cm, 器高2.6cmを測る器高の低い高台付の皿である。釉色は青白色で, 身込と高台には施されていない。胎土は灰白色を呈す。

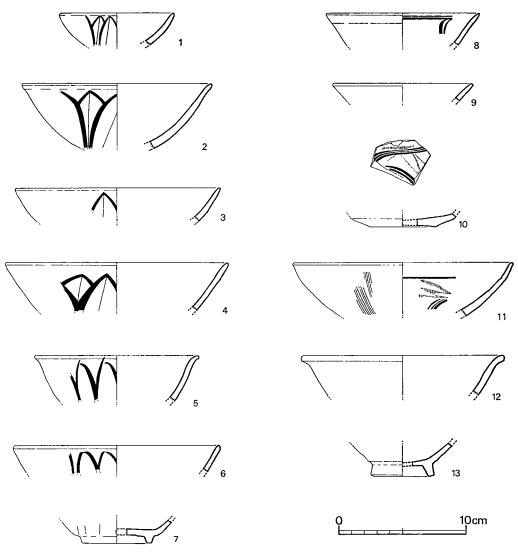
皿 I 類(図版88・89,第162図16・17) 16は口径11.1㎝,復原器高3.3㎝を測る少し深目の皿である。底部は、わずかに上げ底状をなす平底17で、胴部は内彎気味に外反し、口縁端部で小さく外反する。口縁端部には釉のかからない、いわゆる口禿げ状を呈する。釉色は乳白色で、口縁端部を除く全面に施されている。胎土は灰白色を呈す。

皿 II類(図版88・89,第162図18) 杯形を呈し,内面にへう描きの ツル草文が 描かれているものなど椀 II類と共通するものと思われる。釉色は緑がかった淡黄色で,胎土は灰白色を呈す。底径 4.5~cm。

■Ⅳ類(図版88・89, 第162図19) 口径9.4cm, 器高2.3cmを測る 小形の杯形を 呈するもので, 釉色は,他と異なり淡緑色である。釉は外底部を除く内外に施され,胎土は淡灰色を呈す。 青磁

[A類] いわゆる竜泉窯系のもので、体部外面に蓮弁文を有するもの。

椀 I (図版89, 第163図1~4) 蓮弁の鎬が明瞭なグループで,内彎気味に外反する体部から口縁はそのまま丸くおさまる。器形には大小がある。1は口径9㎝を測る小形で,高台が付くものと思われる。釉色は淡緑黄色で,体部には貫入が目立つ。胎土は黄白色。2は高台を欠く資料で,口径14.9㎝を測る大形のものである。釉色は淡緑色で,胎土は淡灰色を呈す。3は口径16㎝を測る口縁部の破片で,釉色はあめ色を呈す。器面には貫入がみられる。胎土は黄灰



第163図 青磁実測図(%)

色。 4 は口径 17.4~cm と最も 大きいものである。釉色は 黄緑色を 呈し, $0.6\sim1~mm$  と 釉厚も厚い。胎土は淡灰色。

 がある。胎土は淡灰色。

[B類] いわゆる竜泉窯系のものではあるが、体部外面に蓮弁文を有しないもの。細片のため図示できないが 1点ある。

[C類] いわゆる竜泉窯系のもので、内面に片彫りの草花文が描出されているもの。細片で図示しえないが7点ある。

〔D類〕 いわゆる竜泉窯系のもので、体部内面が5区画され、その中に片彫りの草花文様が描出されたもの。

椀(図版89・90,第163図8) 口径12cmを測を小形のもので,高台の付くものと思われる。 釉色は黄緑色を呈し,胎土は灰色である。

〔E類〕 いわゆる同安窯系のもので、一般に珠光青磁と呼称されているもの。

皿(図版90,第163図9・10) 9は口径10.9cmを測る。釉色は淡緑色を呈し,器面には貫入がみられ、胎土は淡灰色を呈す。10は底径5.2cmを測りわずかに上げ底状の底部である。内底部には箆描文と櫛歯文が描出されている。釉色は淡緑色で、胎土は灰色。

椀(図版90,第163図11) 高台を欠く胴部上半の資料で,口径17.1cmを測る。体部外面には 櫛歯文が施され、口縁部内面に1条の圏線、体部内面には箆描文・櫛歯文が組合せて描出され ている。釉は内外に施され、黄緑色を呈す。胎土は淡灰色。

#### 〔その他〕

椀(図版90,第163図12・13) 12は口径15.9cmを測る胴部上半の破片資料である。高台がつくものと思われる。釉色は淡緑色を呈し、内外に施されている。胎土は灰白色。13は高台の破片資料で、底径5cmを測る。釉色は緑灰色を呈し、胎土は灰色である。高麗青磁であろうか。

小結 遺構に共伴した資料で、図示しえたものは溝1内出土の白磁11の1点のみである。他は、すべて包含層出土のものである。白磁は椀 $I \sim IV$ 類、 $\Pi I \sim IV$ 類に青磁は大きく $A \cdot B \cdot C \cdot D \cdot E$ の5類に分類できた。図示しえなかった細片も含めてこれらの比率をみると表64のようになる。白磁の占める量が54.96%と高く、門田遺跡門田地区の状況が12.3%と低いのと

	青		7	r <del>*-</del> 1 798	A =1		
竜	泉 窯	系	_	同安窯系	その他	白 磁	合 計
A II	В	С	D	E			
11   12   23	1	7	3	23	2	72	131点
8.40   9.16 17.56	0.76	5,34	2,29	17.56	1.53		
	25.95		·	İ		54.96	100%
		45.04			:		

表64 磁器出土点数と比率

は極めて異なっている。門田地区では同安窯系の青磁が34.2%を占めるのに対して、この遺跡では17.56%と低いことも異なる点である(註7)。このような差は、遺跡自身の存続時期やその間における隆盛する時期とも極めて関係するものである。

土師器杯のあり方(第158図)をみるかぎり、ピークは2 度あり 前川氏の編年に対比した場合  $\mathbb{I}-2$  と  $\mathbb{I}-4$  類の時期に、土器の量が多くなっている。本遺跡出土の磁器が、どの時期に共伴したものかはかならずしも限定しえないが、少なからず、  $\mathbb{I}-2$  と  $\mathbb{I}-4$  類の時期にその多くが共伴した可能性は指摘できよう。いわゆる鎌倉時代前期前半と中期前半である。

# 3 お わ り に

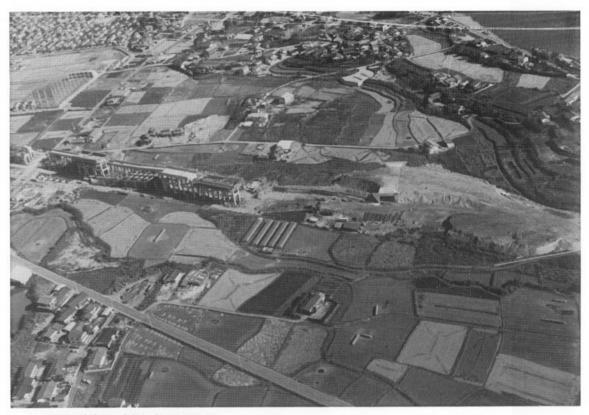
この時代の遺構は、7棟の建物跡と5条の溝が確認さされただけで、時期についても、溝1・2・5が鎌倉時代前期後半~中期後半のものと思われる他は、不明である。特に掘立柱建物跡の時期比定はむずかしい。しかし、溝5に北接して並行する8号建物跡は、ほぼ同じ時期に比定できよう。周囲から出土する遺物の中に、ほぼ同時期と考えられる糸切り底の土師器片が多く出土していることからもうなずける。他に、この建物跡と主軸方位を同じくする6号建物跡も同様の時期の可能性を持っている。また、溝5に切られた5号建物跡は明らかに溝5より古い建物跡で、主軸方位も6・8号建物跡と異なっている。

これらの遺構が、どのような性格を持っていたかは、調査範囲が極めて狭小のため明らかにはできなかった。また、遺構には伴出しないが、奈良時代の瓦・須恵器、平安・鎌倉時代にわたる土師器・土師質土器・瓦質土器・磁器等が多数発見されたことは大きな成果であった。とりわけ、2点出土した軒丸瓦は、かって白水廃寺の瓦と呼称された山田寺系の重弁八葉軒丸瓦と同笵のもので、他に格子目叩文や平行線叩文をもつ平瓦・丸瓦多数が共存して発見されたことは、大きな成果といえる。また、伴出した須恵器も、その大半が収α・b期のもので、現在、7世紀中頃~後半の年代が与えられている。これは瓦類とほぼ付合する年代である。

(井 下級引)

- 註1 小田富士雄「九州に於ける山田寺系棰先瓦の発見」『歴史考古』 6 1961
  - 2 柳田康雄・井上裕弘・木下修他「門田遺跡・門田地区の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』3 福岡県教育委員会 1977
  - 3 児玉幸多編「くずし字解読字典」近藤出版社 1972 九州歴史資料館の倉住靖彦氏の協力を得た。
  - 4 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『研究論集』 2 九州歴史資料館 1976
  - 5 註4に同じ
  - 6 前川威洋他「太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(2)」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』3 1976
  - 7 註2に同じ

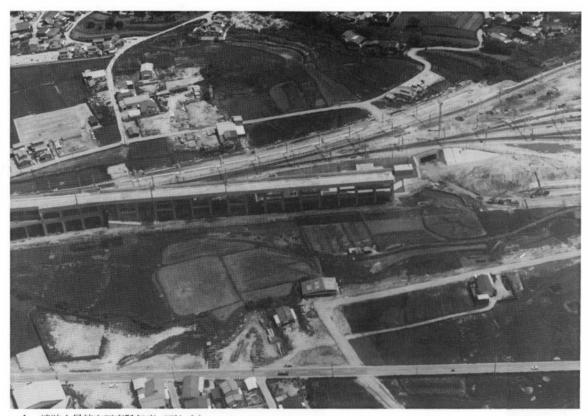
# 図 版



1 遺跡遠景航空写真48年度(南西から)



2 遺跡遠景航空写真48年度(北西から)



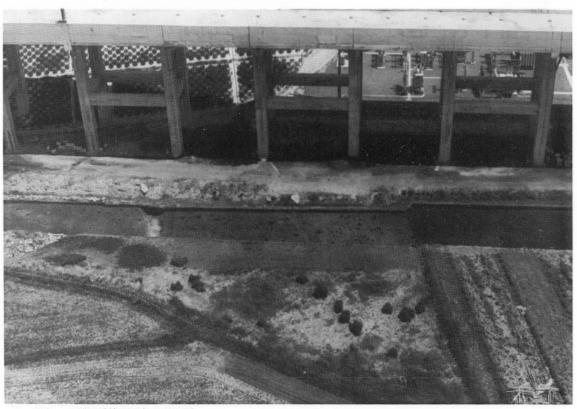
遺跡全景航空写真51年度(西から)



2 遺跡全景航空写真51年度 (南から)



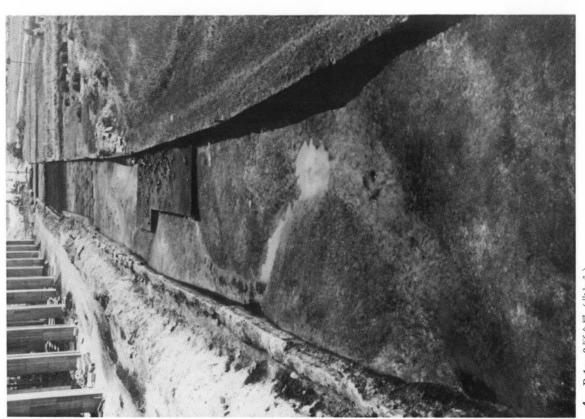
1 A・B-5~7区全景地上写真(北から)



2 B4・5区全景航空写真(西から)



B1~3区全景 (南から)



B1~3区全景(北から)







B4~5区全景(南から)





B7~8区全景 (北から)



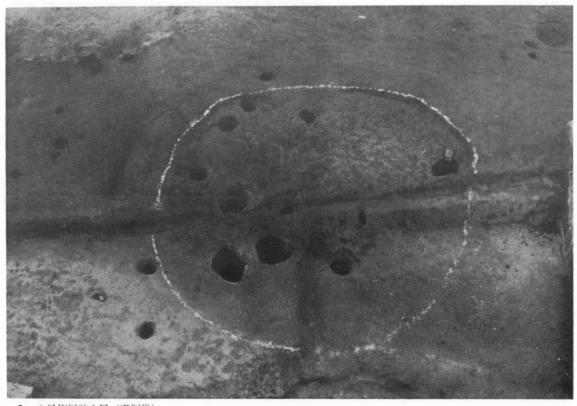
1 A・B8~9区全景 (南から)



2 A・B8~9区全景 (東南から)



1 1号住居跡全景 (発掘中)



2 1号住居跡全景(発掘後)



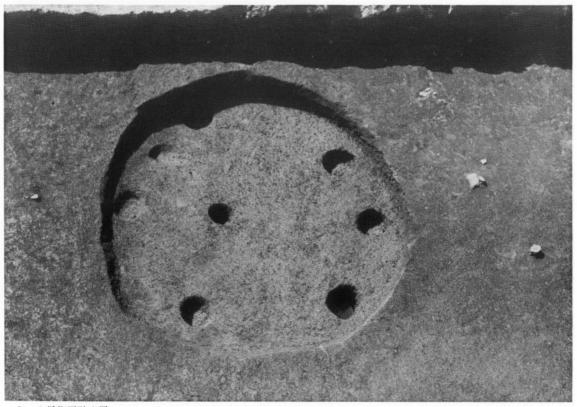
1 1号住居跡遺物出土状況



1号住居跡遺物出土状況



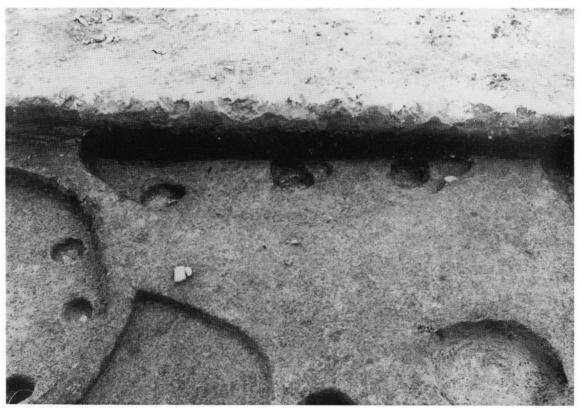
1 住居跡群全景



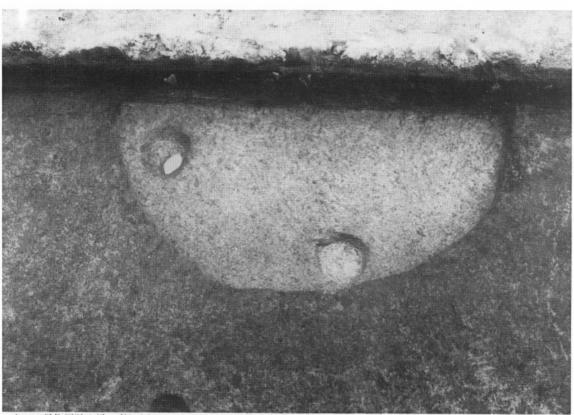
2 号住居跡全景



1 3・5号住居跡全景



2 6号住居跡



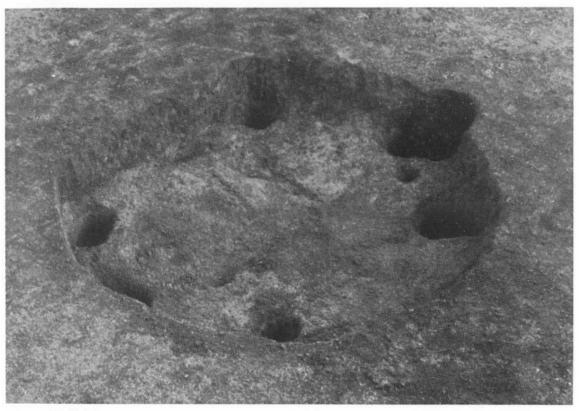
1 4号住居跡全景 (東から)



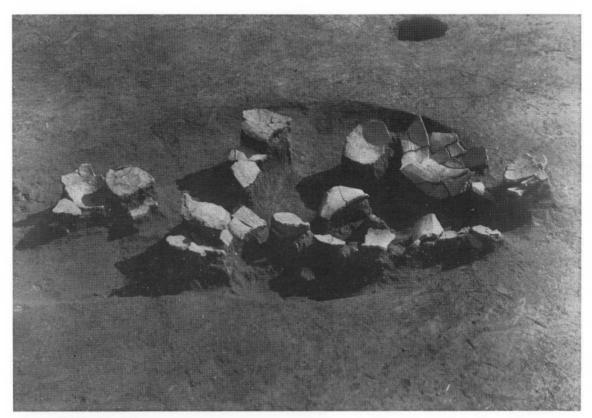
2 4号住居跡遺物出土状況 (東から)



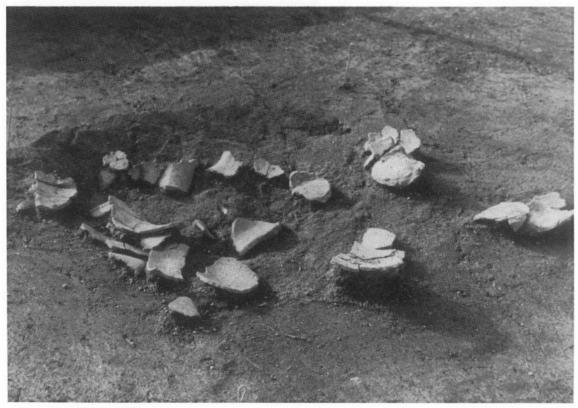
1 1号土壙全景



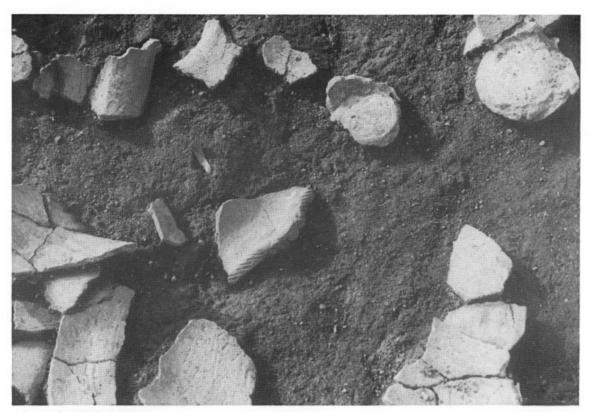
2 2号土壙全景



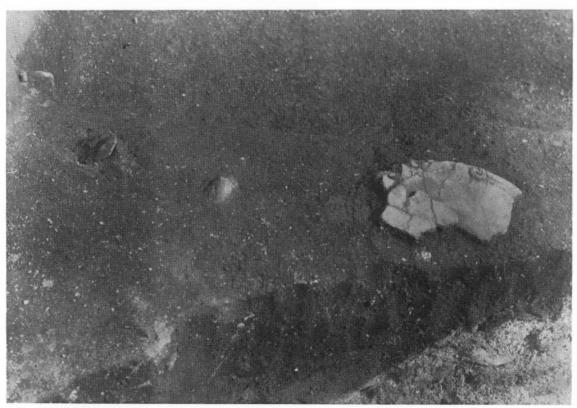
1 1号土壙遺物出土状況



2 1号土壙遺物出土状況



1 1号土壙遺物出土状況



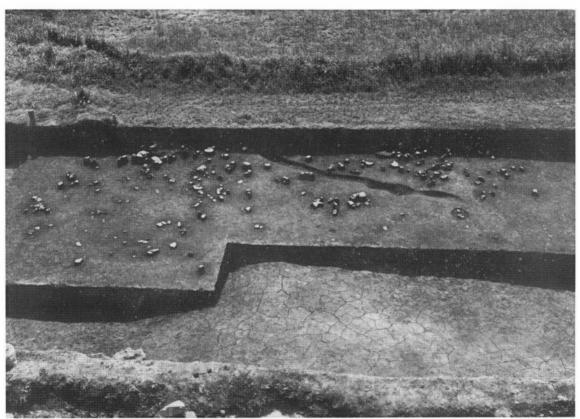
1号土壙遺物出土状况



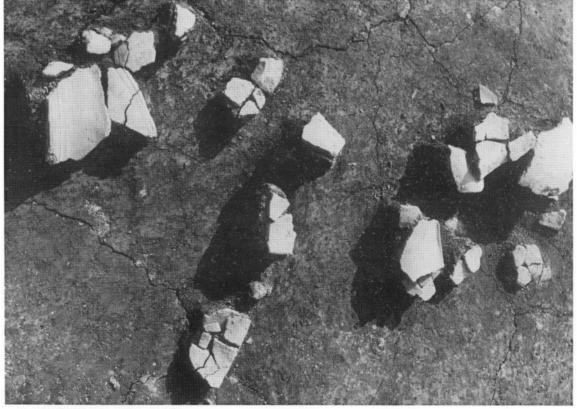
1 溝状遺構全景 (南から)



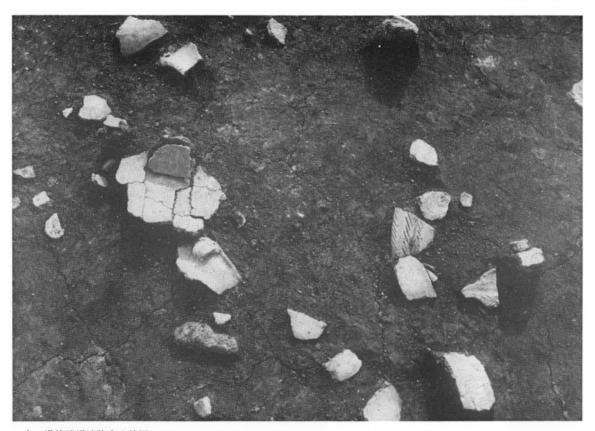
2 溝状遺構全景(北から)



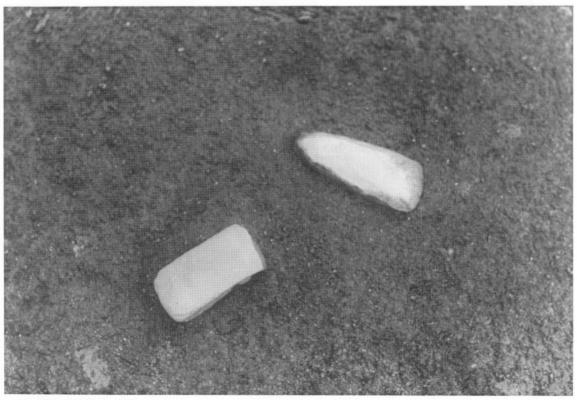
1 溝状遺構遺物出土状況 (遠景)



2 溝状遺構遺物出土状況 (近景)



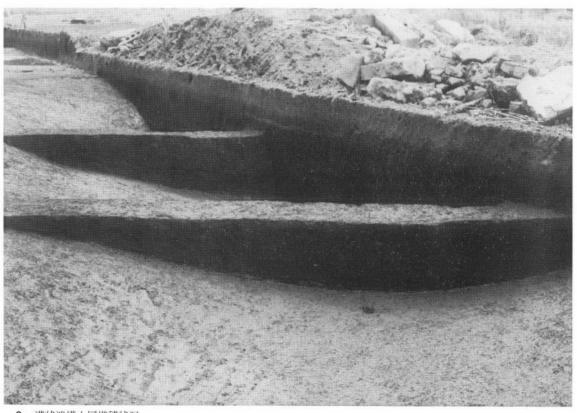
1 溝状遺構遺物出土状況



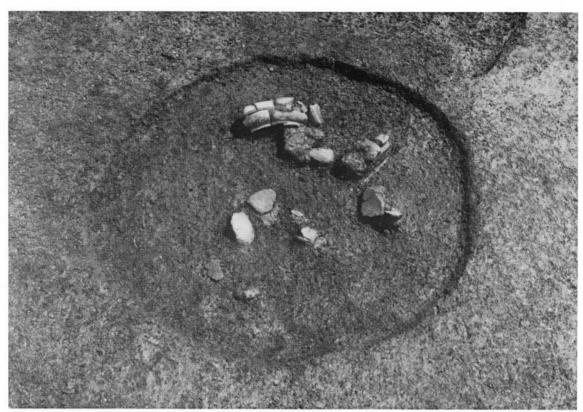
2 溝状遺構遺物出土状況



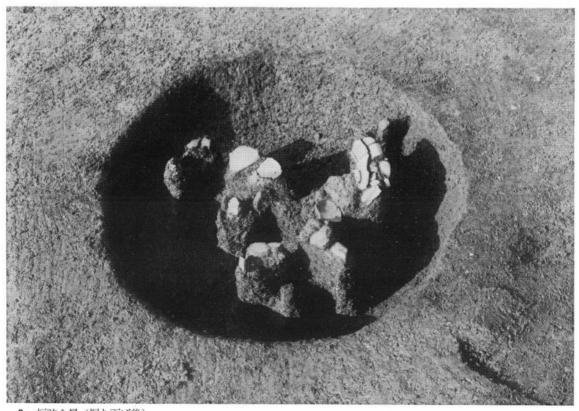
1 溝状遺構遺物堆積状況



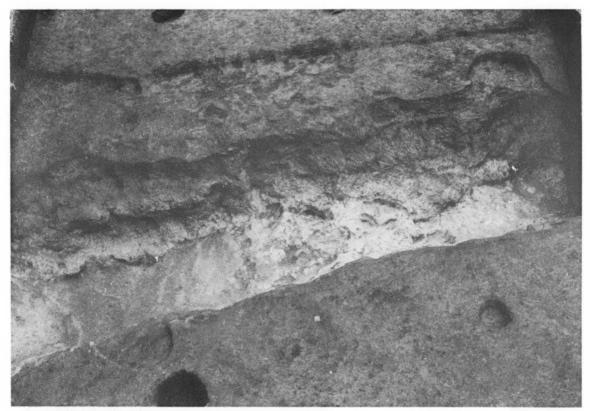
2 溝状遺構土層堆積状況



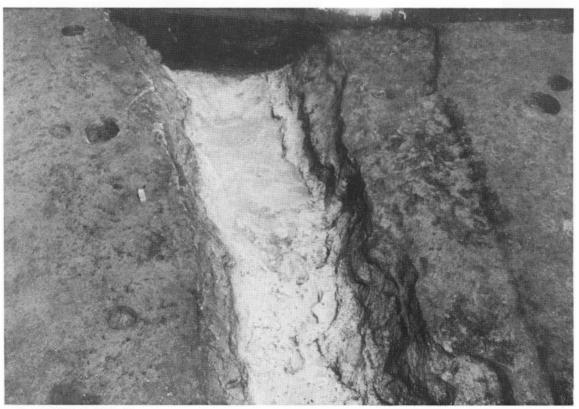
1 炉跡全景 (上面)



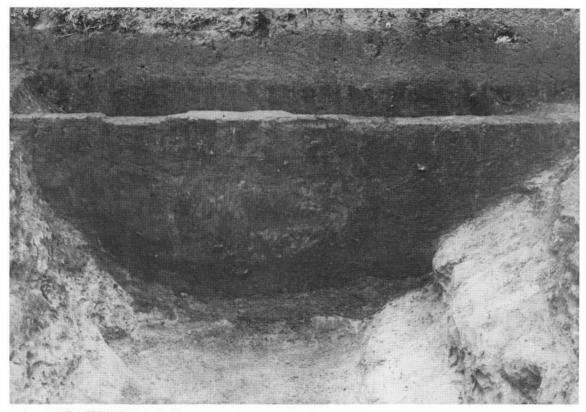
2 炉跡全景 (掘り下げ後)



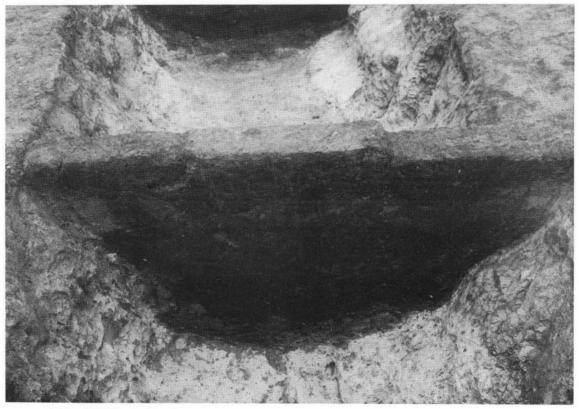
1 V字溝全景(北から)



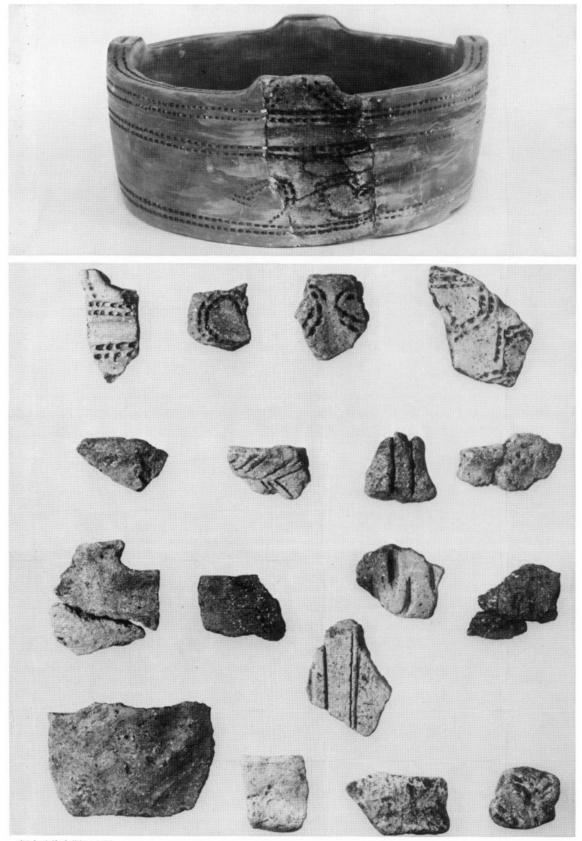
2 V字溝全景 (西から)



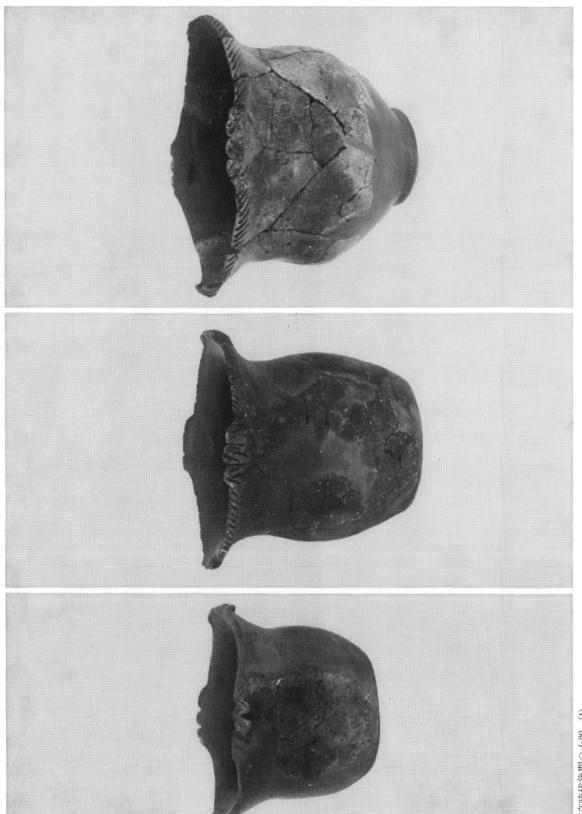
1 V字溝土層堆積状況 (西から)



2 V字溝土層堆積状況 (東から)



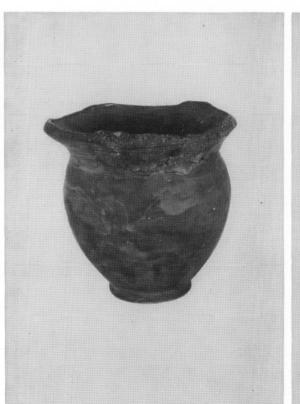
縄文時代中期の土器



縄文時代後期の土器 (1)



縄文時代後期の土器 (2)

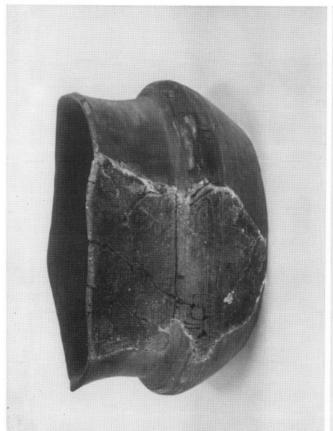


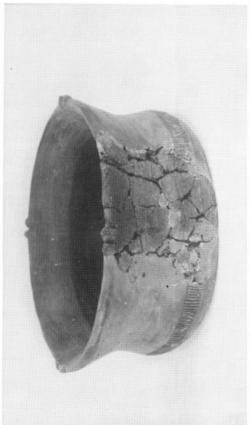




縄文時代後期の土器 (3)

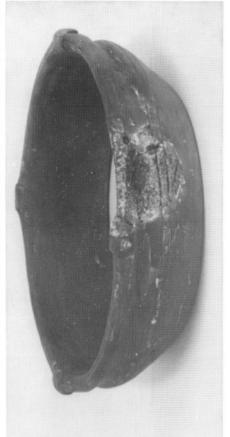




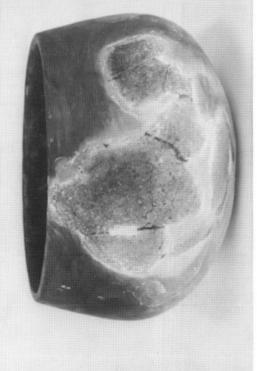


縄文時代後期の土器 (4)

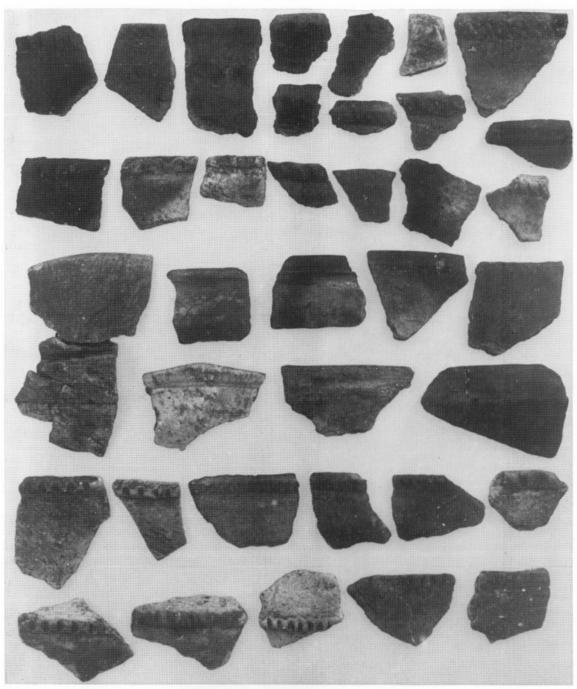




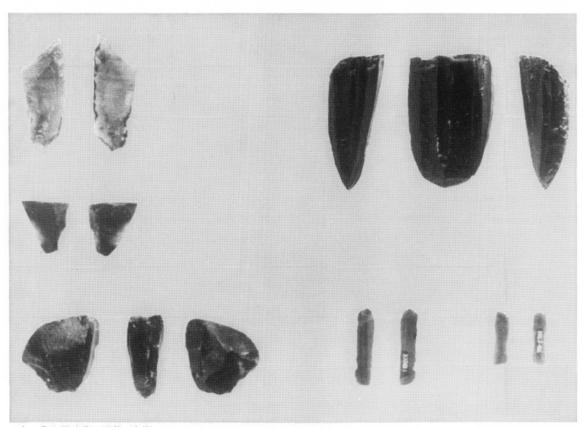




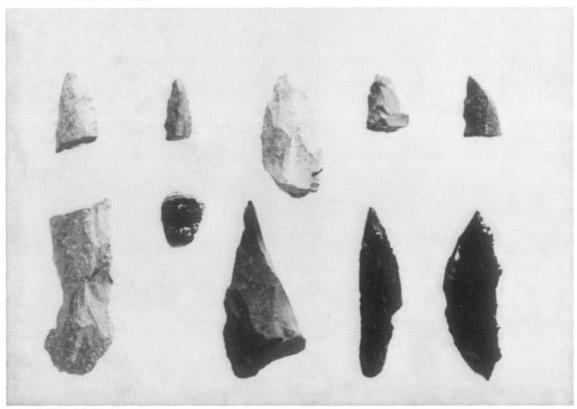
縄文時代後期の土器 (5)



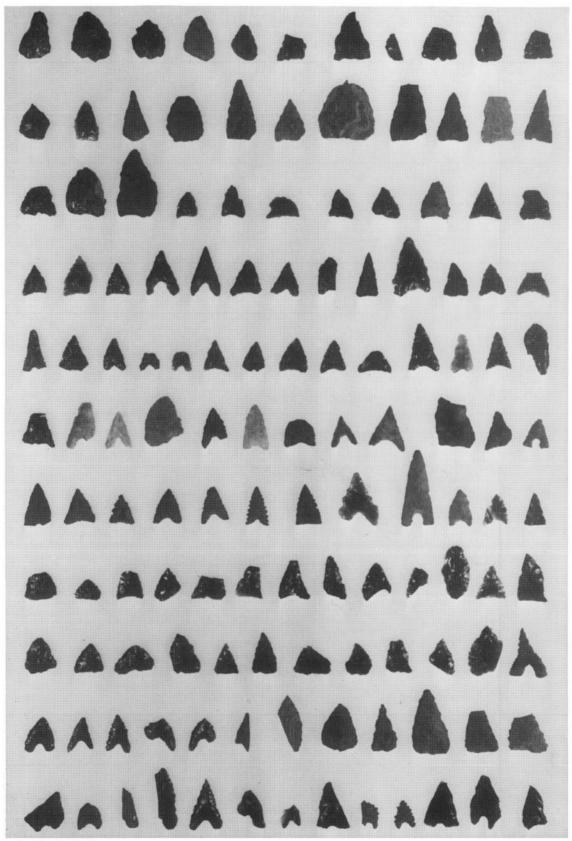


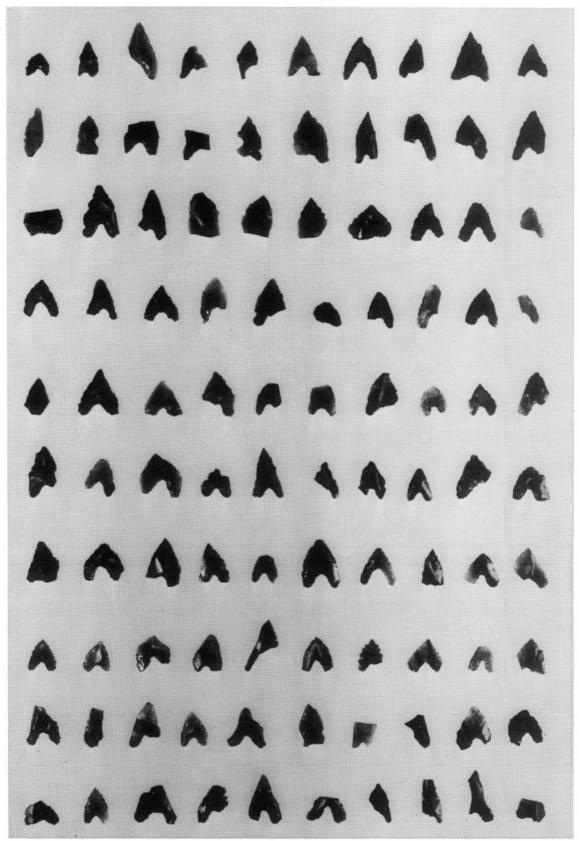


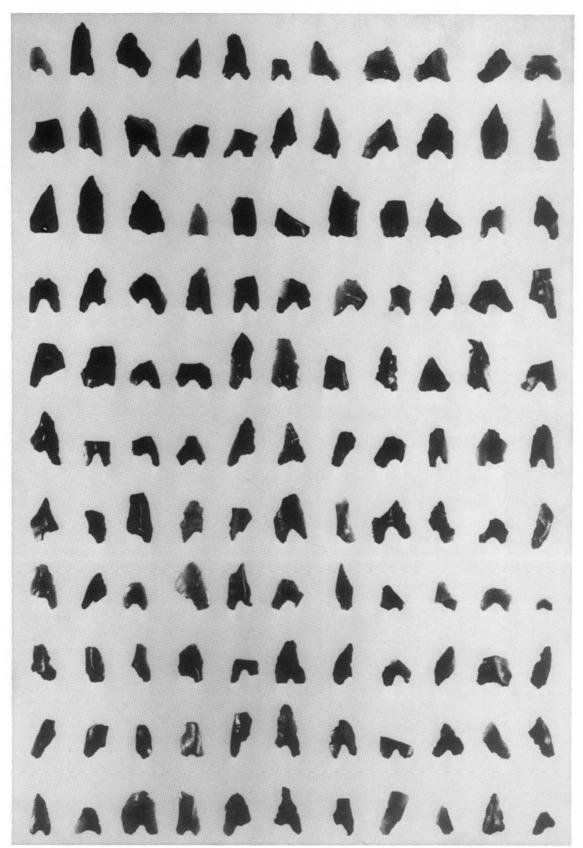
1 先土器時代の遺物 (1/1)

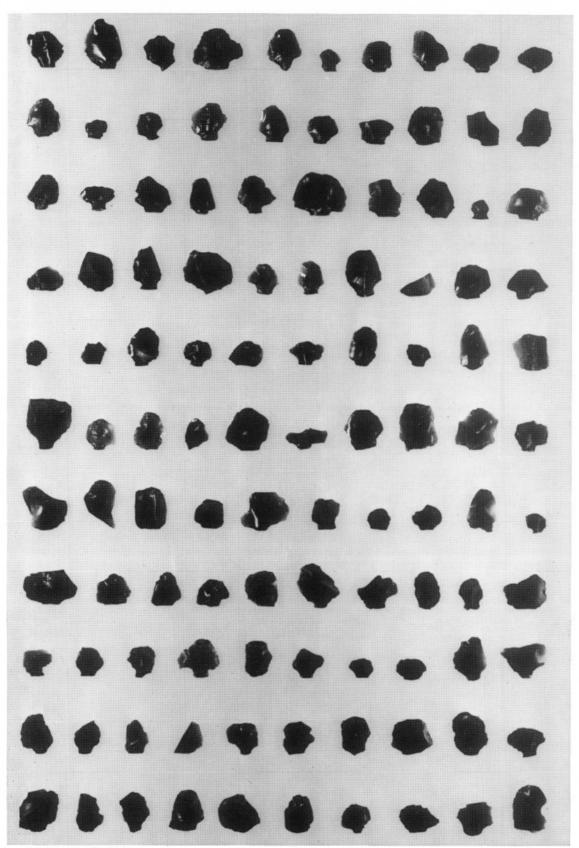


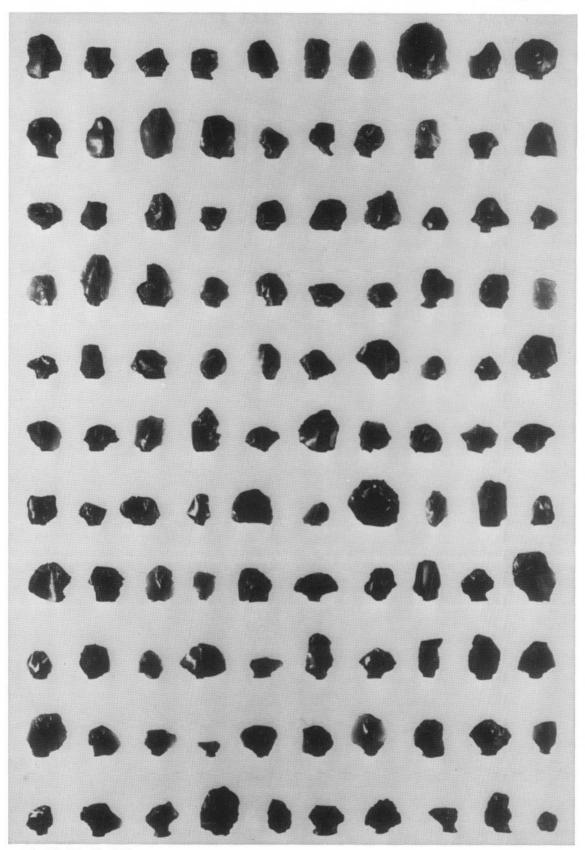
2 尖頭状石器 (2/3)

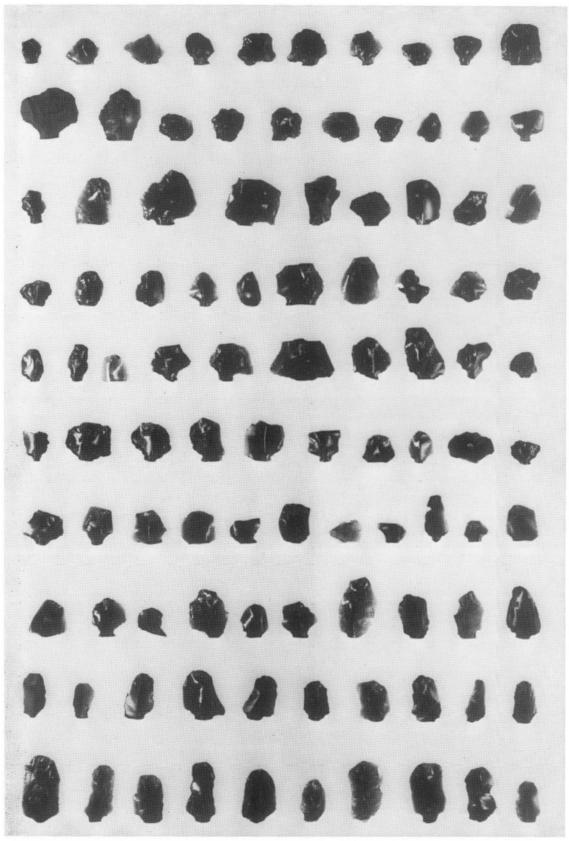


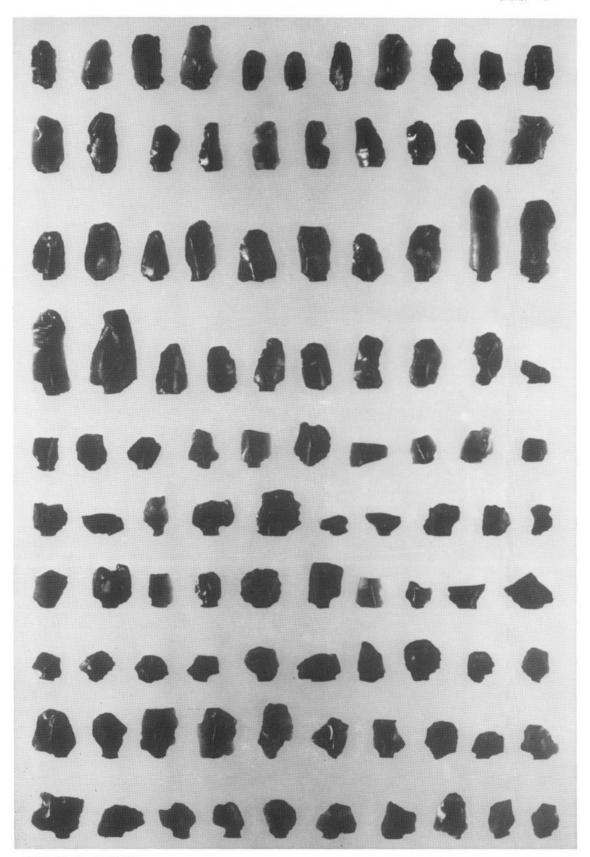


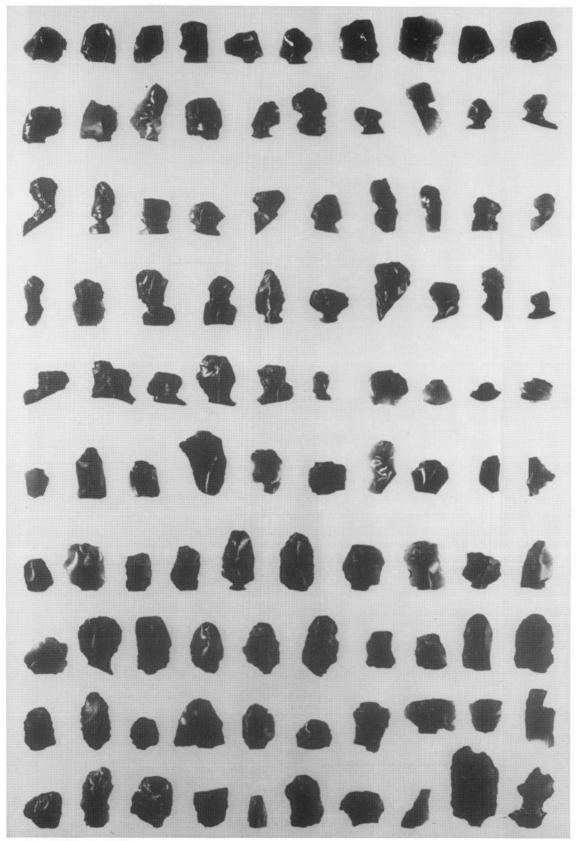




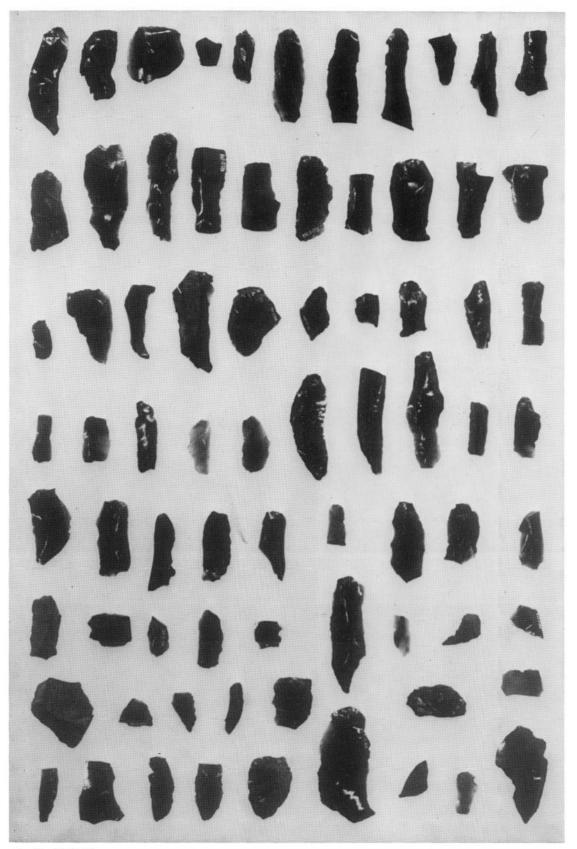


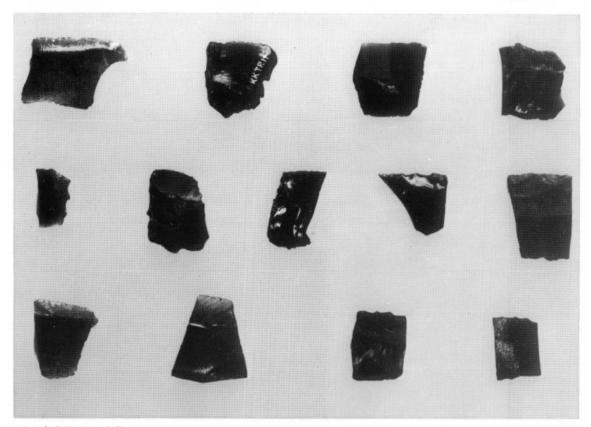




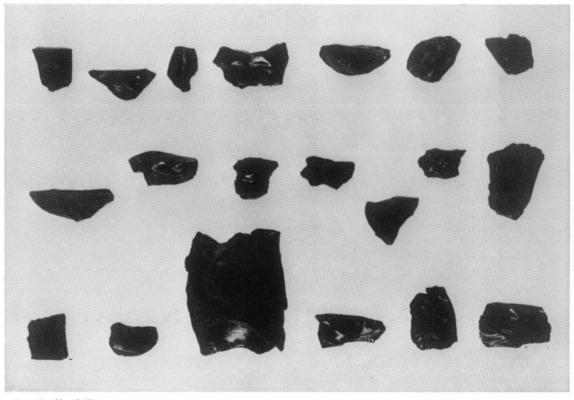








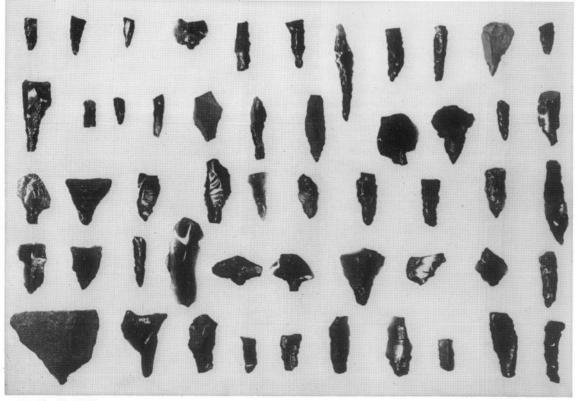
1 台形状石器 (1/1)



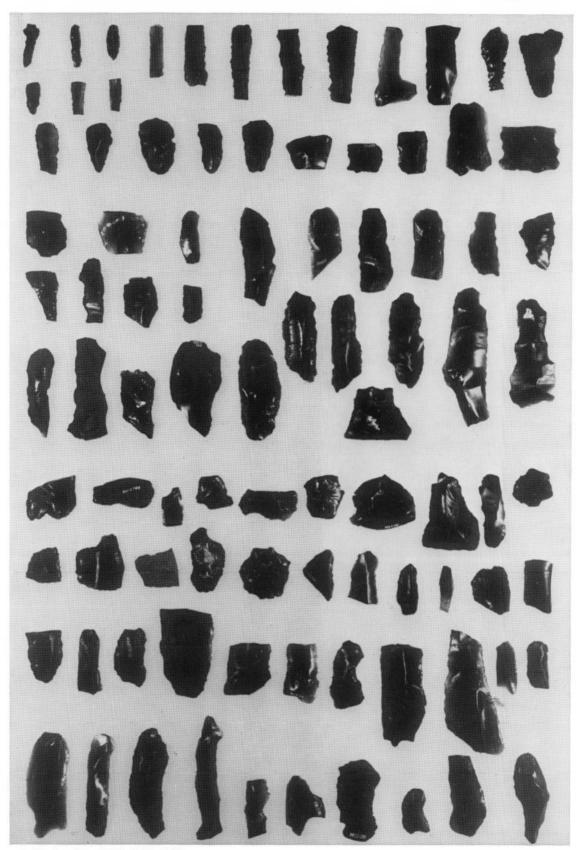
2 石核(1/2)



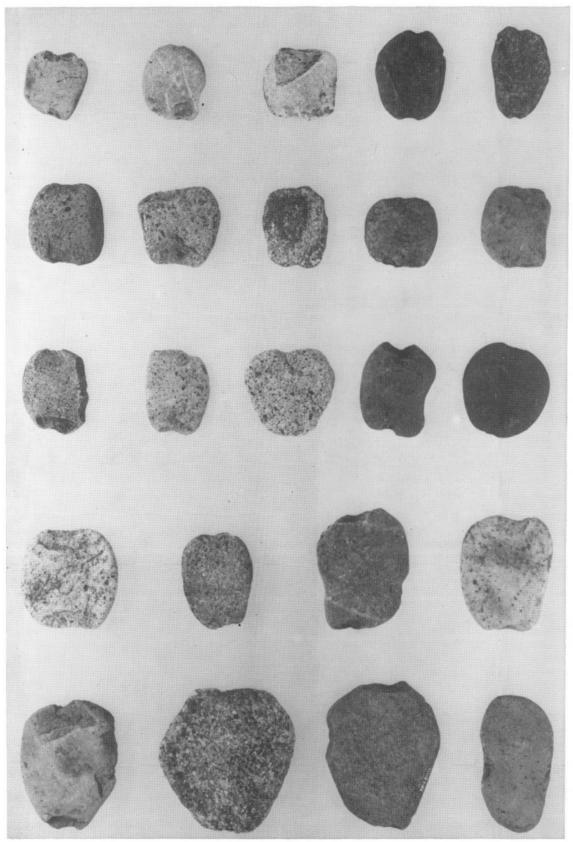
1 影器(1/2)



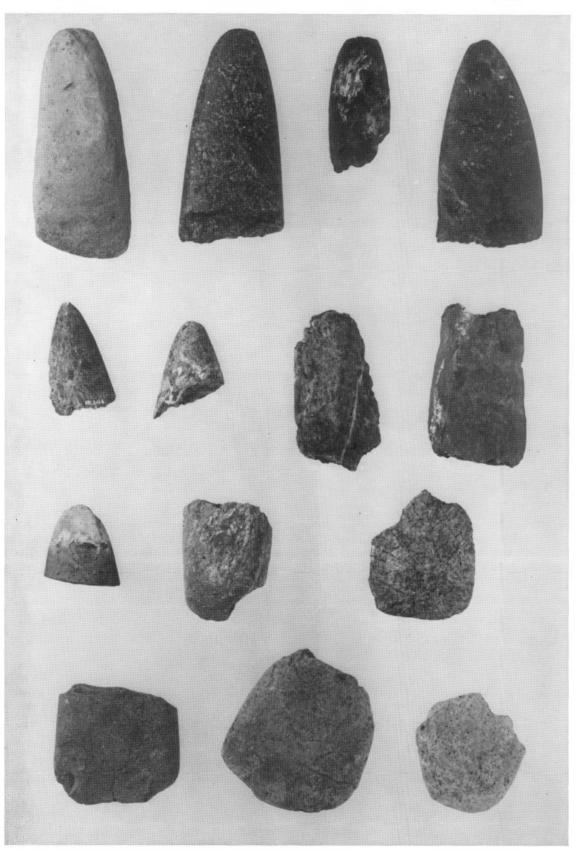
2 石錐(1/2)



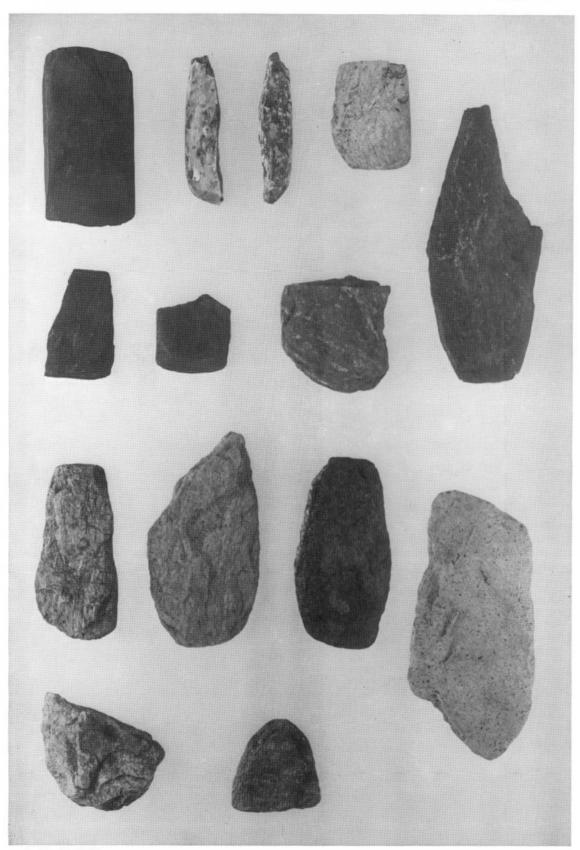
サイドブレイド・削器・搔器 (1/2)



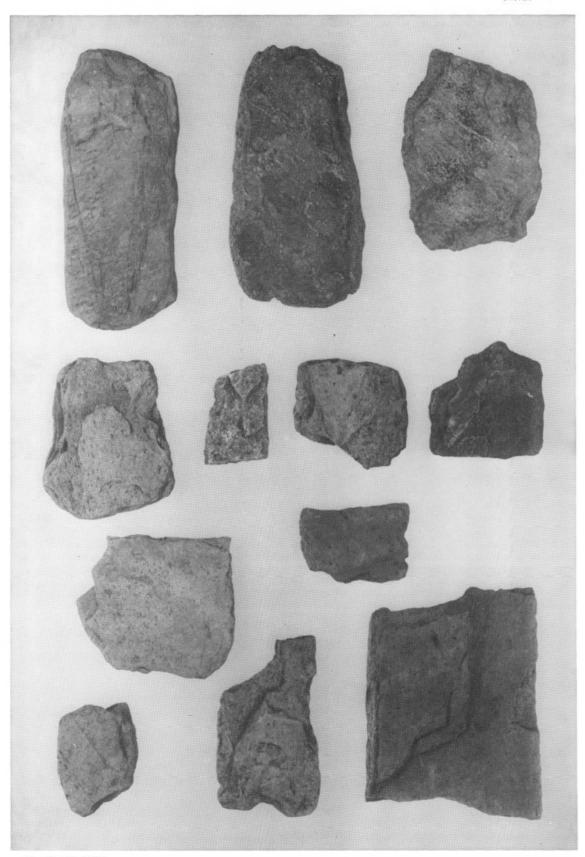
石 錘 (1/2)



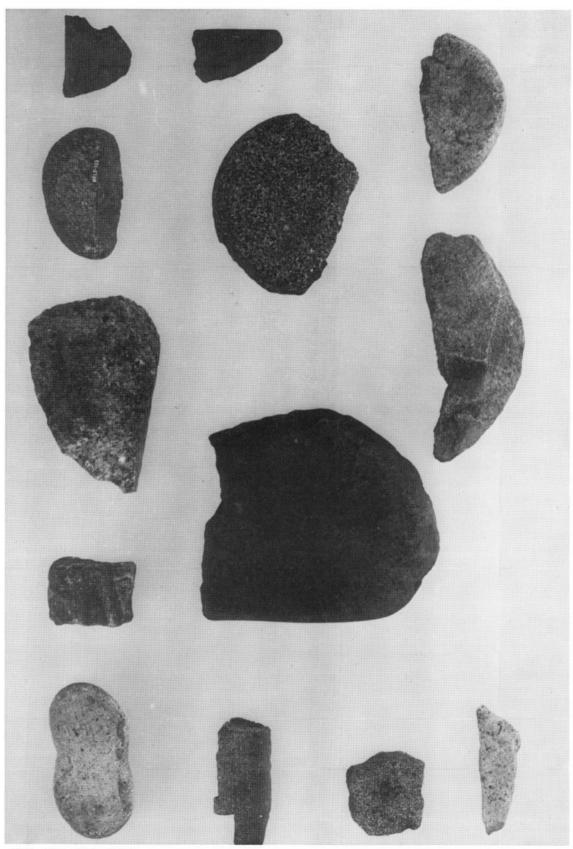
石 斧 (1) (1/2)



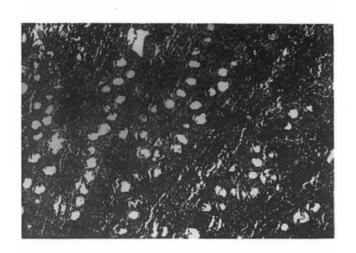
石 斧 (2) (1/2)



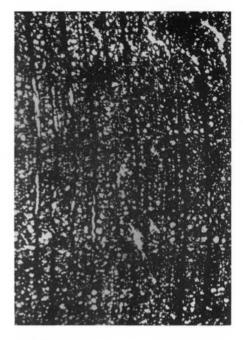
石斧 (3) (1/2)



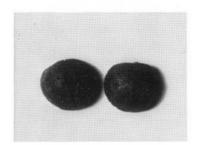
磨石・石皿・砥石・石庖丁



常緑ガシとしたもの。



広葉樹としたもの。

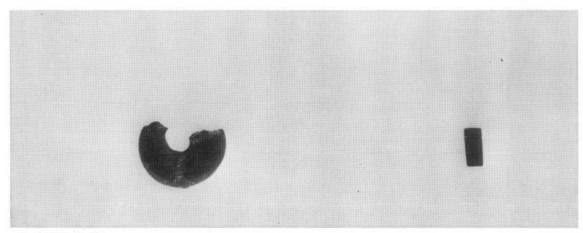


3号住居跡出土コナラ亜属堅果。

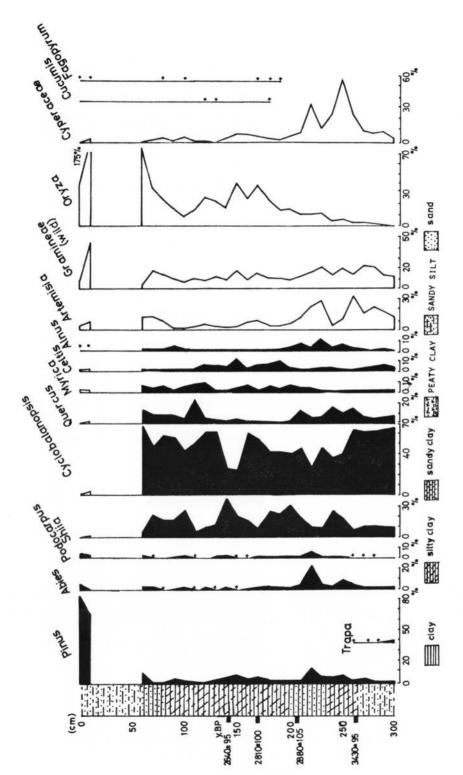




不明種子。

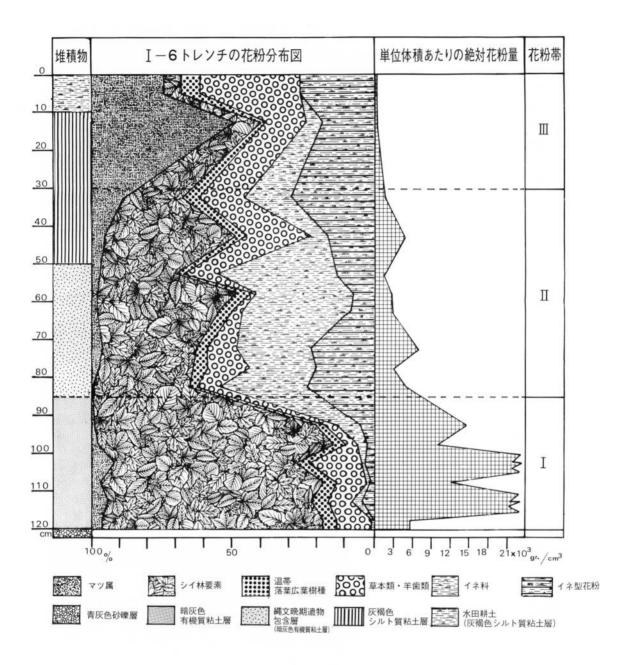


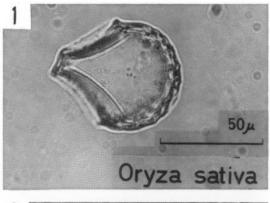
2 装身具 (1/1)



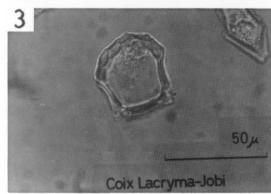
板付遺跡 J —23地区の花粉ダイアゲラム

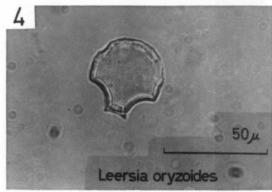
中村純・畑中健一「板付遺跡の花粉分析的研究」『板付』下巻所収、 福岡市埋蔵文化財調查報告書 第35集 1976.

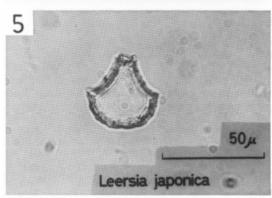


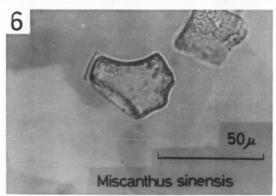






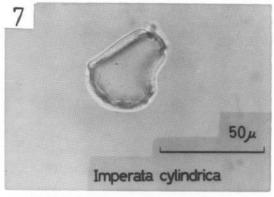


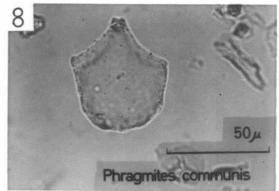


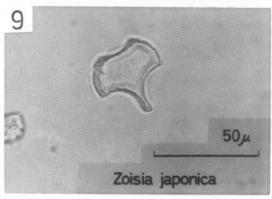


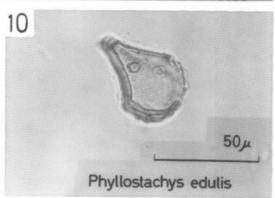
1. イネ (Oryza sativa L.)

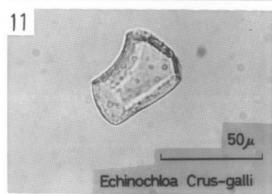
- 2. 栽培ビエ (Echinochloa Crus-galli var frumentacea)
- 3. ジュズダマ (Coix Lacryma-Jobi L.) (ハトムギ)
- 4. サヤヌカグサ (Leersia oryzoides)
- 5. アシカキ (Leersia japonica)
- 6. ススキ (Miscanthus sinensis)

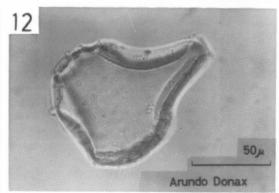




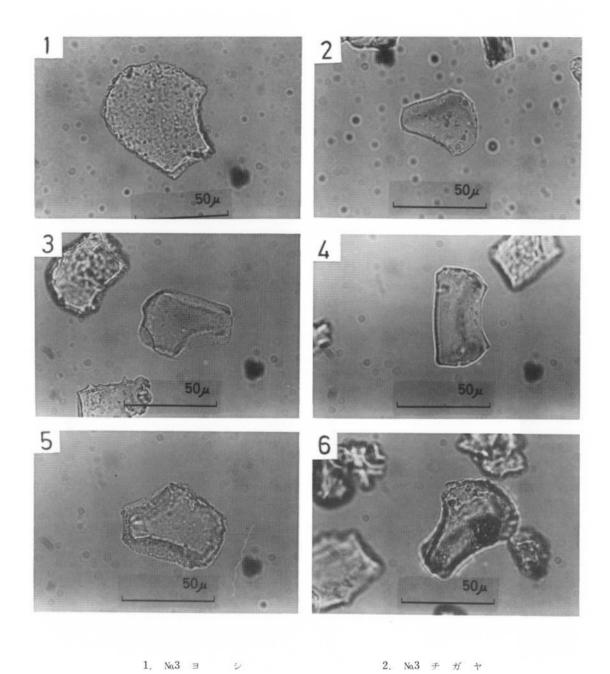






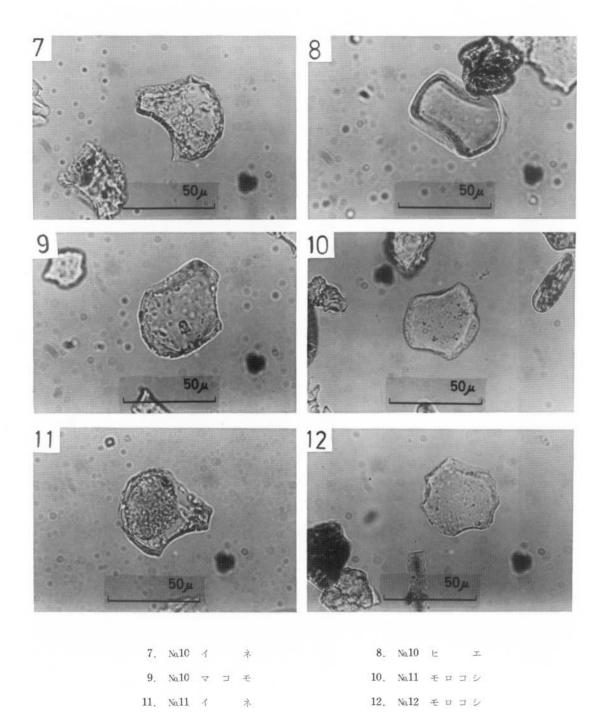


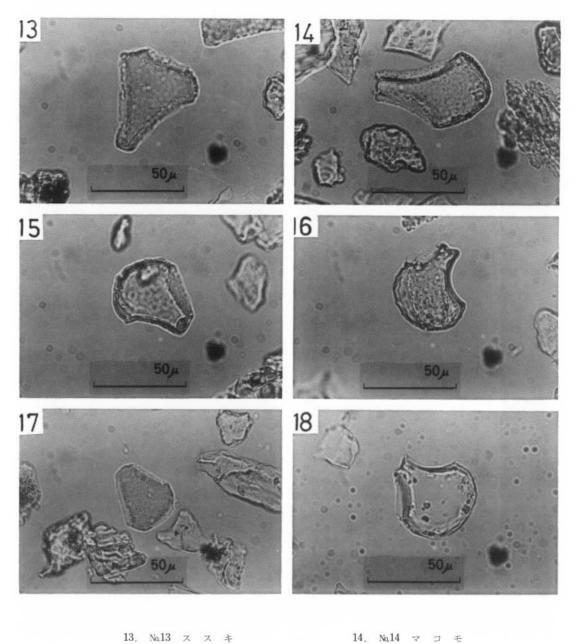
- 7. チガヤ (Imperata crlindrica(L) koenigii)
- 9. シ バ (Zoisia japonica)
- 11. ヒ エ (Echinochloa Crus-galli) 12. ダンチク (Arundo Donax)
- 8. 3 > (Phragmites communis)
- 10. タ ケ (Phyllostachys edulis)



6. Na6 ⊅

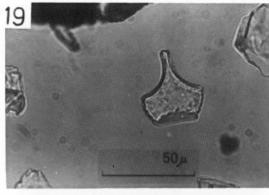
プラント・オパール顕微鏡写真 (3)

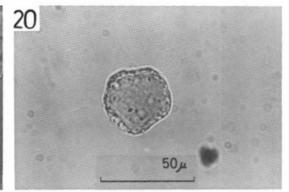


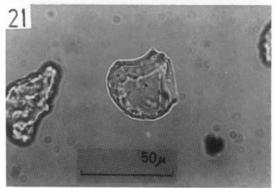


- 15. No.14
- 17. No.16 チ

- 14. No.14
- 16. No.16
- 18. No.17 1



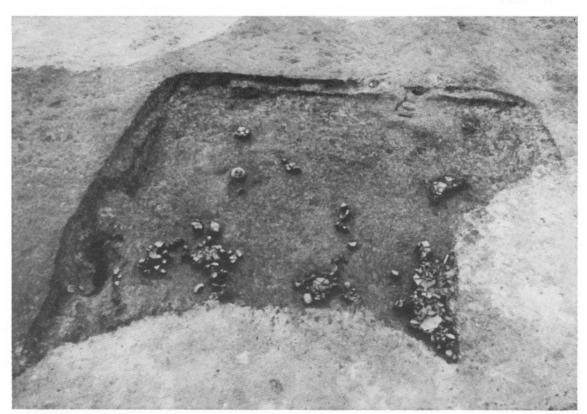




19. No.18 ≥ ×

21. No.18 イ ネ

20. No.18 メガルカヤ



1 7号住居跡全景(北から)



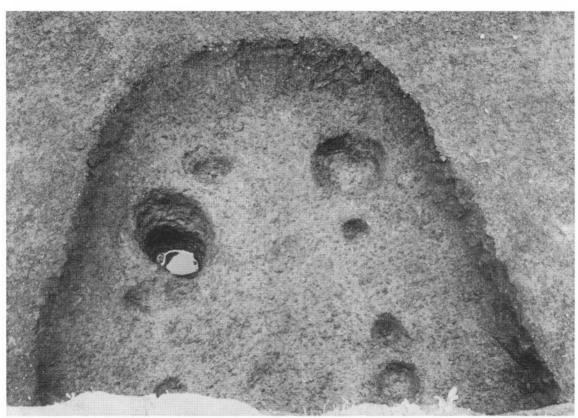
2 8号住居跡全景(東から)



1 円形竪穴状遺構(北から)



2 円形竪穴状遺構内土器出土状態(盗難前)



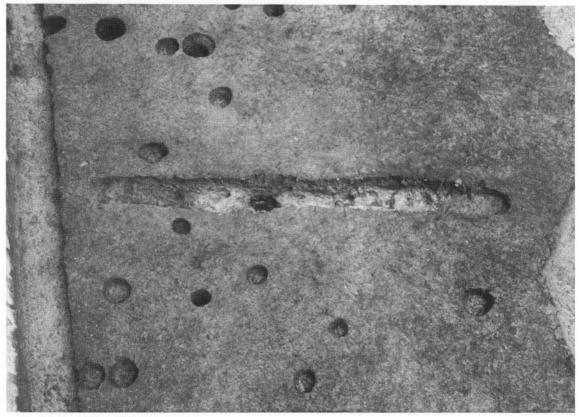
1 1号方形竪穴遺構(西から)



2 2号方形竪穴遺構(東から)



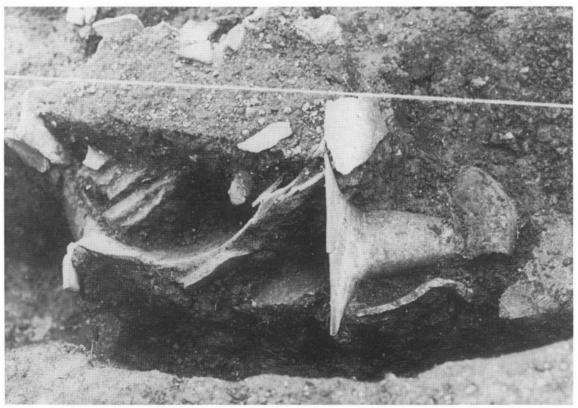
1 1号長方形土壙 (南から)



2 完掘後の1号長方形土壙(北から)



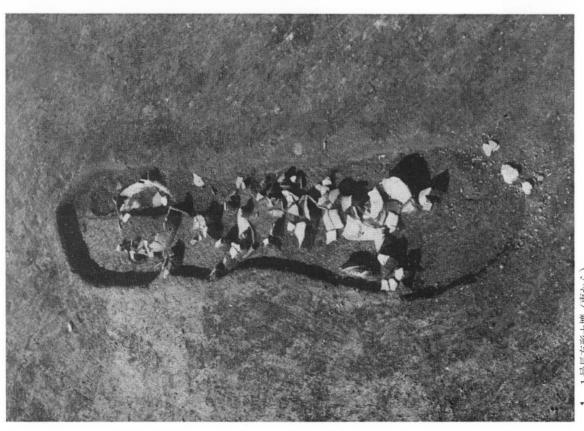
1 1号長方形土壙内土器出土状態



2 1号長方形土壙内土器出土状態



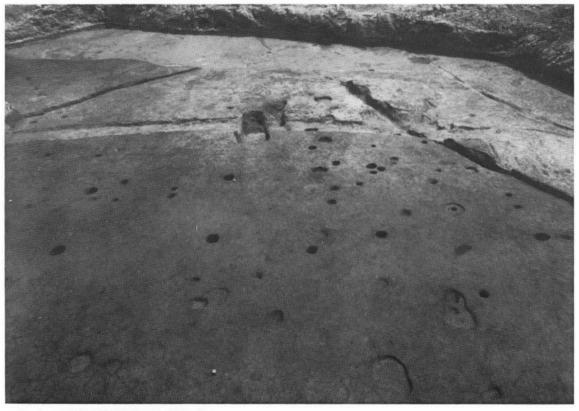
2 号長方形土壙 (東から)



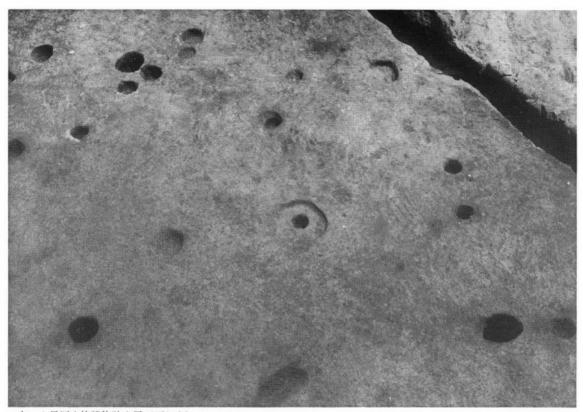
1号長方形土壙 (東から)



1 A9・B9区全景 (西から)



2 1・2号掘立柱建物跡全景(西から)



1 1号掘立柱建物跡全景(西から)



2 2号掘立柱建物跡全景 (西から)

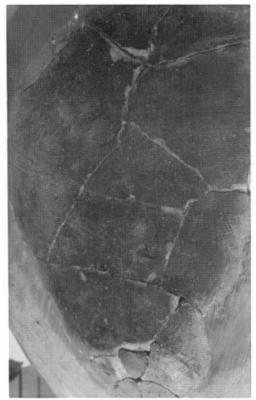


1 旧河川状遺構(南から)



2 旧河川状遺構と堆積土層 (西から)

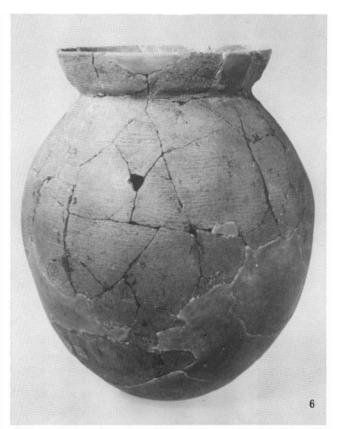


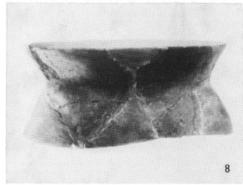


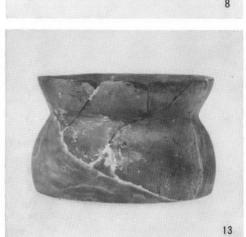


7号住居跡出土土師器 (1)



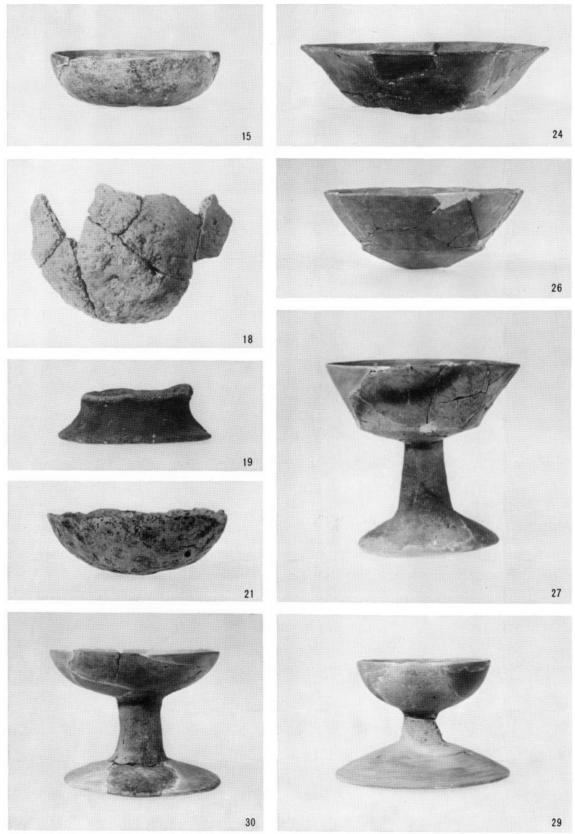




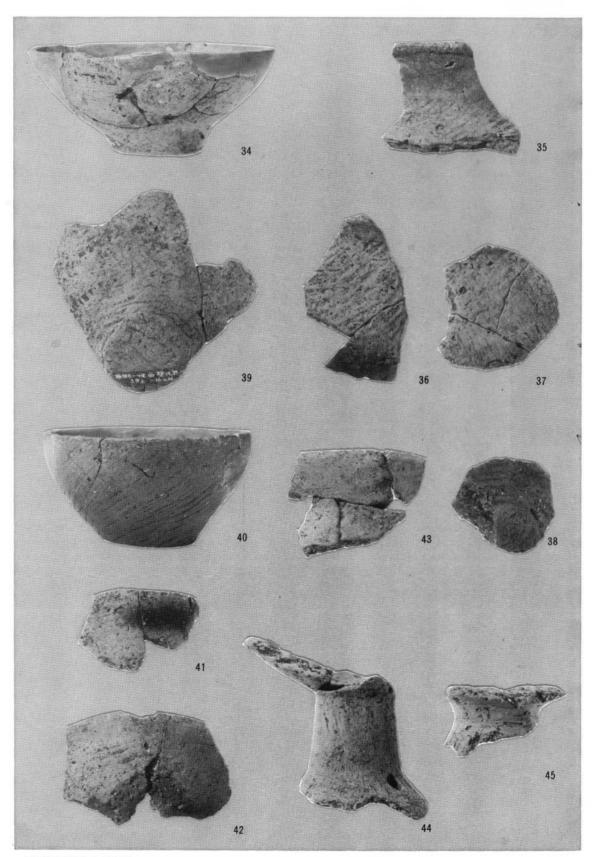




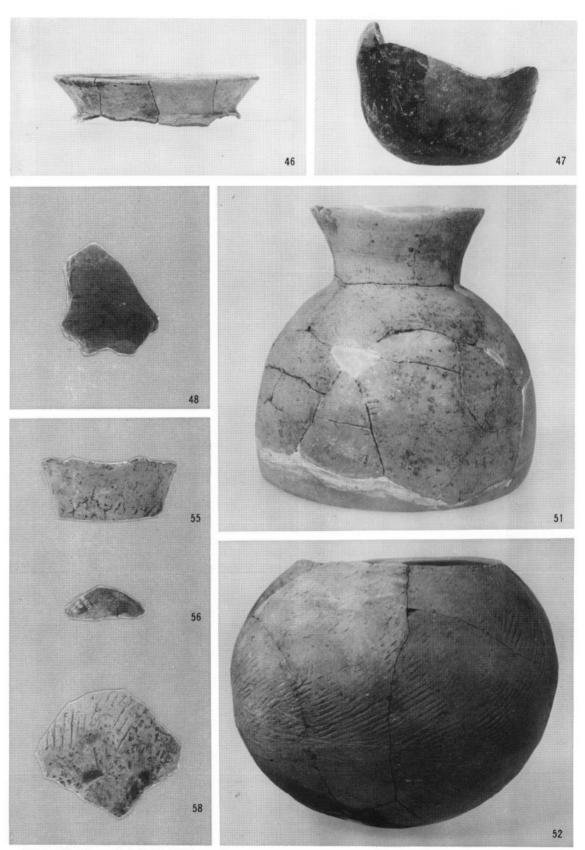




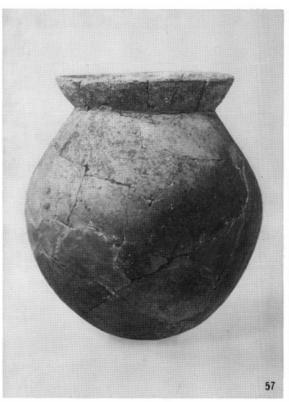
7号住居跡出土土師器 (3)



8号住居跡出土土師器



円形竪穴状遺構·2号方形竪穴遺構出土土師器

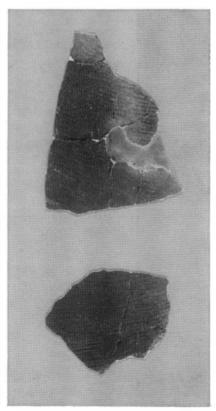




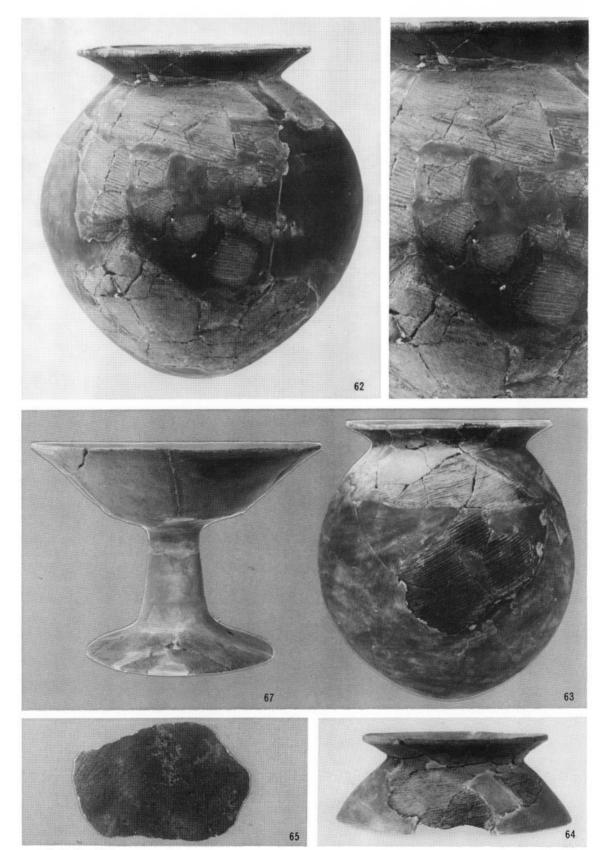


1 2号方形竪穴遺構出土土師器

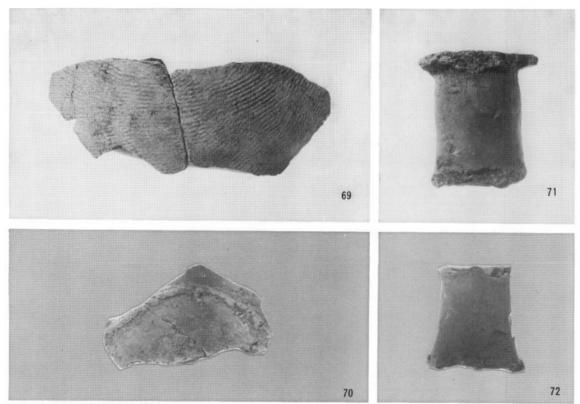




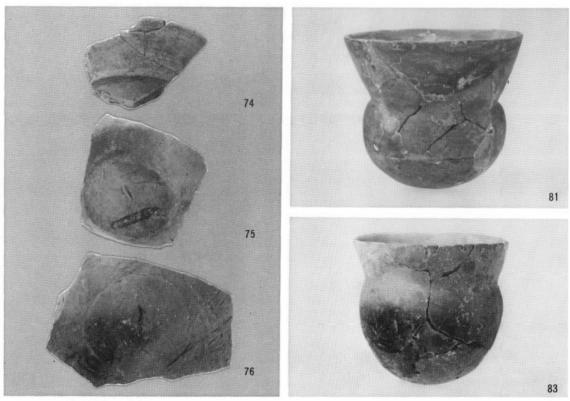
2 1号長方形土壙出土土師器 (1)



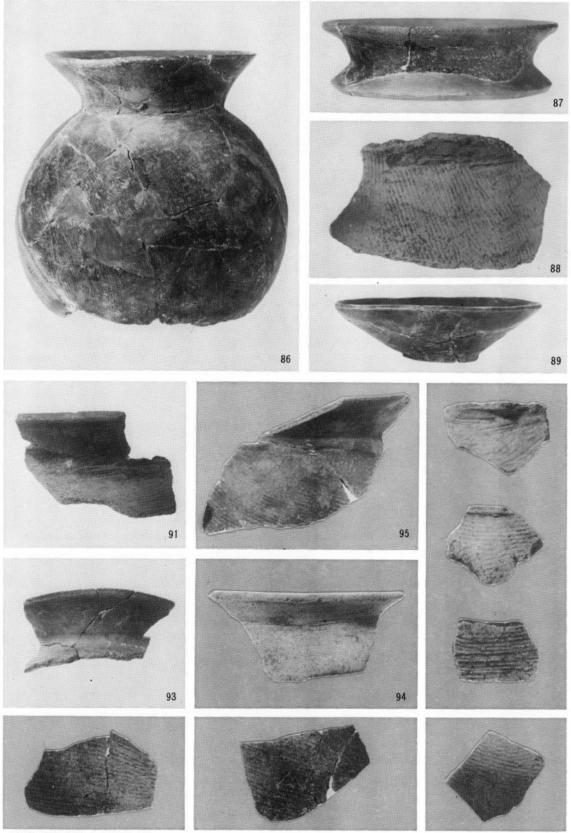
1号長方形土壙出土土師器 (2)



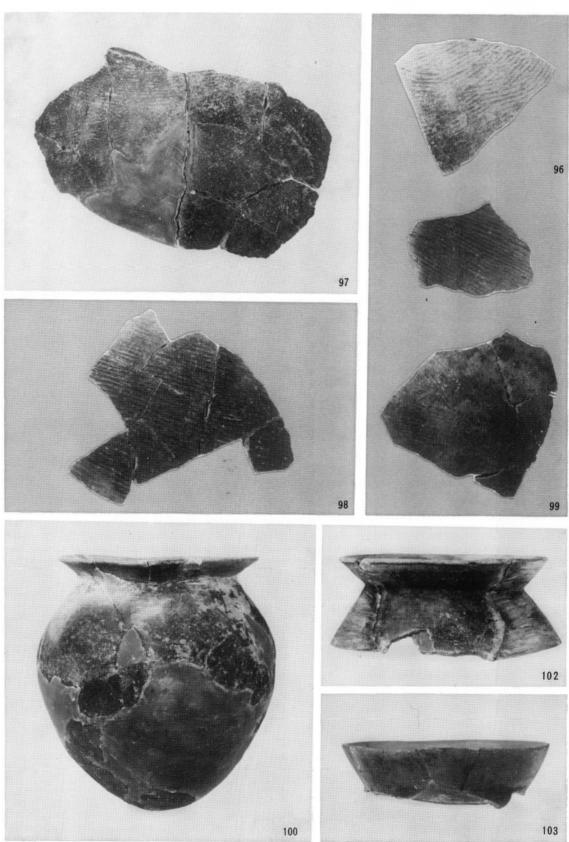
1 2 号長方形土壙出土土師器



2 旧河川状遺構出土土師器 (1)

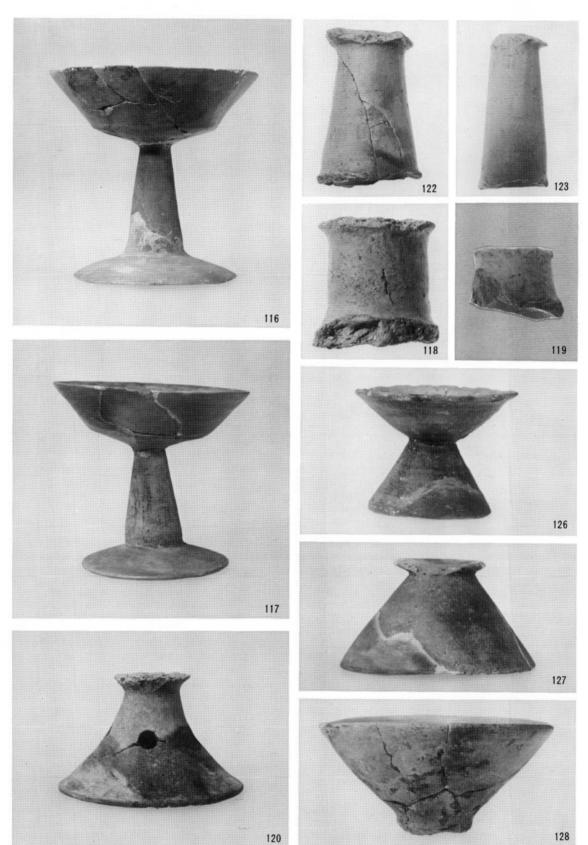


旧河川状遺構出土土師器 (2)

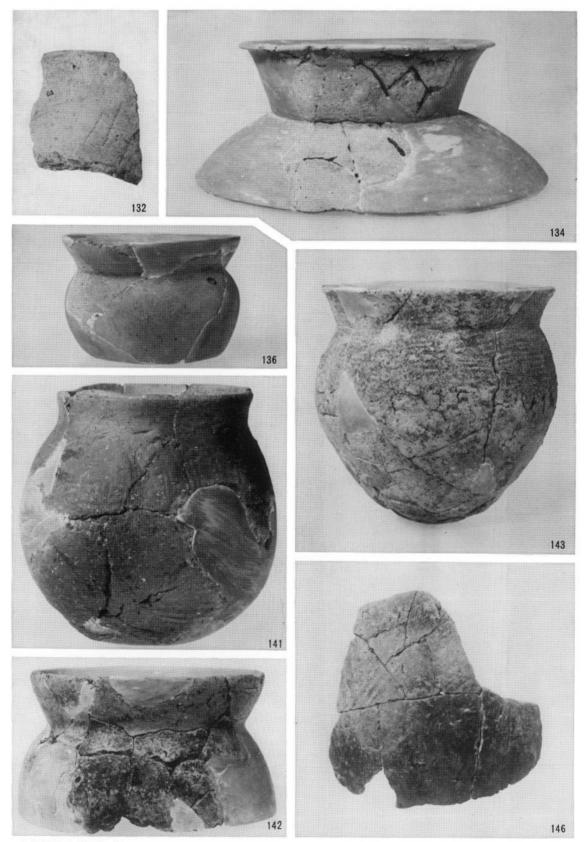


旧河川状遺構出土土師器 (3)

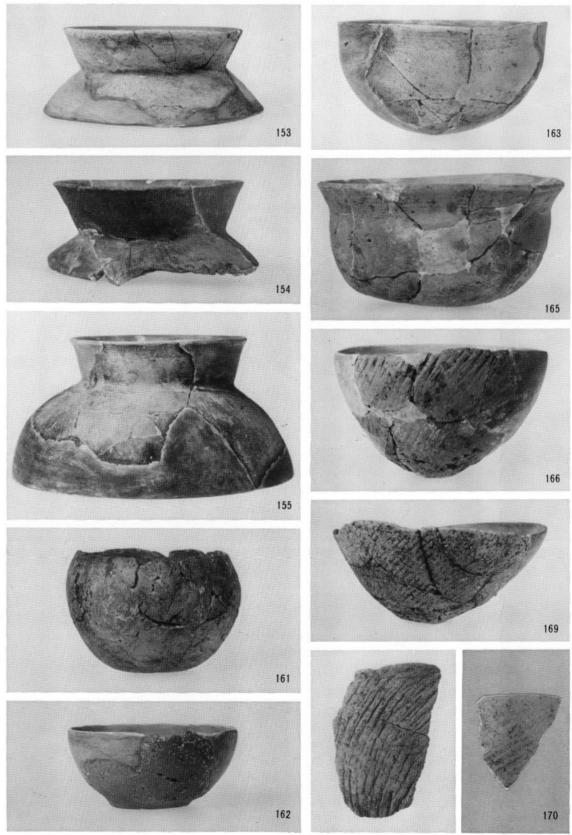
旧河川状遺構出土土師器 (4)



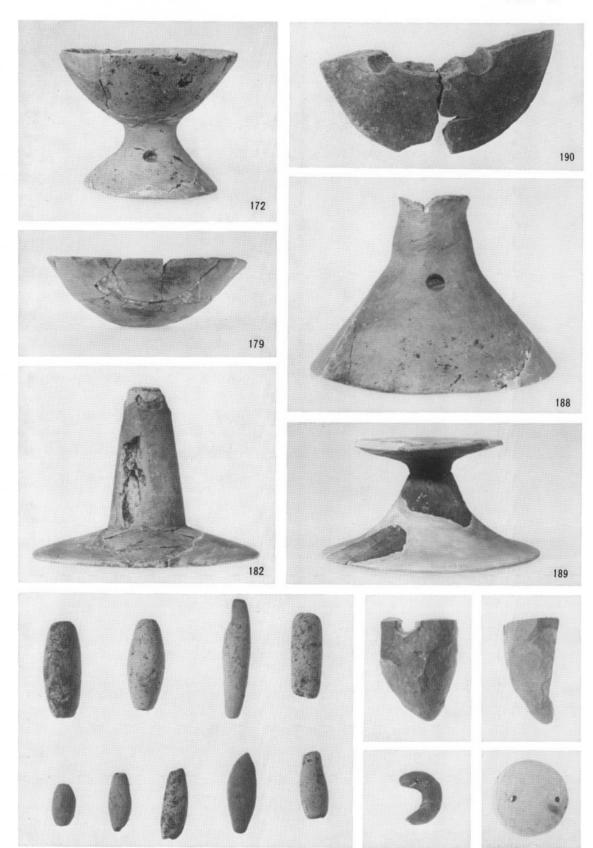
旧河川状遺構出土土師器 (5)



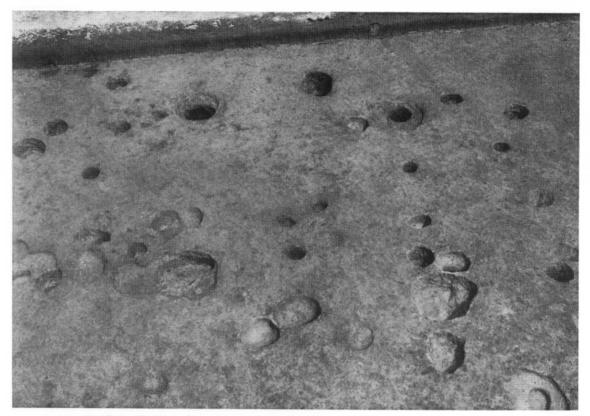
包含層出土土師器 (1)



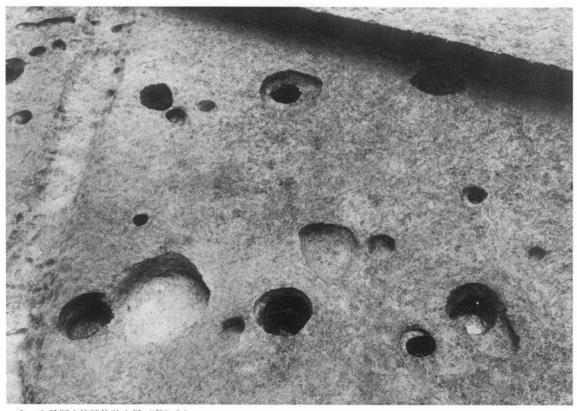
包含層出土土師器 (2)



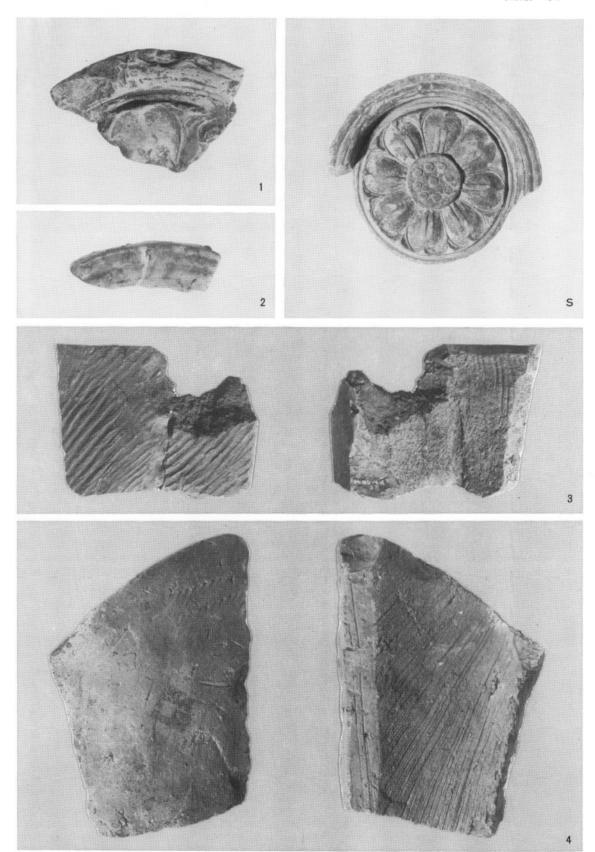
包含層出土土師器 (3)・土製品・石製品



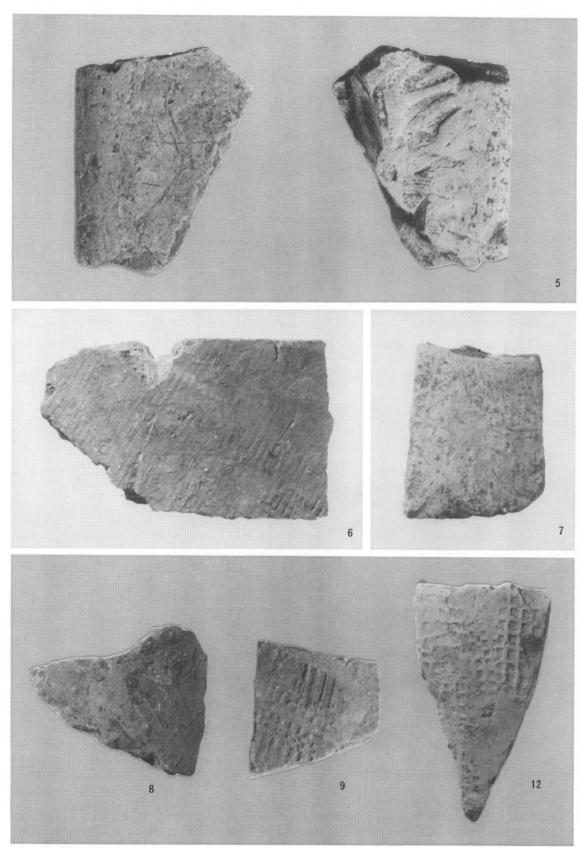
1 7号掘立柱建物跡全景(西から)



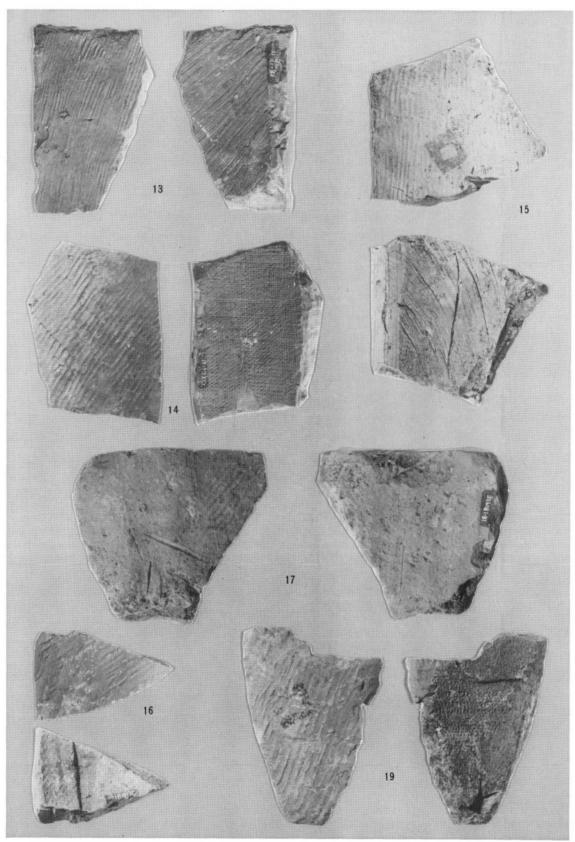
2 8号掘立柱建物跡全景 (東から)



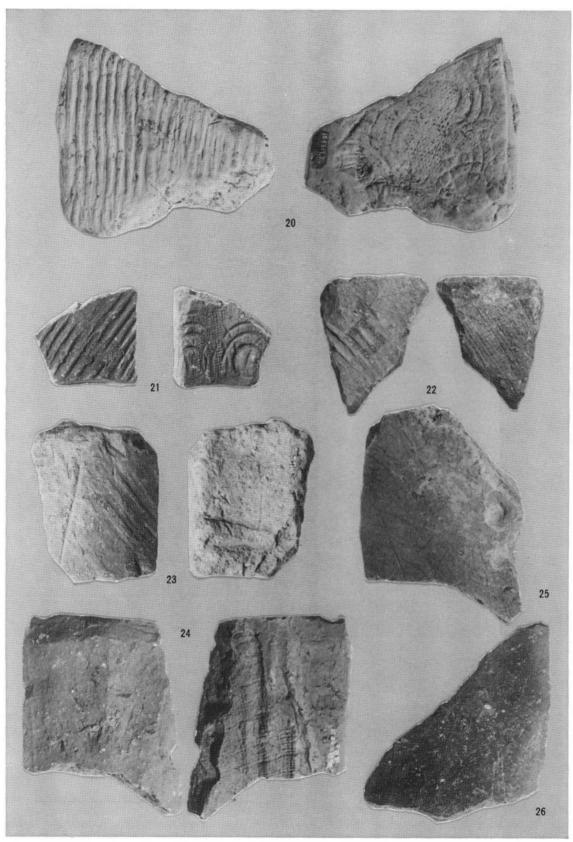
軒丸瓦・丸瓦・平瓦 (S:鈴木基親氏採集の白水廃寺と呼称された軒丸瓦)



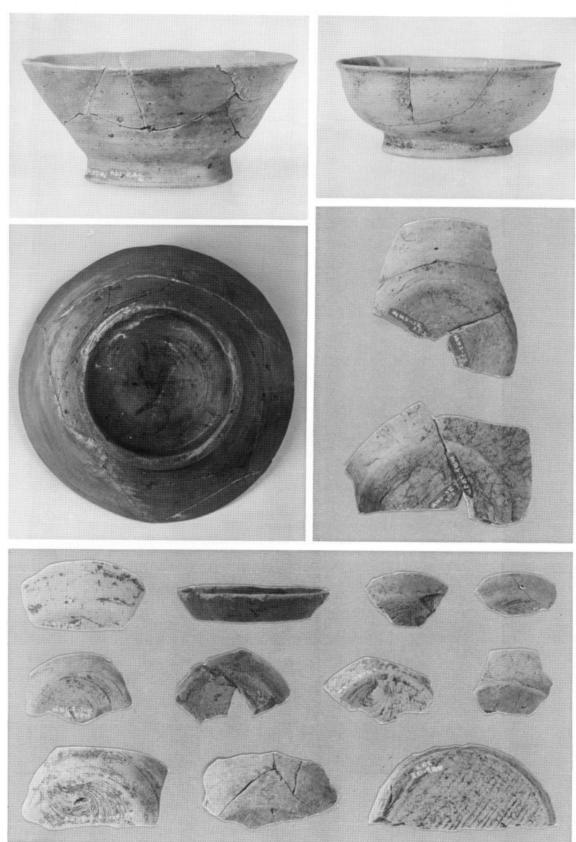
丸 瓦•平 瓦



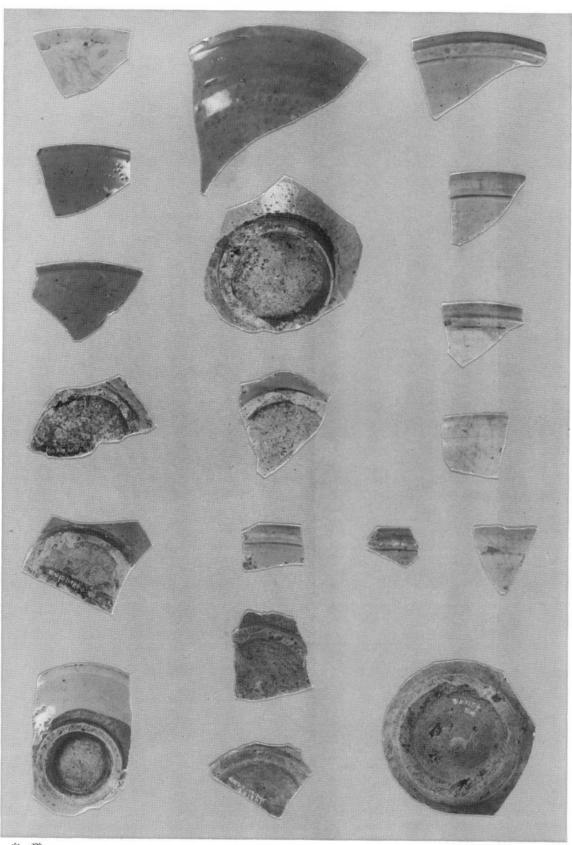
丸 瓦•平 瓦



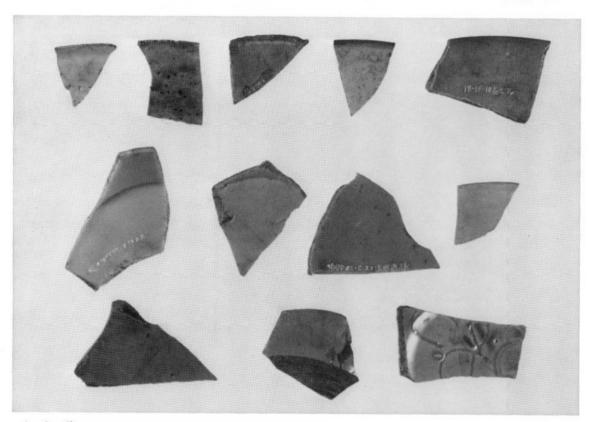
丸 瓦•平 瓦



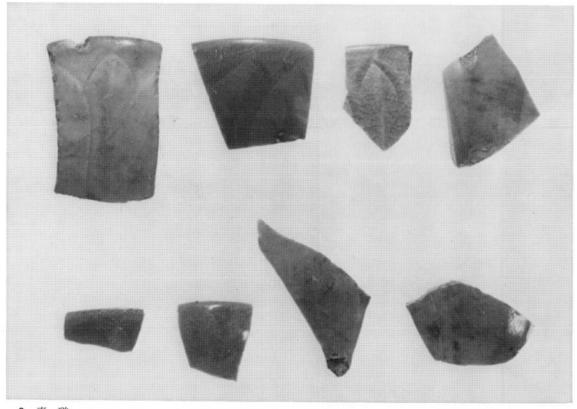
土 師 器



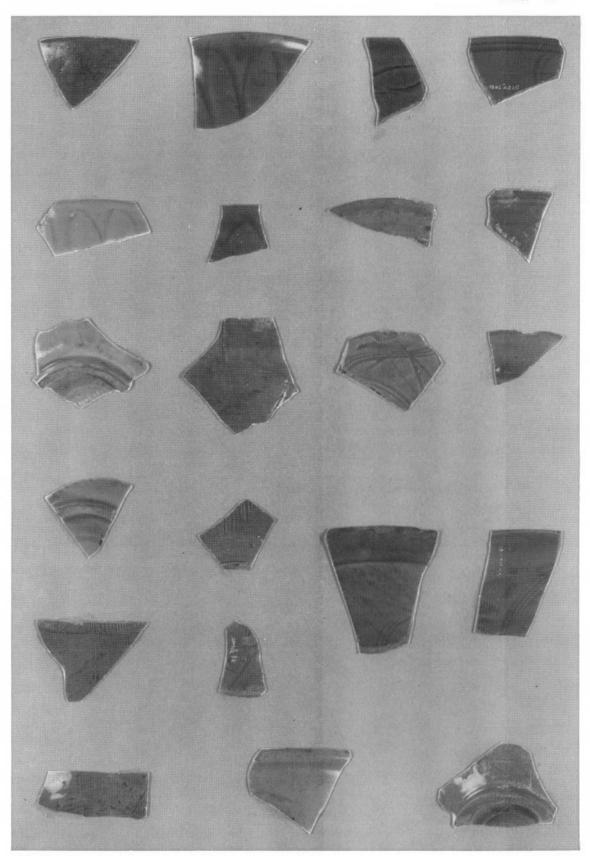
白 磁



1 白 磁



2 青 磁



## 山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

第 4 集

昭和52年3月31日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会 福岡市中央区西中洲 6-29

印刷隆文堂印刷株式会社 北九州市門司区畑田町1丁目